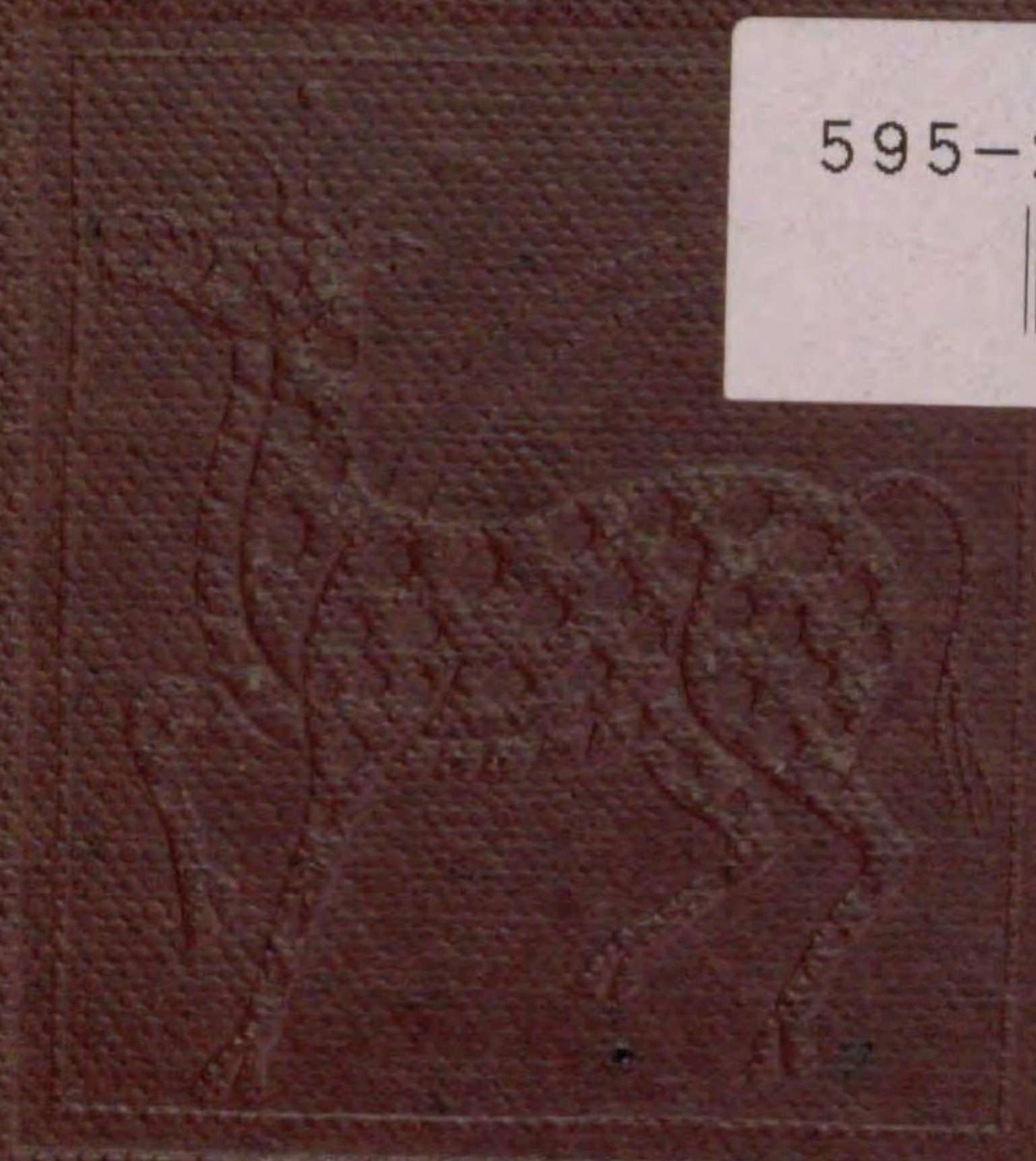


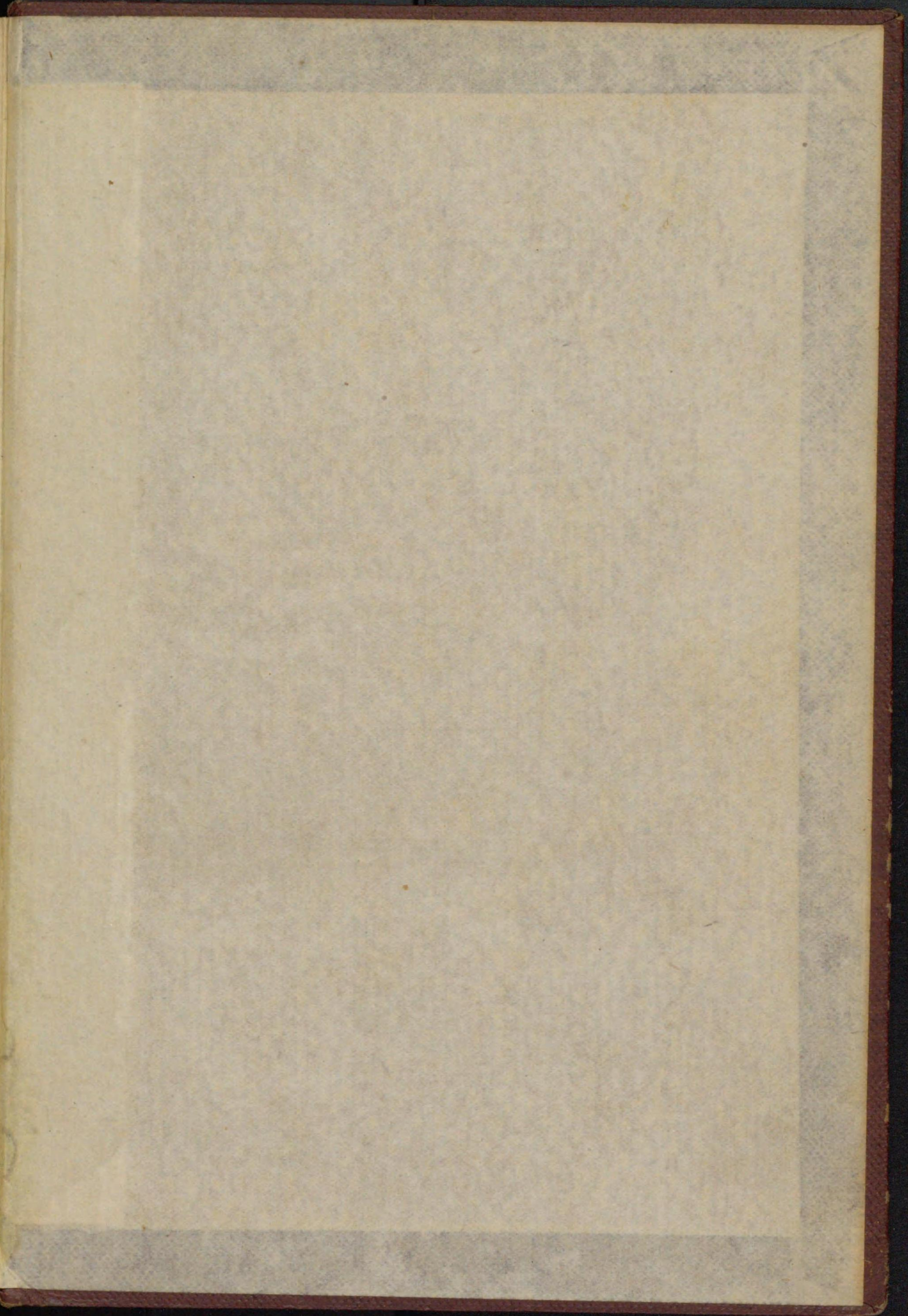
595-2651



1200501527443



中庸解義 簡野道明著





解義

簡野道明著



595
2654



中庸

解義



中庸解義

例言五則

一禮記中の中庸即ち古本は、鄭玄の注、孔穎達の疏にして、注解の今に傳はれる者の最も古き者とす。古本は全篇を三十三節に分ちたれども、程子は之に従はず、改めて三十七節に分つ。朱子が章句本を定むるに及びて、亦分ちて三十三章と爲せり。三十三の數に於ては古本と同じけれども、其の分截の法に至りては、甚だ同じからざる者あり。其の他、宋・明及び我邦の諸儒、各自家の意を以て、之が分截を試みたる者少から

ずと雖も、今日普通に行はるる者は、古本と朱子の章句本との二種に出でず。予の此の解義は、主として章句本を用ひ、旁ら古本と、諸家の箋註とを參酌し、更互演繹、之を斷ずるに鄙見を以てせり。

一昔、中庸の素讀を學ぶや、時に童蒙何をか知らん。唯師教に敬從し、晨夕熟讀、歴歴として誦を成すあるのみ。爾來沈潛反覆、書中の意義に於て恍然として得る所ある者の如し。乃ち此の解義を撰して以て世に問ふ。童習を回顧すれば、殆ど將に五紀ならんとす。

一今や世運一變して、教化陵夷、風俗頹敗、斯の道、鞠りて茂草と爲る。今に及びて、拔本塞源、西洋心醉の迷夢を打破し、東洋倫

理の淵源たる經學の振興を計り、以て皇道を明かにし、人心を正さざれば、國家の前途實に寒心に禁へざるなり。此の時に方りて本書の出づるは、決して偶然にあらず。然りと雖も、聖人の學徳、之を仰げば、彌高く、之を鑽れば、彌堅し。予の謏陋、未だ以て聖道の眞義を發揮するに足らず。所謂「買櫝還珠」の蔽なきを免れず。博雅の君子、其の不逮を匡さば、豈止予一人の欣幸たるのみならんや。

一講述の體裁は、一に論語解義の例に準據せり。且つ四書に説く所は要するに皆聖人の道を教ふるに在れば、其の所説の互に表裏を相成すは、固より當に然るべき所なりとす。故に講述の際、其の類似の語、相關の思想に會ふ毎に、一一之を指

示し、以て學者の比較研究に資す。
一卷末に「語句索引」を附載し、以て學者の檢索に便す。

中庸解義 目次

解題	一—四
中庸章句序	一
中庸序說	三七
第一章	四四
第二章	六五
第三章	六八
第四章	七一
第五章	七四

第六章	七五
第七章	七九
第八章	八三
第九章	八五
第十章	八八
第十一章	九五
第十二章	一〇三
第十三章	一一四
第十四章	一二三
第十五章	一三二
第十六章	一三七
第十七章	一四三

第十八章	一五一
第十九章	一五九
第二十章	一七一
第二十一章	二二四
第二十二章	二二六
第二十三章	二三〇
第二十四章	二三三
第二十五章	二三八
第二十六章	二四四
第二十七章	二五七
第二十八章	二六六
第二十九章	二七一

第三十章……………二八一

第三十一章……………二八六

第三十二章……………二九四

第三十三章……………三〇〇

語句索引……………三一五

中庸解義

解題

【書名】中庸の二字は、本書の中に見えて、實に全書の意義を總括したものであるから、取つて書名としたのである。中とは中正にして偏倚らず、過ぎたることもなく、及ばないこともない適當至善の意義であり、庸とは平常にして萬世に互つて易ることのない意義であるが、幾何學でいふ所の圓の中心や、數學でいふ所の一尺の「中」は其の半分の五寸であるといふやうに固定的のものではなく、時と場合と地位とによつてそれに順應した所の中正な道理を指したものである。されば孟子が孔子を評して「孔子、聖之時者也」（孟子通解六六〇頁）と曰つた「時」の

解題

字こそ眞の「中」であると謂つて可からう。それは本書第二章に「君子之
 中庸也。君子而時中」と曰つてあるのでも知られる。而して論語、雍也
 篇に子曰、中庸之爲、德也。其至矣乎。民鮮久矣。〔論語解義一九七頁〕といひ、
 書經、洪範篇に「皇建其有極。孔傳に皇は大極は中、大中の道を言ふ」とい
 ひ、論語、堯曰篇に堯の言を引いて「堯曰、咨爾舜、天之曆數在爾躬。允執其
 中。四海困窮、天祿永終。舜亦以命禹。〔論語解義六八三頁〕と曰つてあるや
 うに「中」は實に堯舜以來相傳の教であつて、儒學の根本義として四千
 年の今日に至つても少しも易ることがないのは所謂「諸ヲ古今ニ通
 ジテ謬ラズ、諸ヲ中外ニ施シテ悖ラズ」と曰つても決して差支がない。
 【著作の動機】さて中庸の書の作られた所以は、卷首に掲げてある朱子
 の中庸章句序に「中庸何爲而作也。子思子憂道學之失、其傳而作也」と
 いひ、伊藤仁齋の中庸發揮に「此篇專爲明道而作也。道也者、存於人倫

日用、達於天下萬世、而不可須臾離者也。當時諸子百家、各恣私說、虛無是
 尚、橫議是肆、莫能相統一。故首揭之曰、天命之謂性、率性之謂道。所謂性者
 便天所賦于我、本無所矯揉安排。循之則爲道、不循則非道。若異端之廢
 人倫、滅人情、蔑人事、豈可謂之循性之道哉。故子思於是首發明性、道、教三
 者之義、以爲中庸之小序。云と曰つたので明かである。蓋し當時老子の
 一派は、虛無玄妙、容易に窺知し難い哲學を首唱し、宇宙の本體から起
 見して、宇宙の本體が無爲自然であるから、人も亦無爲自然でなければ
 ならぬと説き、儒家の所謂道は先王の作爲したもので取るに足ら
 ないものであると口を極めて排斥した。そこで子思は世の中が澆淳
 になつて、異端邪説の爲に人心が眩惑せられ、先聖の道が漸く微にし
 て昏くなるのを憂へ、之に對抗する爲に此の書を作り、先づ開卷第一
 に「天命之謂性、率性之謂道」と曰つて、儒家の道は天命の自然に本づく

もので、決して先王の作爲でないといふことを明かにし、高く形而上に立脚地を定めて天人一貫の眞理を闡明したのである。されば物徂徠が「夫ノ子思ノ中庸ヲ作ルヲ觀ルニ、老氏ト抗スル者ナリ。老氏聖人ノ道ヲ僞ト謂フ。故ニ性ニ率フ之ヲ道ト謂ヒ、以テ吾ガ道ノ僞ニ非ザルヲ明カニス」(辨道)といひ、また「老子ノ徒、動モスレバ天ヲ言ヒ、性ヲ言ヒ、而シテ聖人ノ道ヲ譏リテ僞ト爲スナリ。故ニ子思性ニ本ヅケ天ニ本ヅケ、以テ聖人ノ道ノ僞ニ非ザルコトヲ明カニセシナリ」(中庸解)と反覆丁寧に説示したのは誠に要領を得た見解と謂つてよからう。

【大意】此の書、述作の動機がすでに前に述べたやうな次第であるから、先づ第一章に「天命之謂性、率性之謂道、脩道之謂教」と説いて、道の本原の天から出たものであることを道破した。これが此の書の大綱であつて、以下の諸説は皆これを演繹し敷衍したものと謂つて善い。ここ

に所謂天とは萬物を覆載する大宇宙を指したので、性とは個人に賦與せられた小宇宙である。それであるから吾人の心性の本體は、大宇宙の本體をそのまま完全に稟け得たものであつて、道とは即ち此の心性に率由すべきもの、教とは即ち此の道を修め明かにするものであるといふに在る。是れに由つて觀れば、聖人の教義が、如何にも中正平易であつて、人情に合し、常識に富んでゐることが明かに知られる。而して彼の徒に幽玄深奥な言辭を弄して、實行上に迂遠な老子の學説とは甚だしい逕庭のあることが判然する。それ故に「素隱行怪、後世有述焉。吾弗爲之矣」といふ孔子の言を引いて、自家の主張と立言の本旨とを明かにし、また「道不遠人、人之爲道而遠人、不可以爲道」といふ孔子の言を引いて、道は由來天命の性に率ふものであるから、誰でも之を知ることが出來、また誰でも之を行ふことが出来る日常卑近のもの

であつて、決して人に遠いものではないといふことを證明し、次に大舜・文武周公の實例を引き、或は孔子の言を引いて五倫・三達徳・九經等の義を明かにし、終に「誠」の道を説いた。誠は即ち中庸であつて、中庸は即ち誠であるからである。そこで宋の王魯齋は、第二十一章以下を主として誠を説いた者として、之を誠明章と名づけた。

此の書、章段の分け方に就いては古來諸家の説が一定してゐないが、朱子は分けて三十三章とし、更に此を三支に分ち、第一章から第十一章までを第一支とし、其の第一章は子思が傳ふる所の意を述べて言を立てたもので、之を綱とし、第二章から第十一章までは子思が孔子の言を引いて第一章の義を終ふるもので、之を目としてゐる。第十二章から第二十章までを第二支とし、其の第十二章は子思の言で、道は須臾も離るべからずといふ首章の意を申ねて明かにしたもので、第

十三章以下の八章は孔子の言を雜へ引いて、なほ其の意を明かにしたものであるとし、第二十一章から第三十三章までを第三支とし、其の第二十一章は子思が孔子の天道人道の意を承けて言を立てたもので、第二十二章以下の十二章は子思の言で、反覆其の意を説明したものであると曰つてゐる。なほ蔡虛齋の分け方は略朱子と同じであるが、それは中庸章句序(三三頁)の中に引いて置いたから、并せて参考とするが可からう。

【作者】此の書の作者を子思とすることに就いては、古來疑を挾む學者が少くない。宋の歐陽修・陳善・清の崔述(東壁)・姚際恆等が其の主なるものである。我が伊藤仁齋の如きは、此の書の前半(即ち第一章から第十五章ニ至ルマデ)を上篇として子思の作であるとし、第十六章以下篇末に至るまでを下篇として中庸の本文にあらずと主張してゐる。

れども、いづれも臆度の説で一家言たるに過ぎないから従はない。そこで史記孔子世家に「孔子生鯉、字伯魚。伯魚年五十、先孔子死。伯魚生伋、字子思。年六十二、嘗困於宋。子思作『中庸』とあるに従つて、斷じて子思の作と定むべきである。子思名は伋、孔子の孫で、業を曾子に受けた。子思の宋に困んだ事は、孔叢子に「子思年十六、宋ニ游ビ、大夫樂朔ト學ヲ言フ（中略）樂朔悦バズシテ退ク。曰ク、孺子我ヲ辱シムト。其ノ徒曰ク、請フ之ヲ攻メント。遂ニ子思ヲ圍ム。宋ノ君之ヲ聞キテ、駕シテ子思ヲ救フ。子思既ニ免ル。曰ク、文王ハ牖里ニ困ミテ周易ヲ作り、祖君孔子ハ陳蔡ニ畏シテ春秋ヲ作レリ。吾宋ニ困ム、作ルトコロ無カル可ケンヤト。是ニ於テ中庸ノ書四十九篇ヲ撰ス」とあるけれども、孔叢子は偽書であるから必ずしも悉く信ずることは出来ない。

但子思が壯年の時、衛に游事したことのあるのは、孟子、離婁下篇に左

の記事がある。曰く、子思、衛ニ居ル。齊ノ寇アリ。或ヒト曰ク、寇至ル、盍ゾ去ラザルヤト。子思曰ク、如シ伋去ラバ、君誰ト與ニカ守ラント。孟子曰ク、曾子、曾子、魯の武城に居りし時、越の寇あり、之を避けて去りし事あり。子思道ヲ同ジクス。曾子ハ師ナリ、父兄ナリ。子思ハ臣ナリ、微ナレバナリ。曾子、子思、地ヲ易フレバ、則チ皆然ラント（孟子通解五七六頁）と。後、魯に仕へて繆公に重んぜられ、師友を以て待遇せられた。孟子、公孫丑下篇に曰く、昔者魯ノ繆公、子思ノ側ニ人無ケレバ、子思ヲ安ンズルコト能ハズ（孟子通解二七九頁）と。また萬章下篇に曰く、繆公ノ子思ニ於ケル、丞しほしほ問ヒテ丞、鼎肉ヲ餽ル、子思悦ビズ。卒ニ於テヤ（中略）稽首再拜シテ受ケズシテ曰ク、今ニシテ而シテ後ニ君ノ伋ヲ犬馬モテ畜ヘルコトヲ知ルト（孟子通解六九七頁）と。又曰く、繆公丞、子思ヲ見テ曰ク、古、千乗ノ國、以テ士ヲ友トスルコト如何ト。子思悦ビズ（中略）子思ノ悦バザルヤ、豈

位ヲ以テスレバ、則チ子ハ君ナリ、我ハ臣ナリ、何ゾ敢テ君ト友タランヤ。徳ヲ以テスレバ、則チ子ハ我ニ事フル者ナリ、奚ゾ以テ我ト友タル可ケンヤト曰ハザランヤ云々(孟子通解七〇六頁)とある。之を要するに繆公は子思を重んじたけれども、之を重んずる所以の道を知らなかつたので、子思に悦ばれなかつたのである。また資治通鑑に「子思言苟變於衛侯(慎公)曰其才可將(五百乘)公曰吾知其可將(然)變也(嘗爲吏賦於民而食人二雞子故弗用也)子思曰夫聖人之官人猶匠之用木也取其所長棄其所短故杞梓連抱而有數尺之朽良工不棄今君處戰國之世選爪牙之士而以二卵棄千城之將此不可使聞於隣國也公再拜曰謹受教矣」とあるが、此の記事は原孔叢子に出てゐるのを司馬溫公が通鑑に採録したのであるが、前にも曰つた如く孔叢子は孔子家語と同じく偽書であるから、果してそれが事實であるか如何かは頗る疑はし

い。韓退之の送王埴序に「孟軻師子思、子思之學、蓋出曾子、自孔子沒、羣弟子莫不有書、獨孟軻氏之傳得其宗、故吾少而樂觀焉」とあるが如く、子思の學の曾子から出てゐることは、禮記檀弓上篇に、曾子と子思との問答の語を載せて、曾子、子思ニ謂ツテ曰ク「偁、吾親ノ喪ヲ執ルヤ、水漿口ニ入ラザルモノ七日」ト、子思曰ク「先王ノ禮ヲ制スルヤ、之ニ過グル者ハ俯シテ之ニ就カシメ、至ラザル者ハ跂シテ之ニ及バシム。故ニ君子ノ親ノ喪ヲ執ルヤ、水漿口ニ入ラザルモノ三日、杖シテ而シテ后ニ能ク起ツト」とあるのを見ても、曾子が子思を呼ぶに其の名の偁を以てしてゐるのは、師が弟子を呼ぶ稱であるばかりでなく、大戴禮中に收めてある曾子の著十篇と、子思の著中庸の文とは頗る相似てゐる點があるところから推しても、子思が曾子を師としたことは殆ど疑を容れる餘地がない。而して前に述べたやうに孟子は子思に師事した

のであるから、孟子七篇中の文章には中庸の學說を敷衍した條項が少くないのは怪むに足らない。且つ中庸の論旨が獨り孟子ばかりでなく他の論語・大學の所説と互に關聯合致してゐるのは、同じく堯舜周孔の道を祖述する儒家の見解であるから固より當然の事である。それ等類似の事項は成るべく本文の〔餘義〕の條下に於て説明を加へる事とした。

【傳來】此の書の傳來に就いては已に大學解義の解題に於て大學と併せて説明したから、重複を避けて、今は只中庸に關することのみを言はんに、此の書は大學と同じくもと禮記中から抄出して中庸傳二卷を撰んだのを始とするが、今は傳はらない。梁の武帝も亦中庸疏二卷、私記制旨中庸義五卷を撰んだが、これも亦傳はらない。唐の李翱は此の書を

尊んで、其の注疏ともいふべき復性書三篇を著した。宋に至つて胡瑗、陳襄、司馬光、范祖禹、周敦頤等皆此の書を尊重して、各講解或は箋注を作つた。特に程子に至りて大學論語孟子と配して四書と名つけ、子弟の教科書と爲し、朱子が章句を作つてからは、大に世に行はれるやうになつた。

【參考書】中庸を注解した書は、無慮數十百種あるが、其の中に就いて主要なる者を左に列記する。

- | | |
|--------|-----------|
| 中庸章句一卷 | 宋朱熹撰 |
| 中庸輯略二卷 | 朱熹撰 |
| 中庸或問一卷 | 朱熹撰 |
| 中庸直指一卷 | 明德清撰 |
| 中庸講義二卷 | 清朱用純(柏廬)撰 |
| 中庸闡義七卷 | 陳香國撰 |

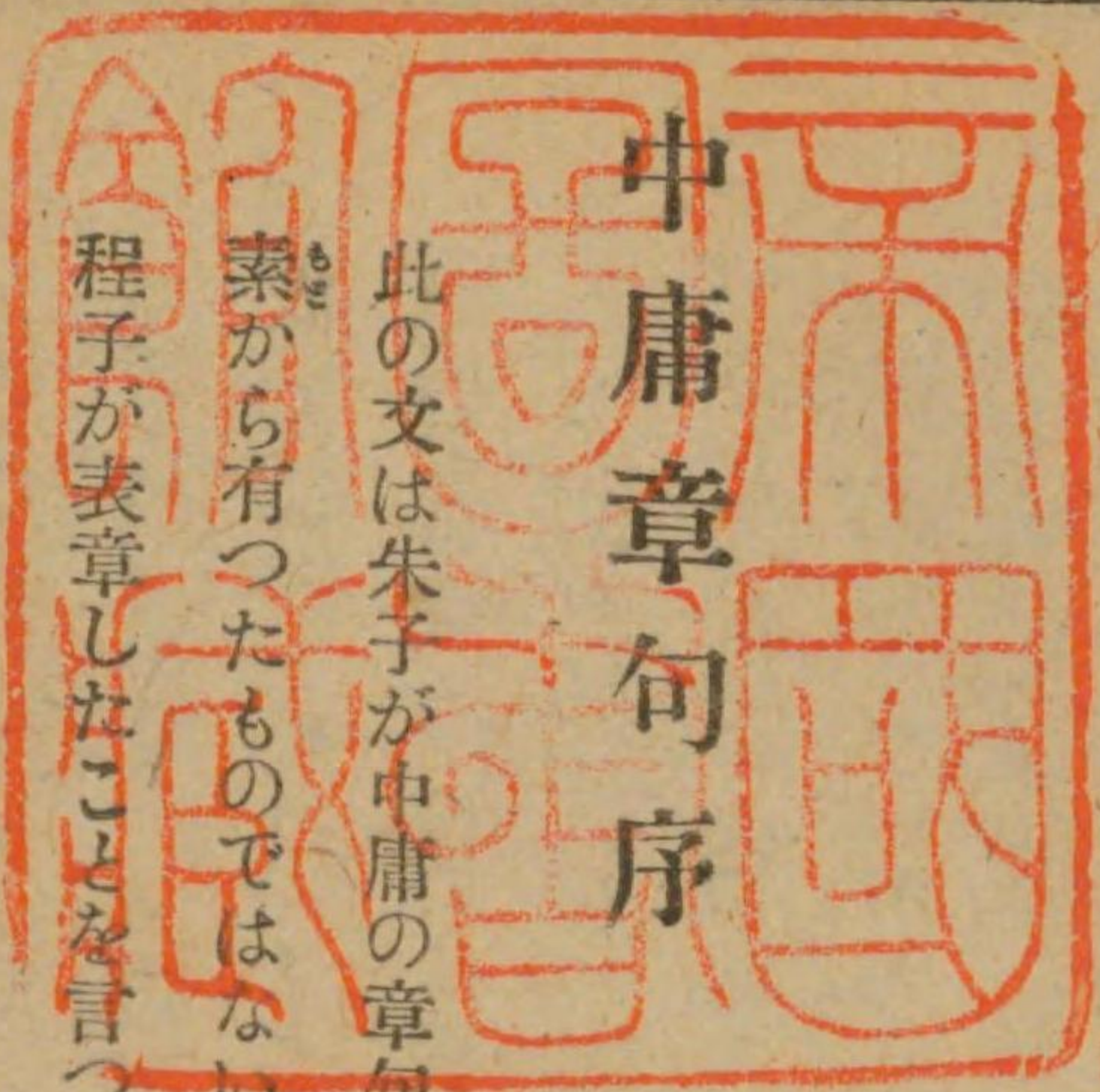
中庸發揮一卷	伊藤 維楨撰
中庸解一卷	物 徠撰
中庸原解三卷	太田 元貞撰
中庸釋解二卷	皆川 愿撰
中庸新疏、同結尾三卷	室 直 清撰
中庸欄外書三卷	佐藤 坦撰
中庸逢原一卷	中井積徳撰
中庸考二卷	龜井昭陽撰
中庸說一卷	安井 衡撰

右の外に四書合刻の注解書(大學解義解題一八頁所載)は中庸を研究するに當つても必ず参考の資と爲すべきことは勿論である。

中庸解義

簡野道明著

中庸章句序



此の文は朱子が中庸の章句を作るに因つて、其の序を爲つたので、詩經や書經の序のやうに素から有つたものではない、それで中庸序と曰はないで中庸章句序と稱した。大學の序には程子が表章したことを言つてあるが、中庸の書は前の【解題】の條に述べたやうに六朝以來已に久しく單行して宋儒の表章を俟たないから、程子の表章のことを言はないのである。章句は註といふに同じ(大學解義一頁參看)

中庸何爲而作也。子思子憂道學之失。其傳而作也。

【譯讀】中庸は何の爲めにして作りしや。子思子道學の其の傳を失はんことを憂へて作りしなり。

【字義】○中庸何爲而作也 史記の自序傳に「上大夫壺遂曰、昔孔子何爲而作春秋哉」とある。中庸大全に「朱子曰ク、曾子、孔子ニ學ンデ而シテ其ノ傳ヲ得、子思又曾子ニ學ンデ其ノ孔子ヨリ傳ハル所ノ者ヲ得、既ニシテ夫ノ傳ノ久遠ニシテ或ハ其ノ眞ヲ失ハンコトヲ懼ル、是ニ於テ此ノ書ヲ作爲ス」と。○子思子 子はもと男子の通稱であるが、後には尊稱・美稱にも用ひた。又上に子の字を加へたのは、後學が先儒を師として尊ぶの意である。大學の開卷第一に子程子とあるのも同じことである。子思は孔子の孫である。史記、孔子世家に「孔子生、鯉、字伯魚。伯魚年五十、先孔子死。伯魚生、伋、字子思、年六十二、嘗困於宋。子思作中庸」と。○道學 道義の學問、即ち儒學をいふ。道學の二字は王充論衡に出てゐるが、それは汎く學問を言つたので、趙宋に至つて始めて道學の目(宋史ニ道學傳アリ)があるのは、主として道義の學即ち三代以來相傳の正學を指して言つたのである。

【直解】中庸といふ書は何の爲めに作つたのであるか。それは子思が斯道の正しい學問が、孔子

以後今まで傳はつては居るけれども、世が末になるに従つて、異端邪説の爲めに妨げられて或は其の眞義を失ふやうになりはせぬかと心配して作つたものである。以上二十字は此の文の總冒で序の大意を概括し盡したものである。丁度大學の序の冒頭に「大學之書、古之大學、所ニ以教人之法也」とあるに同じである。

蓋自上古聖神繼天立極、而道統之傳有自來矣。

【譯讀】蓋し上古の聖神天に繼ぎて極を立てしよりして、道統の傳自つて來るもの有り。

【字義】○聖神 大學章句序(大學解義六頁)に見えた伏羲・神農・黃帝・堯・舜を指す。孟子、盡心下篇に「大而化之之謂聖、聖而不可知之之謂神」(孟子通解九九二頁)とある。許白雲曰く「此ハ是レ堯・舜以前ヲ言フ。夫子易ヲ翼シテ伏羲ニ始マル。今ノ聖人ヲ言フ者、必ズ伏羲ヨリ始マル。然レドモ開闢物ヲ生ジテ以來、即チ庶物ニ首出スルノ聖人、天ト道ヲ同ジクシテ其ノ位ニ立ツ者アリ。但前聖未ダ道ハザル所、故ニ其ノ名ヲ知ラズ。此ニ但上古ノ聖神ト言フハ、蓋シ混ジテ之ヲ言フ。又大學章句ノ序ニ專ラ伏羲ヲ以テ始ト爲スガ如クナラザル

ナリ」と。○繼天立極 大學章句序(大學解義六頁)に見ゆ、伏羲より堯舜に至る古の聖人が天命を受けて天子となり、天意を承け繼ぎて天下萬世の標準を立て萬民を教化するを謂ふ。極は至極せる模範の意。書經、洪範に「皇建其有極」とあつて、註に「極ハ猶ホ北極ノ極ノ如シ、至極ノ義、標準ノ名、中立シテ四方ノ正ヲ取ル所ノ者ナリ」とある。○道統 道學即ち儒教の正しい系統を謂ふ。佛家にて傳燈といふに同じである。道統の説は唐の韓退之の原道に「堯以是傳之舜、舜以是傳之禹、禹以是傳之湯、湯以是傳之文武周公、文武周公傳之孔子、孔子傳之孟軻、軻之死、不得其傳焉、荀與揚也、擇焉而不精、語焉而不詳」とあるに始まつてゐるが、朱子に至つて明かに道統の語を用ひたのである。蔡虛齋曰く「道學之有レ成者、始得レ以レ與ニ 夫道統、道學以レ講レ道言、道統以レ傳レ道言」と。以て道學と道統との別を知るべきである。孟子通解一〇二五頁に道統相傳圖が載せてあるから參看するが善からう。

【直解】蓋し之を推し測つて思ふに、上古の聖徳神明な人が立つて天子となり、天意を承け繼いで立派な民の模範を立ててから、道の正しい系統の傳來は由つて來る所があつたのである。此の十九字は前文を承けて道學の系統の傳授あることを謂つたので、道統の二字は此の序の

綱領である。

其見於經、則允執厥中者、堯之所以授舜也。人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執厥中者、舜之所以授禹也。堯之一言、至矣盡矣、而舜復益之以二三言者、則所以明夫堯之一言、必如是而後可庶幾也。

【譯讀】其の經に見ゆるは、則ち允に厥の中を執れとは、堯の舜に授けし所以なり。人心惟れ危く道心惟れ微なり、惟れ精惟一、允に厥の中を執れとは、舜の禹に授けし所以なり。堯の一言、至れり盡せり。而るに舜復た之を益すに三言を以てせしは、則ち夫の堯の一言、必ず是の如くにして而して後に庶幾す可きを明かにせし所以なり。

【字義】○經 聖人の言を記した書、ここは論語の堯曰篇(論語解義六八三頁)と、書經の大禹謨とを指す。○允執 厥中 論語の堯曰第二十に見えてゐる。允は信なり、眞實なり。執は守

つて失はざるの意。厥は其と同じ、中は中正で時の宜しきに適ひて、過不及のないこと。朱子曰く「中只是箇恰好底道理」と。凡そ世の中の萬事は、中を得なくてはならぬ。今卑近の例を擧げて言へば、米を炊ぐに、薪を去り火を滅すことが早過ぎると生煮の飯が出来、晚いと焦る。早過ぎもせず、晚過ぎもせず、程よき節を失はなければ、生熟の中を得て、剛くもななく柔かでもない、味の佳い飯が出来る。これは饔婦の巧者なのである。又其の飯を食べる者が、少きに失すれば飢ゑて力なく、多きに過ぐれば飽いて胃を害する。能く飢ゑもせず、飽きもしないで、口腹を養ふのは、衛生を重んずる者の秘訣である。聖人が中を執るの妙諦も亦此のやうなものである。○堯之授舜 堯が天下を舜に譲らうとする時、訓戒した語の全文は論語堯曰篇(論語解義六八三頁)に出てる。○惟精惟一 精は「クハシ」と訓む。道心・人心の二つを精密に識別をして二者を混雜せしめないこと。一は「モツバラ」と訓む。專一に本心の正即ち道心を守つて取り失はないこと。朱子曰く「惟精トハ之ヲ精密ニシテ雜ルナキ也。惟一トハ首アリ尾アリテ專一ナル也」と。○至矣盡矣 至矣は至極の言で、其の上に復加ふべきものが無いこと。盡矣は十分に該括して餘蘊のないこと。○人心惟危云云 此の四句十六字は、書經の大禹謨篇に出てる。宋學では之を虞廷(虞ハ舜ノ號)の傳心訣と稱して、最も尊

重してゐる。さて人の心は惟一であるが、それを人心と道心とに分けて云ふのは、人心は吾人が肉體の刺戟を受する心で、道心は吾人が本來自然に具有する所の道義の心である。吾人が外物の刺戟を受する時は、心は肉體の欲の爲めに迷はされ易いが故に、人心惟れ危しと謂ふ(朱子ハ「危トハ陥ラント欲シテ未ダ陥ラザルノ辭」ト註シテキル) 已に迷うて覺ることがなければ、其の本來具有する道義の心は、物欲の爲めに蔽はれて味くなるから、道心惟れ微なりと謂ふ。精はいづれが人心であり、いづれが道心であるかと、精密に考察すること、一は本心の正を守つて失はないこと。陳定宇曰く「必ズ人心ノ危ク、道心ノ微ナルヲ知リテ、而シテ精一ノ工夫ヲ致シ、然ル後ニ允執ニ厥中ニコトヲ庶幾ス可キ也」と。尙ほ此の四句の意は下文に朱子が詳しく論じてゐるから、それに就いて理會するが善い。

【直解】さて其の聖人が道統を相傳ふることの經書に見えてゐるのを擧げて言へば、則ち論語、堯曰篇に出てる、眞實に其の中正を執り守つて失ふこと勿れと教へ戒めたのは、堯が位を舜に譲らうとする時に授けた所の訓戒の辭である。また書經の大禹謨に見えてゐる、人の心は肉體がある爲めに動すれば物欲に迷うて、邪なる道に陥るの危険があり、従つて人が本來具有する道義の心は、物欲の爲めに蔽はれて微にして味くなりがちである。それ故に人は宜

しく人心と道心との區別を精密に考察して、人心の私欲を雜へず、只管に道義の正しい心を守つて失はないやうにし、かくして眞實に其の中を執り守らねばならぬ、との教は、舜が天下を禹に譲らうとする時に訓戒せられた辭である。

さて堯が「允執其中」と云つた一言で、至らぬ限なく、盡さぬ所なく十分であるのに、舜がまた更に「人心惟危、道心惟微、惟精惟一」の三句を附け加へたのは、彼の堯の「允執其中」の一言、即ち執中の義は、必ず此の「惟精惟一」の工夫を積んで而る後に始めて實現することが出来ること云ふことを明かにした所以である。以上論語及び大禹謨を引いて、中庸の思想の本づく所を説明したのである。

【餘義】舜が三句を増した理由は、朱子語錄に「堯告舜只一句、舜已曉得、所以不復更說、舜告禹又添得三句、是舜說得較子細、這三句是允執中以前事、是舜教禹做工夫處、便是怕那禹尙未曉得、故恁地說」とあるので明白である。即ち堯の舜に授けたのは單に中正の大道を執り守つて失はないやうにせよとの意に止まるが、舜の禹に授けるに當つては其の大道に至り達するまでの工夫をも附け加へて之を訓戒せられたのである。蓋し人は日に己の身を三省して、常に道心が主となり、人心は其の命令を聽くやうに心掛ければ甚だし

い間違は無いが、世の降るに従つて社會が複雑となり、人の心も私欲横生して次第に輕薄に流れ行くから、舜はそれを憂へて深切丁寧に戒め告げられたのであらう。

蓋嘗論之。心之虚靈知覺、一而已矣。而以爲有人心道心之異者、則以其或生於形氣之私、或原於性命之正、而所以爲知覺者不同。是以或危殆而不安、或微妙而難見耳。

【譯讀】蓋し嘗みに之を論ぜん。心の虚靈知覺は一のみ。而るに以て人心道心の異ありと爲す者は、則ち其の或は形氣の私に生じ、或は性命の正に原づくを以て、知覺を爲す所以の者同じからず。是を以て或は危殆にして安からず、或は微妙にして見難きのみ。

【字義】○嘗「ココロミ」と訓む。試に同じ。○虚靈知覺 心は形が無いから虚と云ひ、其の働が靈妙であるから靈と云ふ、知は是非を辨別する心の働で、覺は感覺をいふ。虚靈は心の本體で知覺は心の用である。○人心、道心之異 人心は不正な私欲とは同じでない。聖人は不正な私欲を絶つが、人心は絶つことを爲さない。飲食男女は人心であるが、其の正であるか不正

であるかを知るのは道心である。其の正を得るのは道心が主と爲つて、人心が其の命を聽くからである。蒙引に「是ノ人アレバ、則チ是ノ耳目鼻口四肢ノ類アリ。故ニ耳目鼻口四肢ノ欲ヲ以テ人心ト爲ス。道心ハ仁義禮智ノ性ヲ指ス。則チ純ラ是レ一箇ノ天理ニシテ、形氣ノ得テ雜ル所ノ者ニ非ズ。張子ノ所謂天地ノ性ナリ。故ニ道心ト曰フ」と。○形氣之私 形氣は肉體である、私は公共の反對で、個人的といふ意。個人的で自己の私有とするもの即ち人心を指す。人心は即ち形氣の私に生ずるものであるが、必ずしも惡では無いけれども、兎角度を過し易いものであるから決して油斷は出来ない、それで前に人心惟危と言つてある。朱子曰く「形氣是耳目鼻口四肢之屬、未レ可ニ便謂ニ之私欲、但此數件事、屬ニ之自家、便是私有底物、不レ比ニ道便公共」と。眞西山曰く、「私者猶言我之所獨耳、今人言私親私恩之類是也」と。○性命之正 性は人の「ウマレツキ」命は天の命じて賦與する所、中庸開卷第一に「天命之謂性」とあるに本づく。天の命じて賦與した人の本性は、もと正しくして邪がないから、性命の正と云ふ。道心は即ち性命の正に原づくものである。陳定宇曰く「有形氣之私、方有ニ人心、故曰生。自賦命受性之初、便有道心、故曰原」と。○危殆 人心に就いて言ふ、殆も危なり。危殆即ち「アヤフシ」とはまだ惡と云ふのではないが、形氣の私欲を放縱にす

る時は、やがて惡に陥らうとする危険があるをいふ。朱子曰く「危未ニ便、是不好、只是危險、在ニ欲レ墮未レ墮之間、易レ流ニ於不好耳」と。○微妙 道心の「ハタラキ」の見難いのを言ふ。妙も「カスカ」微なれば明かにし難く、時に少しばかり明かならうとしても亦直に暗くなるをいふ。朱子曰く、「微者難レ明、有レ時發見、些子、使ニ自家、見得、有レ時又不レ見了」と。○難レ見 察識し難きをいふ。

【直解】前を承けて帝舜が、人心惟危云云の三句を附け加へた理由を蓋しまあ試みに之を論じて見よう、人の心の虚にして形の見るべきものなく、其の作用は靈妙にして是非善惡を辨へ知り、寒冷暑熱や饑渴やを感覺することは誰人も同一である。然るに人心と道心との二つの區別の生じたのは、或は吾人の肉體の個人的方面から生じ、耳目口鼻四肢の欲となつて見れる方面から、之を人心と云ひ、或は天の命する吾人の本性の正しいのに原づき、道義の心となつて見れる方面から之を道心と云つたのである。そこで人心の方が強いが、道心の方が勝つかによつて、人人の知覺する所も同一でない。さて人心即ち耳目口鼻の欲は、惡では無いが、動もすれば惡に陥り易い危険があつて實に不安の状態にあつて少しも油斷の出来ないものである。道心即ち道義の心は、固より至善なものではあるが、微妙にして明かにし難

く、偶、少しばかり明かならうとしても、亦忽ち暗くなつて十分に察識し難いやうになるものである。

然人莫不有是形。故雖上智不能無人心。亦莫不有是性。故雖下愚不能無道心。二者雜於方寸之間。而不知所以治之。則危者愈危。微者愈微。而天理之公。卒無以勝。夫人欲之私矣。

【譯讀】然れども人は是の形あらざること莫し。故に上智と雖も人心なきこと能はず。亦是の性あらざること莫し。故に下愚と雖も道心なきこと能はず。二者方寸の間に雜つて、而も之を治むる所以を知らざれば、則ち危き者は愈々危く、微なる者は愈々微にして、天理の公、卒に以て夫の人欲の私に勝つこと無し。【字義】○方寸之間 心をいふ。列子に「吾見子之心矣、方寸之地虚矣」と。○治之之 心を指す、治は人心をして命を道心に聽かしめ、道心をして人心を檢制せしむるを謂ふ。前の

「惟精惟一」の工夫の如きは是である。朱子曰く「人心ハ卒徒ノ如ク、道心ハ將帥ノ如シ」と。○天理人欲 此の語は禮記の樂記篇に見ゆ。天理は道心の發する所で、人欲は人心の惡に流るるものをいふ。胡雲峯曰く、「人心未便是人欲、到不知所以治之、方說得人欲」と。○公私 公は公正の意と、公共の意とがある。私は公の反對で、人欲の私は天理の公に對していひ、利己的の意に用ひたのである。

【直解】然しながら凡そ人と生れては誰でも此の形體がない者は無いから、たとひ上智の聖人でも、此の肉體から生ずる耳目口鼻四肢の欲即ち人心が無い譯にはゆかない。例へば饑えては食ひ渴しては飲むやうなことは、聖人と雖も之を免れることは出来ないやうなものである。亦人と生れては誰でも是の天から賦與せられた本性が無いものは無いから、たとひ下愚の凡人でも、天命の性に本づく道義の心、即ち道心の無いことは出来ない。即ち下愚の凡人でも皆道心を有して居る。例へば赤子が將に井に陥らうとするのを見れば「ハッ」と驚いて如何にも可哀想だと思ふ惻隱の心は誰でも有つて居る(孟子通解二二頁)やうなものである。さて聖人も下愚の凡人と同じく人心を有つて居るけれども、凡て其の正しきを得て居るから、絶えて人欲の私がない。下愚の人も道心を有つては居るけれども、微にして明かにし難く、人

欲の私に流れ易いのである。さて誰でも道心・人心の二つが、心の中に雜然としてまじつて居るのであるから、之を治める方法即ち道心を益、明かにして人心を制裁し、私欲に陥らないやうにする工夫を知らないと、危い所の人心は愈危く、微なる所の道心は愈微となつて、天理の公道は卒にかの人欲の私に勝つことが出来なくなるのである。之を要するに道心・人心の二者が心の中に雜るのは、上智の人も下愚の人も同じであるが、智者は之を治める所以を知つてゐるから、其の徳が益、進み、愚者は之を治める所以を知らないから、人心が愈危く、道心が愈微になるのである。

精則察夫二者之間而不雜也。一則守其本心之正而不離也。從事於斯、無少間斷、必使道心常爲一身之主、而人心每聽命焉、則危者安、微者著、而動靜云爲、自無過不及之差矣。

【譯讀】精とは則ち夫の二者の間を察して、而して雜へざるなり。一とは則ち其の本心の正を守りて、而して離さざるなり。事に斯に従つて少の間斷なく、必

ず道心をして常に一身の主と爲り、而して人心をして毎に命を聽かしむれば、則ち危き者安く、微なる者著はる。而して動靜云爲、自ら過不及の差無し。

【字義】◎精・一 解は前の「惟精惟一」の條に出づ。◎察 察識することの精密なること。◎守 持守することの專一なること。◎從事於斯 斯は「惟精惟一」の工夫を指す。從事は其の事に従ひ勤めること。◎間斷 「タエマ」をいふ。◎動靜云爲 易の繫辭下傳の語、動靜は語默起居の類。云爲は事に應じ物に接すること。此の四字で、人の言語動作を該ね盡してゐる。

【直解】惟精惟一の精といふのは、則ち前に述べた人心・道心の二つの者の間の關係を精密に考察し、識別して二つの者を混雜せしめないことである。また惟一の一とは、則ち我が本心の正しきもの即ち天命に本づける道心の正を固く執り守つて離し失はないことである。この精一の工夫こそは則ち人心・道心を治める所以であるから、平生此の方法を勤め行つて、少しの油斷即ち「タエマ」もなく、必ず道心をして常に一身の主宰者とならしめて、人心をして事に従ひ、道心の命令を聽いてそれに従はしめるやうにすれば、兎角危くなりがちの人心も安らかになつて、惡に陥るの心配もなくなり、微かになりがちの道心も著明となり、そして其の言

語動作は自然に中正の道に合ひて、或は過ぎたり或は及ばなかつたりする差違がなくなるやうになるであらう。以上は前に引いた「人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執其中」の四句を説明したのである。

夫堯舜禹天下之大聖也。以天下相傳天下之大事也。以天下之大聖行天下之大事而其授受之際丁寧告戒不過如此則天下之理豈有以加於此哉。

【譯讀】夫れ堯舜禹は天下の大聖なり。天下を以て相傳ふるは天下の大事なり。天下の大聖を以て天下の大事を行ひ而して其の授受の際丁寧告戒すること、此の如きに過ぎざれば則ち天下の理豈以て此に加ふる有らん哉。

【字義】○授受 授はさづける、受はうける、天下を授けたり、受けたりすること、即ち堯は舜に授け、舜は禹に授け、また舜は堯から受け、禹は舜から受けたことをいふ。○丁寧 懇切に告げ戒めること。○告戒 告は語けるなり、示すなり、戒は警なり。○如此 加於此 二つの此の字は上に述べた「執中」の教を指す。

【直解】さて過不及がなく、事毎に中正を得るほど大切なことはない。夫れ堯・舜・禹の三帝は天下の大聖人である。天下を以て相傳へ授けるのは天下の大事である。此の天下の大聖人が天下の大事を行つて天下を譲り授けたり、譲り受けたりする際に丁寧深切に告げ戒められたことは、上に述べた中を執るの工夫に過ぎないとして見れば、天下至極の道理は此の執中二字に該ね盡して居るので、どうしてこれ以上に附け加へることがあらうか、決してありはしない。中庸章句の序は當に分つて三段となして看るが善い。章首から此に至るまでを第一段と爲す。中庸道學の傳は、堯・舜の二聖帝が、天下を授受する際の心法に本づくことを推し原ねて説明したのである。

【餘義】胡雲峯が「天下之理、豈有以加於此者、中之一字、聖聖相傳之道、莫加於此也。精二字、聖聖相傳之學、莫加於此也」と曰つて、道と學とに分けて精一の工夫を兼ねて見たのは是でない。ここは天下の事物の至理は一の中の字で十分に該ね盡して、復たそれ以上に増し加へることの無いことを言つたのである。

自是以來、聖聖相承。若成湯、文武之爲君、臯陶、伊、傅、周、召之

爲^ル臣、既^ニ皆^テ以^テ此^ヲ而^レ接^ニ。夫^ノ道^ノ統^ノ之^レ傳^ヲ。

【譯讀】是より以來、聖相承く。成湯、文、武の君たる、皐陶、伊、傅、周、召の臣たるが若き、既に皆此を以て夫の道統の傳を接せしなり。

【字義】○成湯 殷の湯王のこと、無道な夏の桀王を伐つて之を南巢に放ち、遂に天下を有ち、國を商(殷)と號した。即ち武功を成就したから成湯と稱す。○文・武 周の文王と武王と。○皐陶 舜の時の賢相で司法官となつた人。○伊・傅 伊尹・傅説の二人。伊尹は成湯を助けて天下を取らしめた賢相。傅説は殷の高宗を助けて殷の中興の主とならしめた賢相。○周・召 周の成王を佐けた賢臣、周公旦と、其の弟の召公奭と。○既 將に下の夫子の傳を發せんとして先づ此の字を下したのである。○以^レ此 此は執^レ中を指す。精一を兼ねて説くのは非である。○接 相續ぐ意。

【直解】堯・舜・禹の三聖人が「執^レ中」の教を相傳してからは聖人から聖人へと次次に相受け繼いだのである。そこで君主としては殷の成湯・周の文王・武王のやうな聖王、臣下としては皐陶・伊尹・傅説・周公旦・召公奭などのやうな聖人が既に皆此の執^レ中の教を以て、かの道統の傳を

承^レけ續^レいだるのである。

若^キ吾^ガ夫^子、則^モ雖^ト不^レ得^ル其^ノ位^ヲ、而^モ所^レ以^テ繼^ニ往^キ聖^ヲ、開^キ來^ニ學^ブ其^ノ功^ヲ、反^テ有^リ賢^ニ於^テ堯^ノ舜^ノ者[。]然^レ當^ニ是^ノ時^ニ、見^テ而^レ知^ル之^者、惟^テ顏^氏・曾^氏之^レ傳^ヲ得^ル其^ノ宗^ヲ、及^テ曾^氏之^レ再^ニ傳^ニ、而^レ復^テ得^ル夫^子之^レ孫^子思[。]則^チ去^リ聖^ヲ、遠^ク而^レ異^ニ端^ヲ起^ス矣[。]

【譯讀】吾が夫子の若きは、則ち其の位を得ずと雖も、而も往^キ聖^ヲを繼^フぎ、來^ニ學^ブを開^キし所以のもの、其の功反つて堯舜に賢る者あり。然れども是の時に當つて、見^テ之^ヲを知る者は、惟^テ顏^氏・曾^氏の傳のみ其の宗を得たり。曾氏の再傳に及びて復た夫子の孫子思を得たり。則ち聖を去ること遠くして、異端起れり。

【字義】○吾夫子 夫子とはもとは「アナタ」といふが如く、貴賤尊卑に通じて用ひたが、論語に、孔子のことを門人が夫子と稱してから専ら先生といふ意即ち師を呼ぶ尊稱とするやうになつた。ここでは孔子を指す、吾夫子とは尊み親んでいふ。○其位 人民を治める君主、即ち統治者たる位。○繼・開 此の二字亦之を傳ふる意である。○往^キ聖 過去の世に出た聖

人、即ち堯・舜・禹・湯・文・武等を指す。◎來學 後來の正道を學ぼうとする學者を指す。◎賢_ニ於堯舜_一 孟子、公孫丑上篇に「宰我曰、以_レ予觀_ニ於夫子_一、賢_ニ於堯舜_一、遠矣_レ」(孟子通解一九五頁)とあるに本づく。宰我の意は孔子の道德の盛んなことが、堯舜にも賢ることの遠いのを謂つたのであるが、朱子は孟子集注に程子の説を引いて曰く「語_レ聖則不_レ異、事功則有_レ異、夫子賢_ニ於堯舜_一、語_ニ事功_一也。蓋堯舜治_ニ天下_一、夫子又推_ニ其道_一、以_レ垂_ニ教萬世_一、堯舜之道、非_レ得_ニ孔子_一、則後世亦何所_レ據哉」とあるのに從つて書いたやうであるが、實は非である。孔子の教が萬世の範たることは、今日より之を稱することが出来るのみで、宰我が當時に在つて如何して孔子が後世に垂れた事功を想像して堯舜にも賢るといふことを豫言することが出来ようぞ、それは出来ない。しかし此の一節は朱子が程子の謬説に從つて書いたのであるから、それによつて解釋するより外に致し方がない。◎見而知_レ之 親しく其の人に接して感化を受けること。孟子、盡心下篇に「孟子曰、由_ニ堯舜_一、至_ニ於湯_一、五百有餘歲、若_ニ禹・皐陶_一、則見而知_レ之、若_ニ湯則聞而知_レ之_一」(孟子通解一〇二頁)とあるに本づく。◎顔氏・曾氏、顔回と曾參と。◎得_ニ其宗_一 父の家を承_レけ繼_レぐ長子を宗子といふ。宗は即ち正統の意、曾子が聖人の道を傳へたのは猶ほ長子が父の家を承_レけ傳へたやうなものである。故に得_ニ其宗_一といふ。◎再傳 弟子の

弟子で、即ち孫弟子の意、子思は曾子の門人に學業を受けたのである。◎異端 聖人の正道と異なり、別に一派を爲してゐる學説、老子・莊子・楊子・墨子の類を指す。

【直解】吾が孔子の如きは、下萬民を治める統治者即ち君主たるの地位を得られることは出来なかつたけれども、「執_レ中_一」の正道を過去の聖人から受け繼いで、教を萬世に垂れ、後來の道を學ぼうとする者を開き導かれたので、其の功業は反つて堯・舜よりも賢るものがある。(賢_ニ於堯舜_一ハ宰我ノ語ヲ借用シタルガ、意義ハ【字義】ニ出テキル程子ノ説ニ從ツテ書イタモノノヤウデアル、宰我ノ語ノ注釋トシテハ當ラナイガ、其レニ關係シナイデ、朱子ノ意見デ書イタモノトシテ見レバ少シモ差支ハ無イ)然しながら其の時に當つて、多くの弟子の中で親しく孔子に接して其の感化を受け、此の正道を悟り得た者はただ顔回・曾參二子の傳へた所が、其の正統を得てゐるのである。曾氏の孫弟子になつて、また孔夫子の孫の子思が出て道の正統を承_レけ傳へることが出来た。しかし此の時は聖人孔子の世を去ることが愈遠くなつて、老・莊や楊・墨のやうな聖人の正道に反_レいて別に一派を爲してゐる異端の邪説が起つて來た。

子思懼_ニ夫愈久而愈失_一其真也、於是推_ニ本堯舜_一以來相傳之

意質以平日所聞父師之言更互演繹作爲此書以詔後之學者蓋其憂之也深故其言之也切其慮之也遠故其說之也詳其曰天命率性則道心之謂也其曰擇善固執則精一之謂也其曰君子時中則執中之謂也世之相後千有餘年而其言之不異如合符節歷選前聖之書所以提挈綱維開示蘊奧未有若是之明且盡者也

【譯讀】子思夫の愈久しうして愈其の眞を失はんことを懼るるや是に於てか堯舜以來相傳の意に推し本づき質すに平日父師に聞ける所の言を以てし更互演繹して此の書を作爲し以て後の學者に詔ぐ。蓋し其の之を憂ふるや深し。故に其の之を言ふや切なり。其の之を慮るや遠し。故に其の之を説くや詳かなり。其の天の命性に率ふと曰ふは則ち道心の謂なり。其の善を擇びて固く執ると曰ふは則ち精一の謂なり。其の君子時に中すと曰ふは則ち中を

執るの謂なり。世の相後ること千有餘年而るに其の言の異ならざること、符節を合はするが如し。前聖の書を歴選するに綱維を提挈し蘊奧を開示する所以未だ是の若く明かにして且つ盡せる者はあらざるなり。

【字義】◎質「タダス」と訓む。證據として其の是非當否を正し定めること。◎父師父は祖父の孔子、師は子思の師。◎更互演繹父や師の言をかはるがはる引證して中庸の旨を演べたづねる。即ち更迭交互して推演抽繹するをいふ。◎詔、告げ教ふるなり。◎憂レ之也深憂の深いのは、道の明かでないが爲めである。◎切、深切なり。◎慮レ之也遠慮ることの遠いのは、久しくして其の眞を失はんことを恐れるからである。◎符節「ワリフ」玉で爲り、文字を篆刻して之を中分して、彼と此と各、其の半を藏し、事故あれば左と右と相合せて信とするもの。如合符節は孟子、離婁下篇（孟子通解五一頁）に出づ。兩者の相同じきに喩ふ。◎歴選歴は盡なり「アマネク」數へしらべる意。◎提挈「ヒツサゲル」◎綱維綱は「オホツナ」維は「ツナ」綱維は借りて道の太いにして要なる者を言ふ。◎蘊奧蘊も亦奥なり、奥は室の西南隅、借りて道の「オクアカキ」處の節目の詳細をいふ。

【直解】子思は夫の愈年代が久しくなつて愈正道の眞相を失はんことを心配されたので、そこ

で、堯舜から以來相傳へた眞義を推しそれに本づけて、其の是非當否を正すに平生父や師に聞いた言を以て證據とし、かはるがはる比較研究して其の眞義を演べ釋ねて此の中庸の書を作つて後進の學者に告げ示し、異端の説に惑はされないやうにせられたのである。そこで推し測つて思ふに、子思が世が衰へて道の明かでないのを憂ふことが深い所からして、其の之を言ふことが深切である。其の年久しくして復た中庸の道の眞義を失はんことを慮ることが遠大であるからして、其の之を説くことが詳密で徹底してゐる。中庸の首章に「天ノ命ズル之ヲ性トイヒ、性ニ率フ之ヲ道ト謂フ」と云つてゐるのは、即ち此の序文の初に述べたところの道心と同じ義である。又中庸の第二十章に「善ヲ擇ビテ固ク執ル」と云つたのは即ち「精一」の謂である（細説スレバ中庸ニアル「擇善」ハ舜ガ禹ニ授ケタ辭ノ中ノ「惟精」ノ精ノ謂デ、「固執」ハ舜ガ禹ニ授ケタ辭ノ中ノ「惟一」ノ一ノ謂デアル）また中庸の第二章に「君子時ニ中ス」とあるのは、即ち「執中」と同じ義である。堯舜の時から子思の生れ出た時までは千餘年も経てゐるけれども、其の言つたことの異はないことは恰も符節を合はせたやうに同じく合つてゐるのである。徧く前代の聖人の著された經書を一一選り出して調べて見るに、中庸の道の根本大綱を提げ示すと共に奥深くして節目の精細な處を開き示すこと、是の中庸の書の

やうに明かで且つ徹底的に説き盡してゐる者は無いのである。

自是而又再傳以得孟氏爲能推明是書以承先聖之統及其沒而遂失其傳焉則吾道之所寄不越乎言語文字之間而異端之說日新月盛以至於老佛之徒出則彌近理而大亂眞矣。

【譯讀】是よりして又再傳して以て孟氏を得たり。能く是の書を推し明めて以て先聖の統を承くることを爲せり。其の沒するに及んで而して遂に其の傳を失へり。則ち吾が道の寄る所は言語文字の間に越えず而して異端の説日に新に月に盛にして以て老佛の徒出づるに至りては則ち彌理に近くして大に眞を亂せり。

【字義】○孟氏 孟子の著者である孟軻。○統 道統をいふ。○言語文字 言語は訓詁講説で、文字は典籍をいふ。蘇東坡が「非言語文字所能形容」と謂つたのは是れである。○異端

聖人の道にあらずして別に一端を爲す學説をいふ。こゝは孟子の没して後の異端即ち申不害・韓非の法術や鬼谷子・孫武・吳起の權謀等を指す。楊子・墨子を兼ねて言ふは非である。楊・墨は孟子の在世中に已に之を闢いた。○老佛之徒 漢代になつて老子の教が盛んに行はれ、晉代になつて清談の徒が出て皆老子の思想にかぶれてゐた。佛敎は後漢の明帝の時、西域から入つて來て南朝に至つて盛んに行はれた。○近理：亂眞 老・佛の敎義は道理に近いだけに知らず識らずそれを信するやうになるから却つて眞の道理を亂すに至るをいふ。

【直解】子思から又再傳して孟氏が出ることを得た。孟氏は能く十分には中庸の書の主意を推し明かにして古の聖人の正しい傳統を受け繼ぐことが出來たが、孟氏が没するに及んでは、遂に其の道統を承け繼ぐ者がなくなつて仕舞つた。そこで、吾が聖人の道の寄せて存する所は、唯言語文字の間に於て之を見るに過ぎないやうになつた。而して聖教に反く所の韓非や申不害などの種種の異端の邪説が日に新に月に盛んになつて天下に流行し、東漢以後、老氏・佛氏の徒が出るやうになつて、其の説くところが他の異端の説よりも一層吾が聖人の敎理に似よつてゐるので、迷つて之を信奉する徒が益々多くなつて、大に眞正の道を亂すこととなつた。前の自是以來から此に至るまでを第二段とする。先づ子思の中庸の道學は聖聖相傳

の心法に非ざることなき所以を説き、次に子思が異端の起るのを以て、正しい聖道の眞を失はんことを懼れて此の中庸の書を著したことを敘し、終には道統の傳を失ひ、異端の説が盛んに流行して聖人の道の眞を亂るやうになつたことが子思の遠慮の如くになつたことを發明した。一書の精要は尤も此の一段に在ると謂つて善い。

然而尙幸此書之不泯故程夫子兄弟者出得有所考以續夫千載不傳之緒得有所據以斥夫一家似是之非蓋子思之功於是爲大而微程夫子則亦莫能因其語而得其心也。

【譯讀】然り而も尙ほ幸に此の書の泯びざるあり。故に程夫子兄弟の者出でて、考ふる所ありて以て夫の千載不傳の緒を續ぐことを得據る所有りて以て夫の二家は似たるの非を斥くることを得たり。蓋し子思の功是に於て大なりと爲す。而れども程夫子微かりせば則ち亦能く其の語に因つて其の心を

得ること莫かりしなり。

【字義】◎程夫子兄弟 程顥字は伯淳、明道先生と稱し、其の弟程頤字は正叔、伊川先生といふ。朱子は二程子に私淑し、其の道を受け繼いで居るので、尊んで夫子と曰つた。◎千載不傳 孟子没後約千四百年を経て、宋に至つて二程子が生れたが、其の間久しく道統を繼承する人が絶えてゐたので、千載不傳といふ。程伊川の撰んだ明道先生墓表に「孟軻死、聖人之道不傳（中略）先生生三千四百年之後、得不傳之學於遺經」とあるに本づく。◎緒 「イトグチ」と訓む。即ち斯道の統緒をいふ。◎二家 老氏と佛氏との二家。◎似是之非 老・佛二家の説は、彌理に近くして却つて大に眞を亂る。即ち甚だ是に似てゐて、實は大に非なるものである。

【直解】 誠にさうである、吾が聖人の正しい道の眞義は大に亂された。ではあるが而も尙ほ幸なことに聖教の正統を傳へて此の中庸の書が亡び失せなかつたばかりに、吾が程夫子兄弟則ち明道・伊川の二先生が此の世に出られて、此の書に就いて大に考へられて、彼の千年以上も傳はらずに絶えてゐた道統の緒を續がれ、又此の書を根據として彼の老・佛二家の是に似て非なる教を排斥せられることが出来たのである。それで推し測つて思ふに、子思が

是の書を作つて後世に道の眞義を傳へた功績は實に偉大であるといはねばならぬ。さうではあるが、若しも吾が程夫子が世に出られなかつたならば、亦誰も此の中庸の書中の語に因つて子思の心を悟り得る者が無かつたのである。されば程先生の功績も亦偉大であると謂はねばならぬ。蔡虛齋曰く「程子既ニ考フル所アリテ不傳ノ緒ヲ續グコトヲ得タリ。則チ子思ガ其ノ傳ヲ失ハンコトヲ憂ヘシ者、今其ノ傳ヲ得タリ。據ル所アリテ二家はニ似ルノ非ヲ斥クルコトヲ得タリ。則チ子思ガ其ノ眞ヲ失ハンコトヲ懼レシ者、其ノ眞ヲ失ハズ」と。此の説は如何にも其の通りである。

惜乎其所以爲說者不傳而凡石氏之所輯錄僅出於其門人之所記是以大義雖明而微言未析至其門人所自爲說則雖頗詳盡而多所發明然倍其師說而淫於老佛者亦有之矣。

【譯讀】 惜いかな其の説を爲す所以の者傳はらず。而して凡そ石氏の輯録する

所僅に其の門人の記する所に出づ。是を以て大義明かなりと雖も、而も微言未だ析たず。其の門人の自ら説を爲す所に至つては、則ち頗る詳かに盡して發明する所多しと雖も、然れども其の師説に倍きて、老佛に淫する者も亦之れ有り。

【字義】◎所ニ以爲レ説者不レ傳 朱子の中庸集解の序に「明道ハ未ダ書ヲ成スニ及バズ。伊川ハ書ヲ成スト雖モ傳ハラス。或^{アルレト}以テ和靖尹公ニ問フ。則チ曰ク、先生自ラ意ニ滿タザルヲ以テ而シテ之ヲ火クト」とある。◎石氏 石塾字は子重、克齋と號す、會稽の人、朱子の友人で、中庸集解一篇を作り、周子・二程子・張子・司馬溫公・王安石・謝上蔡・呂與叔・游定夫・楊龜山・侯仲良（コノ中テ謝上蔡以下ノ五人ハ二程子ノ門人デアル）凡そ十家の説を集録して集解と號した。朱子の序文がある。◎微言未レ析 其の精微な言は未だ十分に分析して明かになつてゐない。◎其門人 二程子の門人を指す。◎發明 これまで義理の不明であつた點を開いて明かにする。文選の宋玉の風賦に「發^ス明耳目」とある。◎倍 背き悖ること。◎淫 浸淫（ヒタリスギル）なり。

【直解】ところが惜しいことには、二程子が中庸に就いて説かれた所の者が傳はつて居ない。

それはまとまつた中庸の解は明道先生はまだ作るに及ばずして卒せられ、伊川先生は一度作られたが、自分の意に滿たないので燒き棄てられたからである。そこで大抵石子重が集録した中庸集解に出てるものは、僅に二程子の門人が、平素問答した言葉を書き記して置いたのに過ぎないのであるから、二程子の中庸に關する大體の意見は明瞭ではあるが、其の微妙で精細な點に至つては、まだはつきりと分らない。また二程子の門人が自分で説を立てた所は、頗る詳かに言ひ盡して、これまで不分明な義理を發明した所も多いけれども、然し先生の説に背いて、むしろ老佛二家の邪説に流れ浸つて居るものも亦有るやうである。

熹自蚤歲、即嘗受讀而竊疑之。沈潛反覆、蓋亦有年。一旦恍然似有得其要領者。然後乃敢會衆說、而折其衷。既爲定著、章句一篇、以俟後之君子。而一二同志復取石氏書、刪其繁亂、名以輯略。且記所嘗論辯取舍之意、別爲或問、以附其後。然後此書之旨、支分節解、脈絡貫通、詳細相因、巨細畢舉。

而凡諸說之同異得失亦得以曲暢旁通而各極其趣。

【譯讀】熹蚤歲より即ち嘗て受け讀みて竊に之を疑ふ。沈潛反覆すること蓋し亦年有り。一旦恍然として其の要領を得る者有るに似たり。然して後に乃ち敢て衆説を會して而して其の衷を折つ。既にして爲めに定めて章句一篇を著はして以て後の君子を俟つ。而して一二の同志復石氏の書を取つて其の繁亂を刪り名つくるに輯略を以てす。且つ嘗て論辯取舍せし所の意を記して別に或問を爲り以て其の後に附す。然して後此書の旨支分節解脈絡貫通し詳細相因り巨細畢く擧る。而して凡そ諸説の同異得失亦以て曲暢旁通して各其の趣を極むることを得たり。

【字義】○熹 朱子の名。○蚤歲 若い時、早年、蚤は早に同じ。○沈潛 心を沈め思を潛める。○反覆 一度もくりかへす。○恍然 「ボンヤリ」うつとりした氣持になる。○要領 裳の要、衣の領。禮記の檀弓篇に出づ。借りて要旨綱領の意とする。○折衷 衷は中に同じ。折は定む。事理の同じからざる者は其の兩端を取つて、過不及のない中正の處に定めること。楚辭に「令五帝以折中」とあつて朱注に「事理ノ同ジカラザル者ハ、兩端ヲ執ツテ其ノ中ヲ

折ム」と。○章句 中庸はもと禮記中の一篇の文であつたのを、朱子が三十三章に分け、句讀を分ち注釋を加へたので章句と云ふ、句は句讀の句である(大學解義一頁參看) ○俟 後之君子 後世の學者の訂正を待つ。○附 其後 其は輯略を指す。黃仲昭曰く「或問ハ原輯略ノ後ニ附ス」と。○支分節解云云 支は四肢、節は關節、支節脈絡は章段の分解を、人體に喩へていふ。即ち肢體のやうに分れ、關節のやうに解けて、其の中を脈絡が貫き通つてゐるやうに此の書の意味が明かに貫通してゐる。許白雲曰く「章句輯略或問三書、既備、然後中庸之書、如ニ支體之分、骨節之解、而脈絡却相貫穿通透」と。蔡虛齋曰く「大抵首章ヨリ第一章ニ至ルヲ一支ト爲シ、之ヲ析チテ十一節ト爲ス。第二章ヨリ二十章ニ至ルヲ二支ト爲シ、之ヲ析チテ九節ト爲ス。二十一章ヨリ三十二章ニ至ルヲ三支ト爲シ、之ヲ析チテ十一節ト爲ス。三十三章ハ別ニ一支節ト爲ス」と。此の分け方は古來一定してゐないが、姑く蔡説を採つて參考の資とする。○巨細 巨は大要即ち根本義で、細は即ち細目をいふ。巨細畢擧とは、支節中に言ふ所の義理の大小皆遺すことの無いのをいふ。○諸説同異 以下は専ら或問と輯略とを言ふ。○曲暢旁通 杜預の左傳の序に出づ「ツブサ」に徧く説明する、曲は委曲の曲、朱子曰く「旁通ハ猶ホ曲盡ト言フガ如シ」と。

【直解】自分は若い頃から、嘗て此の中庸の書を受け讀んで、心竊に之に就いて疑問を懐いて居たので、心を沈め思を潛め、繰り返し繰り返して研究すること、それは長い年月であつた。ところが或る時うっとりとして、此の書の要領本義を悟り得たやうな心地がした。然して後は、敢て思ひ切つて衆くの説を集め考へ合せて、其の偏つてゐない中正な處を定めた。既に然してゐる中に世の爲めに定めて此の中庸章句一篇を著はし、自分の意見として發表し、後世の君子即ち學者の訂正を待つ次第である。而して又一二の同志の人がまた石子重の輯録した中庸集解を取り出して、其の繁雜で混亂してゐるところを刪り去つて、之を中庸輯略と名づけ、其の上に自分が嘗て議論したり辯明したり、或は其の善き説を取り、或は其の善くない説を捨てたりした意見を書き記して、別に中庸或問と云ふ書を爲つて輯略の後に附け加へたのである。此の中庸章句・中庸輯略・中庸或問の三種の書が備はつて、そこで始めて此の中庸の書の本義が丁度人の肢體のやうに分かれ關節のやうに解け、段落や章節の關係が「ハツキリ」と明かになり、其の中に脈絡が貫き通つて居るやうに條理が整然として、詳細なものと大略のことが相因り相待ち、大要即ち根本義と微細な節目とが悉く擧げられて餘す所がなくなつた。随つて凡そ従來の諸説の同異や、どれが當を得て、どれが當を失つて居るかなど

も、亦曲に暢べ盡し、旁く通じ解けて、それぞれ其の眞の趣を極め盡すことが出來たやうな次第である。

雖於道統之傳、不敢妄議、然初學之士、或有取焉、則亦庶乎行遠升高之一助云爾。 淳熙己酉春三月戊申、新安朱熹序。

【譯讀】道統の傳に於ては敢て妄りに議せずと雖も、然れども初學の士、或は取ることあらば、則ち亦遠きに行き高きに升るの一助に庶からんと爾か云ふ。 淳熙己酉春三月戊申、新安の朱熹序す。

【字義】○不_レ敢_レ妄_レ議_一 程子の傳へた道統の傳を誰が承け繼ぐかといふことは大問題であるから、自分は敢て妄りに議論することをしない。大全の注に自分が道統の傳に與るなどは「メツタ」に言はないと謙遜したのであるが、實は心竊に自ら任じてゐる意を「ホノメカ」したのであると曰つてゐるのは非である。○行_レ遠_レ升_レ高_一 遠方に行くには近い處から始め、高い處

に升るには卑い處から始める。中庸第十五章に「君子之道、辟如行遠必自邇、辟如登高必自下」とあるに本づく。中庸の中の語を引いて中庸の序文を結んだのは、最も適切巧妙である。◎淳熙己酉 南宋の孝宗の淳熙十六年である。時に朱子は年六十であつた。大學の序文の出來たのも同じ年である。◎新安 朱熹の郷里。今の河南河洛道に屬す。

【直解】さて道統の傳に就いては極めて大問題であるから誰が之を承け繼ぐかといふことは、自分分は敢て思ひ切つて妄りに議論をしようとは思はない。が、然しながらせめて初學の士がもしも此の中庸章句を取つて學ぶ所があつたならば、譬へば遠方に行くには近い處から始め、高い處に升るには卑い處から始めるやうに、やがて聖賢の域に達する一つの助となるに庶いであらうと思ふのである。淳熙己酉の年、春三月戊申の日、新安の朱熹序す。
以上第三段、程子が中庸不傳の心法を得たこと、及び自分が程子に私淑して衆説を折衷して復た道統の傳を明かにすることが出來たことを説く。

中庸 宋朱熹章句

中者、不偏不倚、無過不及之名。庸、平常也。

子程子曰、不偏之謂中、不易之謂庸。中者、天下之正道、庸者、天下之定理。此篇乃孔門傳授心法。子思恐其久而差也。故筆之於書、以授孟子。其書始言一理、中散爲萬事、末復合爲一理。放之則彌六合、卷之則退藏於密。其味無窮、皆實學也。善讀者、玩索而有得焉、則終身用之、有不能盡者矣。

【譯讀】中とは偏らず倚らず、過不及なきの名なり。庸は平常なり。子程子曰く、偏らざる之を中と謂ひ、易らざる之を庸と謂ふ。中者、天下の正道

にして庸者天下の定理なり。此の篇は乃ち孔門傳授の心法なり。子思其の久しうして差はんことを恐る。故に之を書に筆して以て孟子に授く。其の書始は一理を言ひ、中は散じて萬事と爲し、末は復合して一理と爲す。之を放てば則ち六合に彌り、之を卷けば則ち退きて密に藏る。其の味窮り無し。皆實學なり。善く讀む者玩索して得るあらば則ち終身之を用ふとも盡くすこと能はざる者あらん。

【字義】 ○章句 中庸は大學と同じく、もと禮記中の一篇の文であつたのを、朱熹が之を三十三章に分ち句讀を施し、詞を加へて註釋したるが故に朱熹章句といふ。詳しくは「大學解義」の一頁を見よ。○不偏 中正を得て過不及なく、どちらにも偏らぬこと。朱子は之を解して「中者不偏不倚、無過不及之名」と云へり。即ち不偏不倚の四字は所謂未發の中、即ち中の體をいつたもので、無過不及の四字は所謂君子時中の中即ち中の用をいつたものである。それで新安陳氏は「不偏不倚、未發之中、以心論者也、中之體也、無過不及、時中之中、以事論者也、中之用也」と曰へり。なほ時中の義に就きては近思錄に程子曰く「中字最難識、須是默識心通、且試言一應、則中央爲中、一家則應非中、而堂爲中、一國則堂非中、而

國之中爲中、推此類可見矣」といへり。○子程子 宋の程明道・程伊川兩先生をいふ。子はもと男子の通稱、後には尊稱にも用ふ。程の字の上に更に子を加へたのは、後學が先儒を宗師として尊んだのである。朱子は明道を伯子（アニ）又は大程子と稱し、伊川を叔子又は小程子と稱するを常とすれども、ここには只二子を合稱して子程子と稱せし所以は、中庸に就きての二子の意見は略同じきを以て、二子の本語を合せ採り刪補して此の一段の文に書き改めて之を卷端に置き、學者をして此の書の大要を知らしむること亦「大學」の例と同じければなり（大學解義三〇頁參看）（二子の本語トハ「不偏之謂中」ヨリ「天下之定理」ニ至ル二十四字ハ伊川ノ語、マタ「中庸是孔門傳授心法」「子思恐傳授漸失」故著此一卷書」「成於子思、傳於孟子」ハ伊川ノ語、中庸始言一理、至合爲一理」「中庸之言、放之則至、藏於密」ハ明道ノ語、中庸之理、其味無窮、極索玩味」「中庸一卷書、自至理、便推之事、如九經及歷代聖人之跡、莫非實學也」「善讀中庸者、得此一卷書、終身用不盡」ハ伊川ノ語ナリ）○不易 永久不變なること。朱子は庸は「平常也」と解し且つ曰く「庸ハ是レ本分ニ依リテ怪異ノ事ヲ爲サズ、堯舜孔子ハ只是レ庸、伯夷叔齊ノ爲ス所ハ都テ是レ庸ナラズ」と。平常なるが故に常に之を行ひて易ふ可からず、世を驚かし俗を駭す事の若きは則ち暫くは爲すべき

も之を以て常となすことを得ず、故に朱子また曰く、「之ヲ飲食ニ譬ヘバ、五穀ハ是レ常ニシテ易フベカラズ、珍異ニシテ常ニハ得ラレザル物ノ若キハ、則チ暫ク一食スベキモ、焉ゾ能ク久シウスベケンヤ」と。○正道・定理 正とは中正で偏らざるをいひ、定とは永久不變なるをいふ。道と理との二字は文を互にして用ひたのであるが、細説すれば道は大綱で、理は條目であることは景星の集説に「正是不偏、定是不易、道是大綱、理是細目」と云ひ、蒙引に「道理二字、對舉之、亦互文耳、若細分二字之義、則道以統體之全言、理以其中條理言」とあるので明かである。○孔門傳授心法 孔門は孔子の門流。傳授は師が弟子に傳へ授くる義。即ち孔子は之を曾子に傳へ、曾子は之を子思に傳へたるによりていふ。天の賦與する道理は、人人の心に具有するものである。而して聖人の人を教ふるは、人人の心に具有する天與の本性を全うせしめんとするに外ならぬので、之を心法と云ふ。道は萬事に應用するものなれども、其の根本はすべて心に統括する故に之を心法といふ。○子思 孔子の孫で、名は伋、子思は其の字。中庸の著者。○差 「タガフ」と訓む。眞意を間違へること。○始言「一理」 開卷第一に出たる「天命之謂性」を指して言ふ。○中散爲萬事 中庸に論する多くの事を指す。即ち知愚・賢不肖・祭祀・鬼神・三達徳・五達道・天下を爲むる九經・天道人道等の類をい

ふ。○末復合爲「一理」 篇末の「上天之載、無聲無臭」を指す。○彌六合 彌は「ワタル」と訓む、滿なり。六合は天地四方をいふ。六合に彌るとは、宇宙に遍滿して一切を網羅すること、即ち一理の散じて萬事と爲る者をいふ。蔡虛齋曰く「一理ニ由リテ而シテ散ジテ萬事ト爲ルハ、之ヲ放テバ則チ六合ニ彌ルナリ」と。○退藏ニ於密 易の繫辭上傳の語、密は形而上を言ふ。即ち五官を超越した精神的至約微妙の心地に退き藏れること。胡雲峯曰く「放レ之則彌六合ニ感而遂通ニ天下之故、心之用也、卷之則退藏ニ於密、寂然不動、心之體也」と。○實學 日常實用に供せられる學問にして、些の虚假を容れざるをいふ。異端の實なきに對して言ふ。○玩素而有得 玩は熟讀玩味すること、素は眞意の在る所を究め求むること、得は其の眞意を體得して我が物とすること。

【直解】 此の一段は朱子が子程子即ち明道・伊川兩先生の説を借りて先づ中庸に就いての大意を述べられたのである。そこで先づ中庸の定義を下して、中とはどちらへも偏倚することなく、節(程善キ制限)に過ぎることなく、及ばないこともない名であつて、庸とは平常といふ意味である。それに就いて子程子が曰はれたのに、いづれにも偏らぬのを中と云ひ、萬世に互つて永久に易らないのを庸といふ。中は天下の正しい大道で一切を統べ、庸は一定して易ら

ない所の天下の條理である。此の天下の正道と定理とを説いた中庸と云ふ書は、孔氏の門流に於て孔子が其の門人曾子に傳へ、曾子がまた子思に傳へた心に關する教である。而るに子思は口傳だけでは此の教が年を経ること久しくして其の眞意を間違へ傳へられてはならぬと心配せられたので、之を書き記して以て孟子に授けられたのである。此の書は始には一理を言ひ、天の命する之を性と謂ふことを述べ、中頃は之を種種の方面に分散して、三達徳・五達道・九經等の萬事に説き及ぼし、末にはまた合はせて、上天の載は聲も無く臭も無しとの一理に歸納してゐる。

そこで此の書にあることを放ちて推し廣めたなれば、上下四方に行きわたり、遍く宇宙に充ち満ちて此の書に説くところの理の外に出づるものはなく、之を卷いて仕舞ひ込めば極めて微妙にして隱密である心の中に退き藏れるものであつて、其の味は窮り盡きることがなく、皆日常實用の學問で、少しも空理空論に流れてゐない。それ故に善く此の書を読む者が其の辭を玩味し其の眞意の存する所を探り求めて、之を我が身に體得したならば、一生涯之を用ひても、到底用ひ盡すことが出來ないであらう。

以上は中庸一篇の解題ともいふべきもので、程子が禮記中から此の中庸一篇を表出した所以

を明かにしたのである。

【餘義】 朱子語類に曰く、「中庸ハ只是レ一箇ノ道理、其ノ偏ラズ倚ラザルヲ以テ、故ニ之中ト謂ヒ、其ノ差異セズ、常ニ行フ可キヲ以テ、故ニ之ヲ庸ト謂フ。未ダ中ニシテ而モ庸ナラザル者有ラズ。亦、未ダ庸ニシテ而モ中ナラザル者有ラズ。惟中ナリ、故ニ平常ナリ」と。蔡虛齋曰く、「道理但中ニ至レバ、則チ改易スルコト有ル容カラズ。故ニ堯舜以來、只箇ノ中ヲ説ク。孔門ニ至リテ復タ之ニ加フルニ庸ヲ以テス。其ノ義益、精シク且ツ備ハレリ。中ハ自ラ中ニシテ、庸ハ自ラ庸ナルニ非ズ。惟中ナルガ故ニ庸ナル可シ。庸ノ字ハ、特ニ以テ申ネテ中ノ字ヲ贊スルノミ」と。

室直清(鳩巢)曰く「彌六合ハ、一理ノ散ジテ萬事ト爲ル者ナリ、卷レ之藏ニ於密ハ萬事ノ合シテ一理ト爲ル者ナリ。合セテ之ヲ觀レバ、此ノ篇、孔門傳授ノ心法タルコト、見ル可キナリ」と。又曰く「程子讀者ノ或ハ徒ニ視テ空妙ノ説ト爲サンコトヲ恐ル。故ニ言フ六合ニ彌滿スルハ、最モ實理ノ間ナキヲ見ル。而シテ退キテ密ニ藏ルハ、又其ノ固ヨリ已ニ有スルヲ見ル。是レ其ノ味ノ窮リ無キ所以ニシテ、而シテ一放一卷皆實學ナリ。豈毫髮ノ虛假ヲ其ノ間ニ容レンヤ」と。

天命之謂性、率性之謂道、脩道之謂教。

【譯讀】 天の命する之を性と謂ひ、性に率ふ之を道と謂ひ、道を脩むる之を教と謂ふ。

【節旨】 此の一節は、性道教三者の關係を説きて道の大原は天より出づることを明かにした。朱熹章句に「蓋シ人已ノ性ノアルコトヲ知ツテ、而シテ其ノ天ニ出ヅルコトヲ知ラズ。事ノ道アルコトヲ知ツテ、而シテ其ノ性ニ由ルコトヲ知ラズ。聖人ノ教アルコトヲ知ツテ、而シテ其ノ吾ノ固有スル所ノ者ニ因リテ之ヲ裁スルコトヲ知ラズ。故ニ子思此ニ於テ首トシテ之ヲ發明ス。而シテ董子(漢の董仲舒)ノ所謂「道之大原出於天」モ亦此ノ意ナリ」と曰へるは、能く子思の意を得たものと謂ふべきである。

【字義】 ○天命 命は猶ほ令の如し。天の命令する所をいふ、董仲舒曰く「命者天之令也」と。天とは吾人が仰いで彼の蒼蒼たる碧空を指していふこと、第十二章に詩を引いて「鳶飛戾天」といへるやうな形態的天をいふこともあれども、この天は宗教的に宇宙の主宰者即ち天地萬物創造の神を指したものである。孔子が「獲罪於天無所禱也」(論語解義七八頁)また「天

何言哉、四時行焉、百物生焉。天何言哉」(論語解義六二四頁)と曰つた天、孟子が堯舜禹の子を論じて「其子之賢不肖、皆天也。非人之所能爲也。莫之爲而爲者天也。莫之致而致者命也」(孟子通解六二七頁)と曰つた天は皆是れである。○性 性質・本性の性で天から稟け得て生れたる所のものを謂ふ。即ち吾人が先天的に具有する「ウマレツキ」である。朱子は「性即理也」と註し、生れながら心に具へてゐる理であると解してゐる。さて性に就いて孔子は「性相近也、習相遠也」(論語解義六〇一頁)と曰つただけで、餘り詳しい説明を爲なかつたことは論語、公冶長篇に子貢が「夫子之言性與天道、不可得而聞也」(論語解義一四二頁)と曰つたのでも判明するが、子思の中庸に至つて初めて性は天の命なることを道破した。而してやがて孟子の性善論も蓋しこれに本づいたもののやうに思はれる。明の胡炳文の中庸通に「孟子性善ノ論ハ、子思ノ此ノ首ノ一句(天命之謂性を指す)ヨリ來ル。然レドモ、須ク開端ノ一ノ天ノ字ヲ看ルベシ。程子曰ク「中庸ハ始ニ一理ヲ言ヒ、末ハ復合シテ一理ト爲ル」ト、所謂一理トハ即チ此ノ一ノ天ノ字ナリ。又曰ク「萬物各一理ヲ具シ、萬理同ジク一原ニ出ヅ」ト。所謂一と。性のままに依り隨ふので、他から求めた者にあらざるをいふ。○道 人の必ず履み守らね

ばならぬもの、所謂道德である。猶ほ人の往來する道路の如く、人たる者の必ずそれに依つて行かねばならぬもので、人倫相互の關係は道に由つて圓滿に履行せられるのである。故に人倫を離れて道は無い。而して此の道は人人の天から稟け得た本性に率ひ由るにあるのみである。故に「率性之謂道」といふ。○脩 治め整へること。脩身・脩徳・脩整・脩理の脩なり。即ち道を品節(品ハ等級、節ハ限制)義、シナワケシテウマクモリスル)整理して萬事に當てはめ、過不及のないやうにすること。猶ほ道路橋梁を脩治して人をして違ひ行かしめるやうにするが如し。○教 道は自然に人の天性に備はるものであるけれども、生れながらにして知る聖人でない限りは、其の實際に行ふ所、過不及があつて道と一致することが出来ない。そこで聖人は人の行ふべき道を脩治して天下の法となす、之を教と云ふ。朱注に「聖人、人物ノ當ニ行フベキ所ノ者ニ因リテ、而シテ之ヲ品節シテ以テ法ヲ天下ニ爲セバ、則チ之ヲ教ト謂フ」と。孟子に「謹庠序之教、申之以孝悌之義」(孟子通解二頁)と曰ひ、また「設爲庠序學校、以教之(中略)皆所以明人倫也」(孟子通解三一頁)また「人之有道也、飽食煖衣、逸居而無教、則近於禽獸。聖人有憂之、使契爲司徒、教以人倫」(孟子通解三七頁)と曰つたのも教學の最も重んずべきことを言つたのである。而して天命の性も五倫の性を主

とし、性に率ふの道も、亦五倫の道を主とし、道を脩むるの教も、亦五倫の教を主として言ふ。朱注に「教ハ禮樂刑政ノ屬ノ若キ是レナリ」とあるのは、適切の解とは曰へない。固より聖人が民を教へるには、禮樂刑政の具を假らないことは無いが、此の章の本意ではない。【直解】 天即ち宇宙の主宰者たる神の命令によつて、吾人が先天的に具有するものを性、即ち「ウマレツキ」と云ふ。即ち仁・義・禮・智の性は人が生を稟けた初に於て、天から命じて賦與せられたものであることは孟子の所謂四端の説に「無惻隱之心、非人也。無羞惡之心、非人也。無辭讓之心、非人也。無是非之心、非人也。惻隱之心、仁之端也。羞惡之心、義之端也。其の天性の自然のままに依りしたがつて行ふのが即ち人の守るべき道即ち道德である、而して人人此の道德を守るによつて、人倫相互の關係が圓滿に行はれて行くことが出来るのである。さて道は前に述べたやうに、天性の自然に備はつてゐるものであるけれども、生れながらにして知る聖人でない限りは、其の實際行ふ所、過不及があつて道と一致することが出来ない。そこで聖人は吾人の行ふべき道を立派に修め整へ五倫の道を明かにして天下の法則とし、それで以て完全な人格者を養成しようとする、之を教と云ふ。

【考異】天命之謂性 之謂は謂之と同じでない。若し天命謂之性」と書けば、性は是れ天命の別名となる。天命之謂性」と書けば、人と物との性を以て直ちに天命する所の者と爲す。それで朱子語類には「謂之ハ之ヲ名ツクル也。之謂ハ直チニ爲ス也」とある。中井履軒曰く「凡ソ此ノ名目アリテ、而シテ今之ヲ實ニスル者ハ、之謂ト曰フ。天命之謂性ノ如キ是レナリ。此ノ事アリテ、而シテ今之ガ名目ヲ擬スル者ハ、謂之ト曰フ。未レ發謂之之中(五四頁)ノ如キ是レナリ」と。

【餘義】陳北山曰く「此ノ章ハ蓋シ中庸ノ綱領ニシテ、此ノ三句ハ又一章ノ綱領ナリ。聖賢ノ人ヲ教フルヤ、必ズ先ヅ之ヲシテ自リテ來ル所ヲ知ラシメ、而ル後ニ力ヲ用フルノ地アリ。此ノ三句ハ、蓋シ孟子ガ性善ヲ言フト同意ナリ」と。

佐藤二齋の中庸欄外書に曰く「湯誥ニ云フ「惟皇上帝、降ニ衷于下民、若ニ有レ恆性、克綏ニ厥猷、惟后」ト。易(乾卦)ニ云フ「乾道變化、各正ニ性命、保ニ合大和、乃利貞」ト。則チ性・道・教ノ義ハ、聖人既ニ經ニ於テ之ヲ發ス。中庸ハ之ヲ述ブル而已」と。

道也者、不可須臾離也。是故君子戒慎乎其所

不睹、恐懼乎其所不聞。

【譯讀】道は、須臾も離る可からざるなり。離る可きは道に非ざるなり。是の故に君子は其の睹ざる所に戒慎し、其の聞かざる所に恐懼す。

【節旨】此の一節は存養(戒懼ヲ指ス)省察(慎獨ヲ指ス)の要務を謂ふ。人の往來する道は見ることが出来るが、人の行ふ道は見ることが出来ない。それ故に君子は其の未だ見聞しない前に、戒慎恐懼して、寸時も道に離れないやうに心掛くべきである。

【字義】○道也者 也者といふ字を添へたのは其の事物を宛と指して言ふ意で、單に道といふよりは意味が重いのである。○不可須臾離 須臾は樂記の「斯須」と同じく俄頃(シバラク)即ち寸時の義。不レ可レ離は離れてはならぬと、離れることが出来ぬとの二意を兼ねてゐる。この離は去聲に讀む。即ち彼(道)は動かないで、我が之に離れる意である。離の字平聲(四支ノ韻)の時は兩つの物が互に相離れる義、離別の離の如し。漢文を研究する者は、先づ音韻に通じなければ、作者の眞意を正當に解釋することは出来ない。○君子 道德のよく修まれる人。○戒慎 其の心が若しや道を離れはせぬかと氣を付けて戒めつつしむこと。

○所不睹 心が未だ發動せず、何物をも目に見ない時をいふ。所不聞も同じ。○恐懼 事物の未だ事物に形はれない以前から、常常に敬を持って、心をして昏昧（クラム）ならしめぬやうにすること。大學（大學解義九九頁）の恐懼は俗にいふ恐怖の義で、このとは意が少しく異つてゐる。

【直解】 道は天命の本性に率ふものであるから道と我とは一である。それで道は少時の間でも離れることの出来ないものである。若ししばらくでも離れることが出来るものならば、それは我の外にあるものであるから道といふべきものではない。それ故に君子は常に敬み畏れて修養を心がけ、目に見る所のあるのを待つて後始めて戒め慎まず、其の未だ見ない時に在つて戒め慎み、耳に聞く所のあるのを待つて後始めて恐れ懼れず、其の未だ聞かない時に在つて、恐れ懼れて敬ひ謹み、寸時も道を守ることが忘れないやうに心掛けるやうにすべきである。この戒慎恐懼は、互文といつて所不睹と所不聞との兩方にかけて用ひたので、戒慎恐懼乎其所不睹、戒慎恐懼乎其所不聞とすべきを煩を省いたので、漢文には多く用ひる所の句法である。

【餘義】 道也者不可須臾離也 論語、里仁篇に「君子無終食之間違仁、造次必於是、顛沛

必於是（論語解義一〇一頁）とあるは、これと同じ、仁は即ち道である。

莫見乎隱、莫顯乎微、故君子慎其獨也。

【譯讀】 隠れたるより見はるるは莫く、微なるより顯なるは莫し。故に君子は其の獨を慎むなり。

【節旨】 前を承けて君子は常住不斷に敬を持って慎獨の工夫を怠つてはならぬことを言ふ。
 【字義】 ○乎 於の字に同じ。○隱 幽暗の處、隠れて屏はるる意。荀子、勸學篇に「聲無小而不可聞、行無隱而不形」とある。○見 音「ゲン」現に同じ、著れ見える義。○微 蔽はれて微かな事で一念の纒に動くのを指していふ。○慎獨 獨とは人が未だ知らないで己獨り知る所をいふ。朱子が「人所不知、而已所獨知之地」と解してゐる如く、心意の將に發動せんとする時を謂ふので、たとひ衆人稠座の間に在つても、自分のみ獨り知つて、人の未だ知らない所、即ち一念發動の幾微を謂ふ。人若し此の時に於て一點私欲の念が生じたならば、其の刹那に於て、既に道に離れることになるから、之を戒慎して常に人欲の發生することを豫防すべきである。慎とは前にある戒慎恐懼の意で、獨の字は所不睹所不聞に應ず。慎

獨の二字は子思の創語で、最も其の重んずる所である。卒章に詩を引いて「君子内省不疚」と曰ひ、「尙不疚于屋漏」とあるのも皆慎獨の工夫を説いたのである。而して大學にも「謂自謙、故君子必慎其獨也」(大學解義八九頁)また「謂誠於中、形於外。故君子必慎其獨也」(大學解義九三頁)と二ヶ所に出てゐて、大學の自謙は即ち中庸の「内省不疚」であり、大學の誠於中、形於外は即ち中庸の「隠レタルヨリ見ハルルハ莫ク、微ナルヨリ顯ナルハ莫シ」であることを思へば、大學と中庸とは互に連絡のある書であることが知られる。また大學に「小人間居爲不善、無所不至」(大學解義九二頁)とあるのは、即ち慎獨の反對である。

【直解】 幽暗の處、一念が纔に動く所の極めて微かな事は、他人は未だ之を知ることとは出来な
いけれども、自分は既に明かに之を知つて居る故、其の著はれて明かなことは、之に過ぎる
ものはないのである。大學に所謂「中ニ誠アレバ外ニ形ハルル」(大學解義九三頁)と同じ意であ
る。それ故に君子は常に戒め慎み恐れ懼れて、人の知らない所、自分だけが獨り知つてゐる
心意發動の一刹那に於て尤も之を戒慎して人欲を未だ萌さざる前に豫防するのである。

【餘義】 伊藤仁齋の中庸發揮に曰く「此ノ篇專ラ道ヲ明カニスルガ爲メニシテ作ル也。道トハ
人倫日用ニ存シ、天下萬世ニ達シ、而シテ須臾モ離ル可カラザル者也。當時諸子百家、各私

説ヲ恣ニシテ、虛無ヲ是レ尙ビ、横議是レ肆ニシ、能ク相統一スルコト莫シ。故ニ首ト
シテ之ヲ掲ゲテ曰ク「天命之謂性、率性之謂道」。所謂性トハ便チ天ノ我ニ賦スル所ニ
シテ、本矯揉安排スル所ナシ。之ニ循フトキハ則チ道ト爲ス。循ハザレバ則チ道ニ非ズ。異
端ノ人倫ヲ廢シ、人情ヲ滅シ、人事ヲ蔑スルガ若キハ、豈之ヲ性ニ循フノ道ト謂フ可ケンヤ。
故ニ子思是ニ於テ首トシテ性道教三者ノ義ヲ發明シテ以テ中庸ノ小序ト爲スト云フ」と。
「戒慎乎其所不睹」「恐懼乎其所不聞」の二句は次の「未發」の語を起す爲め「慎獨」は次
の「中節」の語を起す爲めの張本である。朱注には此の「慎獨」を解して「幽暗ノ中、細微ノ
事ハ、跡未ダ形レズト雖モ、而カモ幾ハ則チ已ニ動ク、人ハ知ラズト雖モ、而カモ已獨リ之
ヲ知レバ、則チ是レ天下ノ事、著見明顯ナルコト此ニ過グル者アルコト無シ。是ヲ以テ君子
既ニ常ニ戒懼シテ而シテ此ニ於テ尤モ謹ヲ加フ、人欲ヲ將ニ萌サントスルニ遏メテ、其レヲシ
テ隱微ノ中ニ滋長(潛滋暗長)セシメテ、以テ道ヲ離ルルノ遠キニ至ラシメザル所以ナリ」と曰
つてゐるのは、適切な解釋である。なほ此の一節は、大學第六章の「小人間居爲不善、無所
不至。見君子而後厭然、揜其不善、而著其善。人之視己、如見其肺肝然。則何益矣。
此謂誠於中、形於外。故君子必慎其獨也」(大學解義九二頁)の文と相表裏してゐるから互に

對照して深く研究すべきである。

中井履軒曰く「人多クハ見顯ニ慎ミ、而シテ隱微ニ忽ニス。其ノ徳ノ立タザル所以ナリ。此ノ節ノ意ニ謂ヘラク、隱微ハ見顯ニ異ル者ナシ。忽ニスベカラザルナリト。然レドモ甚ダシク之ヲ言フガ故ニ、隱微ガ却ツテ見顯ヨリ重キ者ノ若シ。是レ文辭ノ警策ニシテ人ヲ喚醒スル所以ナリ、泥ミテ説ク可カラズ」と。此の説當れり。

喜怒哀樂之未發謂之中。發而皆中節謂之和。中也者、天下之大本也。和也者、天下之達道也。致中和、天地位焉、萬物育焉。

【譯讀】喜怒哀樂の未だ發せざる之を中と謂ふ。發して皆節に中る之を和と謂ふ。中は天下の大本なり。和は天下の達道なり。中和を致して天地位し、萬物育す。

【節旨】 分つて二節とする、喜怒から達道也までの一節は、性情に即いて以て道の離るべからざることを明かにす。致中和以下の一節は、道を體するの極功を言ふ。

【字義】

○喜怒哀樂 人の四つの感情である。情は性が外物の刺戟に應じて初めて起るものである、この喜怒哀樂に愛・惡・欲を加へて七情といふ、ここには其の主なる四情を擧げたのである。禮記、禮運篇に「何謂人情、喜怒哀懼愛惡欲、七者弗學而能」と。荀子、正名篇に「性之好惡喜怒哀樂謂之情」と。喜怒哀樂の情であることは、固より辨するまでもない。○未發 其の情の未だ發らないものは性である、性は心の本體で一方に偏る所がないから之を名つけて中といふ、中とは即ち性で喜・怒・哀・樂の情が未だ發らず心が偏倚(カタヨル)するところなきの謂である。孔穎達曰く「性ト情トハ、猶ホ水ト波トノ如シ。靜カナル時ハ是レ水ナリ。動ケバ則チ是レ波ナリ。靜カナル時ハ是レ性ナリ、動ケバ則チ是レ情ナリ」と。○發而皆中節謂之和 物に感じて喜怒哀樂の情が發現するに及び、過不及の失なく、皆當然の節度(ヨキホドアヒ)に合するのは、情の正しきを得て、理に悖らないものであるから之を和といふ。和とは猶ほ適といふが如く、天下古今に通じて乖戾(ソムキモトル)するところなきの謂である。物徂徠は「和トハ和順ニシテ相悖ラザルナリ。凡ソ和ト言フ者ハ、皆異殊ナル者ノ相悖ラザルヲ謂フナリ。八音(金石絲竹匏土革木)ノ和、五味(辛酸鹹苦甘)ノ和、及び左傳ニ載スル所ノ晏子和同ノ辨(論語解義四五七頁に引く)ノ如キ、

以テ見ル可キノミ」と。一説として存すべし。◎大本 大は統べざる所なき意、本は根本の意。中は即ち天命の性で天下の萬事萬物の理、皆悉く此れより出づるが故に大本といふ。これは性の徳を謂つたのである。程子曰く「喜怒哀樂ノ未ダ發セザル之中ト謂フ。中ハ寂然トシテ動カザル者ヲ言フナリ。故ニ天下ノ大本ト曰フ」と。◎達道 達は通ぜざる所なき意。和は情の天理に背かないもので天下古今に通じて戻ることのないものであるから達道といふ。是れは情の徳を謂つたのである。程子曰く「喜怒哀樂ノ發シテ皆節ニ中ル、之ヲ和ト謂フ。和ハ感ジテ遂ニ通ズル者ヲ言フナリ。故ニ天下ノ達道ト曰フ」と。◎致 推して之を極めること。◎天地位 天地各、其の位に安じ、風雨寒暑其の時を失はないやうに至るをいふ。徂徠曰く「天地位焉トハ風雨時アリ、寒暑節アリ、日月其ノ明ヲ失ハズ、山崩レズ、河溢レズ、海、波ヲ揚ゲザルノ類ナリ」と。◎萬物育 萬物が各、其の生育を遂ぐることをいふ。徂徠云ふ「民物蕃庶ニシテ、草木材ヲ成シ、財利殖シ、寶藏興リ、祥瑞臻ルノ類ナリ、皆聖人ノ極功ナリ」と。

【直解】 喜怒哀樂などの感情は外物の刺戟に應じて初めて起るものであるが、其れが未發即ち未だ外に發しない時の心の本體といふものは、喜もなく怒もなくまた哀しいとか楽しいとかいふ感情もなく、渾然として中に在つて、一方に偏る所がないので之を中と名づけるのである。しかるに一旦外物の刺戟に逢ふと喜怒哀樂の感情となつて外に發する、ところが其の感情といふものは兎角一方に偏り勝ちのもので、喜ぶときには無暗に喜び、怒るときには極度に激昂したりするものであるが、其の感情の發するときに、或は過ぎたり或は及ばなかつたりする失なく、一一皆當然の節に適ふことの出来るのは、即ち情の正しいことを得て理に悖らないものである。故に之を和と名づけるのである。中は性の徳、道の體であつて寂然として動かないものであるけれども、一切のものが皆之に具はり、天下の萬事萬物、悉く之を以て根本としないものはない、即ち天下の大本の理である。和は情の正しくして天理に背かないもの即ち道の用であつて、天下古今に通じて少しも悖ることなく、天下の共に由る所の道、即ち天下の達道である。但前にも述べたやうに凡人は、其の外物に感じ發して情となるとき、程よい節度に適ふことが出来ないで、或は過ぎたり或は及ばなかつたりする失があつて、動もすれば中節の和を失ひ、従つて未發の中も亦之を明かにすることが出来ないものであるが、唯聖人君子の人は其の見ざる所に戒慎し、其の聞かざる所に恐懼して、喜怒哀樂の情の未だ發しない際に於て修養の工夫を積み、寂然不動の中に在つて少しも偏る所なきに至つて、よく中を推し極めることが出来る。又獨を慎むの工夫が愈精熟して、外物に應じて少

る。しかるに一旦外物の刺戟に逢ふと喜怒哀樂の感情となつて外に發する、ところが其の感情といふものは兎角一方に偏り勝ちのもので、喜ぶときには無暗に喜び、怒るときには極度に激昂したりするものであるが、其の感情の發するときに、或は過ぎたり或は及ばなかつたりする失なく、一一皆當然の節に適ふことの出来るのは、即ち情の正しいことを得て理に悖らないものである。故に之を和と名づけるのである。中は性の徳、道の體であつて寂然として動かないものであるけれども、一切のものが皆之に具はり、天下の萬事萬物、悉く之を以て根本としないものはない、即ち天下の大本の理である。和は情の正しくして天理に背かないもの即ち道の用であつて、天下古今に通じて少しも悖ることなく、天下の共に由る所の道、即ち天下の達道である。但前にも述べたやうに凡人は、其の外物に感じ發して情となるとき、程よい節度に適ふことが出来ないで、或は過ぎたり或は及ばなかつたりする失があつて、動もすれば中節の和を失ひ、従つて未發の中も亦之を明かにすることが出来ないものであるが、唯聖人君子の人は其の見ざる所に戒慎し、其の聞かざる所に恐懼して、喜怒哀樂の情の未だ發しない際に於て修養の工夫を積み、寂然不動の中に在つて少しも偏る所なきに至つて、よく中を推し極めることが出来る。又獨を慎むの工夫が愈精熟して、外物に應じて少

しも謬ることなく、感じて遂に通じて、一つとして節度に適しないことがなく、よく和を推し極めることが出来るのである。以上は性道教の根本の説明で次の致中和以下の十一字は、其の作用を述べたのである。勿論ここで上位に在る人が此の大本によつて此の達道を行ひ、能く此の中和の徳を推し極めて之を天下に推し及ぼすことが出来たならば、天下の民は皆其の徳に感化せられて、其の所に安んじない者はなく、萬民が皆其の所に安んずることが出来たならば、天地も亦之に感應して天災地變などもなく、陰陽も調和して五風十雨時に順ふやうになるであらう。かやうにして天地も亦其の所に安んずることが出来るのは、即ち天地位するのである。天地位して、天災地變などがなく、風雨寒暑も、其の時を失はず、五穀も豊熟すれば、人も物も皆安樂に生活して、各其の生を遂げることが出来るのは即ち萬物育するのである。これ即ち學問の極效であつて聖人の能事といふべきである。實に尊いことではないが、而してこれ皆性に率ふの道によつて先づ己を修め人を治め導いた結果である。之を要するに吾人が學問を修める目的は「修己」と「治人」とに外ならない。以上に述べ來つたことを「大學」に對照すれば「慎獨」は「誠意正心修身」にあたり「天地位焉、萬物育焉」は「治國平天下」(大學解義四二頁)にあたることが分る。

【考異】 伊藤仁齋の中庸發揮には「此ノ喜怒哀樂之未發以下四十七字ハ本中庸ノ本文ニ非ズ、蓋シ古ノ樂經ノ脱簡、禮樂ノ徳ヲ贊シテ云爾、若シ此ノ章ヲ以テ中庸ノ本文ト爲ストキハ、則チ唯喜怒哀樂未發之中ノミ獨リ學問ノ根本ト爲リテ、而シテ六經語孟ハ、悉ク用テ言ツテ體ヲ遺ルルノ書ト爲リ、道ヲ害スルコト特ニ甚ダシ。故ニ今斷ジテ古ノ樂經ノ脱簡ト爲ス」と曰つてゐる。先儒も曰つたやうに中和の二字對偶をなすのは他經にこれ無く唯樂經に此の字があるばかりでなく、禮記の樂記篇に「人生而靜、天之性也」とあるのは、喜怒哀樂の未だ發せざるの謂であり、又「感於物而动、性之欲也」とあるは、已發の謂であり、又「好惡無節(中略)天理滅矣」又「先王之制禮樂、人爲之節(中略)禮節民心、樂和民聲」とあるのは、この中節の節であつて、其の意が略、相似た點があるから、仁齋は樂經の脱簡であると疑つたもののやうに思はれるが、此の説は甚だ誤つてゐる。前にも述べたやうに、不睹不聞の二句は未發を起す爲めで、慎獨の説は中節を起す爲めの張本であつて、前後緊しく照應して文を成して居る。若し仁齋の言つたやうに未發以下の語を削つたなら、頭ばかりで尾がないやうになつて全く文を成さない。之を要するに未發の中を以て學問の根本義とするのは特に此の中庸の書の著はされた所以の動機といふべきである。蓋し子思は老氏の徒が儒者の道は

聖人の作爲したものであると云つた説に對抗せんが爲めに、道の本原は天より出づる所以を説明したもので即ち道の本體は天命の自然に本づき決して聖人の作爲したものでないことを述べ、儒道は唯に其の用のみを言ふものでないことを明かにした肝要の條文であつて、此の書を中庸と名つけた所以の意も、實に此の一節の存するによつて明かにすることが出来るのである。されば仁齋が妄りに之を疑つたの非であることは特に絮説(タダダシク)トキアカスするを要しない。

【餘義】太田錦城曰く「人君ノ身行、中ヲ失スレバ、辱弱ニ過ギザレバ、則チ剛暴ニ過グ。政治中ヲ失スレバ、寛緩ニ過ギザレバ、則チ嚴猛ニ過グ。法禁中ヲ失スレバ、苛察ニ過ギザレバ、則チ縱弛ニ過グ。用度中ヲ失スレバ、奢靡ニ過ギザレバ、則チ鄙吝ニ過グ。不レ中ノ害ヤ此ノ如シ。喜怒節ヲ失スレバ、賢良ノ忠讜ヲ喜バズシテ、而シテ姦邪ノ讒諛ヲ喜ビ、驕幸ノ政ヲ亂ルコトヲ怒ラズシテ、而シテ疏遠ノ正議ヲ怒ル。哀樂節ヲ失スレバ、民生ノ易カラザルヲ哀マズシテ、而シテ用費ノ贍ラザルヲ哀ム。徳化ノ廣運ヲ樂マズシテ、而シテ私欲ノ壓足ヲ樂ム。喜樂ノ失ハ、其ノ禍最モ慘ナリ。明眸皓齒ニ非ザレバ、則チ醇酒厚味。寶玉器玩ニ非ザレバ、則チ珍禽奇獸。酣歌恆舞ニ非ザレバ、則チ馳騁田獵。奇伎淫巧ニ非ザレバ、則チ峻

宇雕牆。神仙祈禳ニ非ザレバ、則チ甲兵征伐ナリ。不レ和ノ害ヤ此ノ如シ。此ノ如クナレバ、則チ民心惰キテ而シテ天下亂ル。乖氣ハ異ヲ致シテ、風雨時ナラズ、寒暑節ナラズ。山崩レ川溢レ、海嘯地震シ、五穀熟セズ、庶類殖セズ。百物凋瘵シテ、庶民餓殍ス。不レ中不レ和ノ害其ノ長ルベキヤ此ノ如シ。是ニ於テカ中和ノ徳ノ尙ブ可キコトヲ知ル也」と此の説これを得たりといふべきだ。

右第一章。子思述所傳之意以立言。首明道之本原出於天而不可易。其實體備於己而不可離。次言存養省察之要。終言聖神功化之極。蓋欲學者於此反求諸身而自得之。以去夫外誘之私而充其本然之善。楊氏所謂一篇之體要。是也。其下十章蓋子思引夫子之言以終此章之義。

【譯讀】右第一章。子思傳ふる所の意を述べて以て言を立つ。首には道の本原天より出でて易ふ可からず其の實體は己に備はりて離る可からざること

明かにす。次には存養省察の要を言ふ。終には聖神功化の極を言ふ。蓋し學者此に於て諸を身に反求して而して之を自得し、以て夫の外誘の私を去りて、而して其の本然の善を充てんことを欲す。楊氏の所謂一篇の體要とは是なり。その下の十章は、蓋し子思夫子の言を引いて、以て此の章の義を終ふ。

【節旨】此の一節の文は、朱子が前に述べた子思の言葉に就いて、其の要旨を、段落を分けて説明したもので、如何にも簡明にして其の要を悉してゐる。

【字義】○述 誤り述べる。○所傳 堯舜禹より以來孔子に傳へ、孔子より曾子に傳へ、曾子より子思に授けられた心法をいふ。○立言 言は「コトバ」世の模範となすべき立派な「コトバ」の後の世までも傳はつて滅びないこと。○首 首節をいふ。○道之本原出於天 漢の大儒董仲舒のいつた語で、本原は大本根原、ここは中庸の首に出てる性道教の三句を指す。○實體備於己而不レ可レ離 「道也者、不レ可レ須臾離也。可レ離非レ道也」の二句を指す。○次 二節三節をいふ。○存養 心を正しく持ちて本性を養ひ義理に背かないやうにする。「戒慎乎其所不レ睹、恐懼乎其所不レ聞」を指す。○省察 よく我が身をかへりみて心意發動の際に私欲の念を除き去るを謂ふ。「慎獨」を指す。○要 要務をいふ。○終 四節五節

をいふ。○聖神功化之極 功は聖人の功績をいひ、化は其の徳化をいひ、極は至極の義「致中和、天地位焉、萬物育矣」を指す。○反ニ求諸身 我が身に立ち反りて求める、即ち大本である天命の性、達道である性に率ふの道はもと己の身にあるを云ふ。○自得 道の體用は吾が身の固有する所であることを吾と自ら會得することを謂ふ。○去ニ夫外誘之私 外部から誘ふ欲即ち耳目口體の欲や富貴利達などの人欲を除き去ること。○本然之善 本來自然の性をいふ。○楊氏 名は時、字は中立、龜山と號す、程門四先生の一人。龜山年譜に「先生六十二歳、在ニ餘杭、著ニ中庸解義」と。○體要 大體、要領、根本義をいふ。夏氏曰く「體ハ則チ理ヲ具ヘテ而シテ足ラザル無シ。要ハ則チ簡ニシテ亦餘リ有ルニ至ラズ。辭理足リテ簡約ナルヲ謂フナリ」と。書經、畢命篇に「辭尙ニ體要」とある。

【直解】右は此の中庸の書の第一章である。子思が孔子から曾子を経て傳授せられた心法の趣意を述べて言を立てたものである。首には道の根本は天から出たもので、一定して易へることの出来ないものであり、其の道の本體は人人己の身に備はつて居るもので、決して離れることの出来ないものであるといふことを明かにし、其の次には君子は常に敬虔の心を存して、未だ見聞しないでも戒慎恐懼して天命の性を存養し、一念の發動する處の隱微の間を省察し

てよく獨を慎み人欲を去る大要の趣旨を言ひ、終には聖神の徳ある人は、よく中和を致して其の功業化育の至極は、天地位し萬物育するに至ることを述べてある。蓋し思ふに學者が此の點に於て先づ之を自己の身に反省し求めて、天下の大本は吾人が身に具有する天命の性であり、天下の達道は吾人の天性に率ふことであり、中和は吾人が本來具有するものであることを自覺し、眞に之を自得し體認して、ややもすれば彼の外界の誘惑に迷はされやうとする私欲を除き去つて、其の本より然る所の善を充實せんことを欲するのである。彼の楊氏(龜山)が此の章は中庸全篇の意義を總括したもので、其の大體要領即ち根本義を述べた所のものであると云つたのは實に尤の見解である。

此の章以下の十章は蓋し子思が孔子の言を引證して、此の第一章の意義を十分に發明したものである。

【餘義】 傳習錄に「陸澄、學庸ノ同異ヲ問フ。先生(王陽明)曰ク、子思、大學一善ノ義ヲ括シテ、中庸ノ首章ト爲ス」とある。佐藤一齋曰く「按ズルニ性道教ハ即チ明德親民止至善ナリ。戒慎恐懼・慎獨ハ即チ格致誠正脩ナリ。天地位シ、萬物育スハ、即チ治國平天下ナリ」(大學解義四二頁參看)と。

仲尼曰、君子中庸。小人反中庸。君子之中庸也。君子而時中。小人之中庸也。小人而無忌憚也。

【譯讀】 仲尼曰く、君子は中庸をす。小人は中庸に反す。君子の中庸は、君子にして時に中す。小人の中庸は、小人にして忌憚無きなり。

【字義】 ○仲尼 孔子の字である、此の章以下は皆「子曰」に作る、此の章に特に「仲尼曰」と曰つたのは、下の文の「子曰」は皆是れ仲尼即ち孔夫子の言であることを明かにしたのである。猶ほ書經、舜典に、舜の即位以後に一つの「舜曰」があつて、下の文には皆「帝曰」に作つてあるのと同じ筆法だ、古人の文辭の一字でも苟もしないことは概ね此のやうなものがある。○中庸 中は前にも説明したやうに偏らず倚らず、過不及のない徳。庸は易經、文言に「庸言之信、庸行之謹」の庸で、凡庸、即ち平凡で何等目新しいことのない意と、「ツネ」と訓んで永久に一定して易らない意とを兼ねてゐる。即ち平常であるが故に一定して易らないのである。首章には中和といひ、ここには和を變じて庸と曰つたのは、程門四先生の一人、游定夫の説に「性情ヲ以テ之ヲ言ヘバ則チ中和ト曰ヒ(中は性で和は情)徳行ヲ以テ之ヲ言ヘバ則チ中庸ト曰フ」

と曰つた通りである。○時中 中は定體なくして、時に隨ひ變に處して其の宜しきに適ふの意。前の未發の中は名詞であるが、時中の中は動詞として用ひた、上章の中節の中と同じく、去聲に讀んで時に中るの謂である。時は孟子が孔子を評して「孔子聖之時者也」(孟子通解 六六〇頁)と曰ひ、禮記の學記に「當其可謂之時」とある時と同じ意である、即ち如何なる時と場合とに處しても中正であつて、其の時其の場合に應じて其の可に當るをいふ。例へば盛夏の時に當つては、須く冷水を飲み葛衣を衣るを要すべきが如し。是れ便ち中であつて且つ平常である。また隆冬の時に當つては須く温湯を飲み裘衣を衣るを要すべきが如し。是れ便ち中であつて且つ平常である。之に反して若し極暑の時に當つて裘衣を重ねたり、嚴寒の時に當つて葛衣を衣たりするが如きは、平常に異つて便ち中を失うたものである。○小人之中庸 前の反の字を承けて小人の中庸に反するの意に用ひたのであるが、實は小人が誤つて自ら中庸であると信じてゐるところはの意である。○小人而無忌憚也 大學の「小人間居爲不善無所不至」(大學解義九二頁)と同意である。

【直解】 我が仲尼即ち孔夫子の仰せられるに、君子は中庸即ち偏らず過不及がなく、平常にして且つ永久易らない徳を己の身に體得して居るが、小人の行は中庸に反し背いて居る。さて

君子が能く中庸の行を爲すといふのは、十分に徳を備へて、しかも暗ざるに戒慎し、聞かざるに恐懼して、未發の中を失はず、一念の發し動く處、よく獨を慎むの工夫を積んで中節の和を得るが故に、時に隨ひ變に處して其の宜しきに適ふことが出来るからである。而るに小人が自ら中庸の行であると信じてゐても、其の實は中庸に反してゐるのは、あさましい小人の心があつて、私欲を肆にして妄りに行ひ、殊に人の居ない所などでは少しも忌み憚ることがなく、理の是非事の利害をも都て顧慮するところがないからである。

【考異】 小人之中庸也 王肅本には中の上に反の字があるので、胡瑗も司馬光も程子も朱子も皆其れに従ひ、朱注に「王肅本作小人之反中庸也程子亦以爲然。今從之」と曰ひ、又「小人ノ中庸ニ反スル所以ノ者ハ、其ノ小人ノ心アリテ、而シテ又忌憚スル所ナキヲ以テナリ」と曰つてゐるが、必ずしも強ひて反の字を加へるには及ばないばかりでなく、反の字のない方が却つて古文としての妙味があるやうに思はれる。そこで維東子(中庸大全ニ引用スルトコロ)の説にも、

「小人之中庸、如下論語言、夫子之求之、孟子言伊尹以堯舜之道要湯也。夫子未嘗求之、伊尹未嘗要之、小人未嘗中庸也。只是借彼而斷此之辭耳、知文字者當得此意」と曰

つてゐるが、實に我が心を獲た説である。

【餘義】孟子に「子莫執中。執中爲近之（聖人の道に近い）執中無權、猶執一也、所惡執一者、爲其賊道也。舉一而廢百也」（孟子通解九二〇頁）とあるは、能く時中の義を發揮したものである。宜しく併せ考ふべきだ。

右第二章

【章旨】右は此の書の第二章である。朱子曰く、「此ノ下ノ十章ハ、皆中庸ヲ論ジテ、以テ首章ノ義ヲ釋ス。文ハ屬セズ（屬は連なり、不屬は切れ切れになつて居る）ト雖モ而カモ意ハ相承クル也。和ヲ變ジテ庸ト言フ者ハ、游氏（名は酢、字は定夫、程子の門人）曰ク「性情ヲ以テ之ヲ言ヘバ、則チ中和ト曰ヒ、德行ヲ以テ之ヲ言ヘバ、則チ中庸ト曰フ」ト、是レナリ。然レドモ中庸ノ中ハ、實ニ中和ノ義ヲ兼ヌ」と。

子曰、中庸其至矣乎。民鮮能久矣。

【譯讀】子曰く、中庸は其れ至れるかな。民能くすること鮮きこと久し。

【字義】○子曰 以下「子曰」とあるは、皆孔子の言である。○其至矣乎 至は至極にして此の

上なき意。至道・至徳の至の如し。矣乎は贊歎の辭、下文の「父母其順矣乎」「鬼神之爲徳、其盛矣乎」また易の繫辭傳に「易其至矣乎」の矣乎皆同じ。○民 普通の衆人を謂ふ。○鮮 人數の少きをいふ。○久矣 時代を経ることの久遠なるをいふ。論語の「久矣吾不復夢見周公」の久矣に同じ。

【直解】孔子の仰せられるには、中庸の徳は偏らず中正にして、過ぎたこともなく及ばないこともなく實に此の上もない結構なものである。而して本來吾人の性に具有する天賦のものであるから誰でも之を行ふことが出来て、大してむづかしい譯は無い筈であるが、世の教化が衰へて人人は我儘勝手ばかりするので、能く此の至美至善の中庸の徳を實踐躬行する者が少くなつたことは、随分久しいことであるかなと。

朱子曰く「過グレバ則チ中ヲ失ヒ、及バザレバ則チ未ダ至ラズ。故ニ惟中庸ノ徳ヲ至レリト爲ス。然レドモ亦人ノ同ジク得ル所ニシテ（聖人も凡人も皆固有する所をいふ）初メヨリ難キ事無シ（高遠にして行ひ難きにあらず）但世教衰ヘテ民、行ニ興ラズ。故ニ之ヲ能クスルコト鮮キコト、今已ニ久シ」と。

【餘義】道は中庸を以て至れりと爲す。そこで過ぎたのも及ばないのも、共に中を失ふことは

一つであることは、論語、先進篇に「子貢問、師（子張の名）與、商（子夏の名）也孰賢。子曰、師也過、商也不及。曰、然則師愈與。子曰、過猶不及」（論語解義三六二頁）とあるのでも分る。また雍也篇に「子曰、中庸之爲、德也、其至矣乎。民鮮久矣」（論語解義二九七頁）とあるは、正に此の章と同意であるが、但論語には「之爲、德也」の四字があつて「能」の字がない。子思が能の一字を添へたに就いては明の胡炳文が中庸匯通に「須ク下章ニ許多ノ能字ヲ用ヒタルヲ看テ、方ニ子思ノ意ヲ見ルベシ」と謂つた通りである。但論語の何晏の註に「民鮮ニ能行ニ此道ニ久矣」とあるのに據れば漢魏間の論語の本文には鮮と久との間に能の字があつたやうにも想像される、さすれば子思が殊更に能の字を添へたので無いかも知れない、兎に角能の字のある方が意味が明かである。

尙ほ鄭玄は「民鮮ニ能久矣」と訓んで民能く中庸の徳に久しきこと鮮しと解し、下文の「不能ニ期月守之」の語を以て證としてゐるが、朱子は或問に之を辯じて「此ノ章ハ方ニ上章ノ小人反ニ中庸ニ」ノ意ヲ承ケテ泛ク之ヲ論ズ。未ダ遽ニ久シキコト能ハズニ及バザルナリ。下章ノ「能擇ニ中庸」者ヨリ之ヲ言ヘバ、乃チ其ノ久シキコト能ハザルコトヲ責ムベキノミ。兩章ハ各、是レ一義ヲ發明ス。當ニ遽ニ彼ヲ以テ此ヲ證スベカラザルナリ。且ツ論語ニ能ノ字ナ

シ、而シテ所謂矣ハ又已ニ然ルノ辭ナリ。故ニ程子之ヲ釋シテ以テ民此ノ中庸ノ徳アルコト鮮シト爲ストキハ、則チ不能ニ期月守之者ト同ジカラズ、文意益々明白ナリ」と曰つてゐるに従ふべきだ。

右第三章

【章旨】 此の章は中庸の道は特に小人が之に反するのみでなく、衆人も亦之を能くすること鮮きことを言つて、以て下章の意を引き起す。

子曰、道之不行也、我知之矣。知者過之、愚者不及也。道之不明也、我知之矣。賢者過之、不肖者不及也。人莫不飲食也、鮮不能知味也。

【譯讀】 子曰く、道の行はれざるや、我之を知れり。知者は之に過ぎ、愚者は及ばざればなり。道の明かならざるや、我之を知れり。賢者は之に過ぎ、不肖者は及ばざればなり。人飲食せざるもの莫きなり。能く味を知るもの鮮きなり。

【字義】 ○道 君子中庸の道をいふ。○知之 之は行はれざる所以を指す。○知者 性質の智力にすぐれた者をいふ。○愚者 性質の智力に鈍き者をいふ。○賢者 性質が鋭くして力行に勇み過ぎる者。○不肖者 性質が劣りて賢者に肖ない者。○飲食 人の一日も離れることの出来ないものであるから、日用平常の道に喩へた。○味 眞の味、道の中正で過不及のないのに喩へた、孟子に「至於味、天下期、易牙（齊の桓公の臣、能く味を知り調理を善くした）」（孟子通解七四八頁）とあるが、能く味を知る者とは、易牙の如き人が是れである。

【直解】 子曰く、中庸の道の世に行はれない譯は、自分は能く之を知つて居る。それは何故であるかと言へば、智力のすぐれた者は、徒に高遠に過ぎて、中庸の道を以て平凡にして行ふに足らずとし、又智力の鈍き愚者は其の知が平常に及ばず、中庸の道を行ふべき方法をも知らず、従つて之を行はうともしない。是れ道の行はれない譯である。又中庸の道の世に明かにならない譯は、自分は能く之を知つて居る。何故かと言へば、性質の鋭い賢者は其の行が人情の能くし難い所を能くしようとして意のままに行つて、日用平常の道を侮り、中庸の道を以て知るに足らないとし、性質の劣つてゐる不肖者は其の行通常に及ばず、中庸の道を知るべき方法さへも求めようとしなからである。さて中庸の道は天から命ぜられた本性に

率ふもので、何等高遠非凡なものでもないから、さうむづかしく、知り難いものでもなく、日用平常の道でさまで行ひ難いものでもないのであるが、人はこの中庸の道に由つて居ながら其の本義をよく察しないが故に或は過ぎたり、或は及ばなかつたりするのである。譬へば飲食のやうなもので、何人も日日飲食をしない者はないが、然し眞によく其の五味の中正即ち其の調和の皆宜しきを得た處を知る者が少いやうなものである。知者の過ぐるは後文に見ゆる索隱の類で、賢者の過ぐるは行怪の類を言つたのであらう。

【考異】 鄭玄が「鮮罕也、罕、レ知ニ其味ニ謂、愚者所ニ以不ニ及也」と註して愚者のみにかけて解したのは非である。朱子が「道不可離、人自不察、是以有過不及之弊」と知愚賢不肖のすべてにかけて解した方が穩當であるが、但其の説明が未だ精しくないのが物足りない心地がする。

【餘義】 此の一節は孟子に「終身由之、而不レ知ニ其道ニ者衆也」（孟子通解八七七頁）とあつて、即ち道は固より人性に具有する所のもので、大にしては君臣父子の倫、近くしては視聽言動の節、小にしては一事一物の微に至るまで、皆道の貫注するところでないものはない。而るに世人日に行ひ、日に習つてゐても、明察の工夫を加へることが出来ない爲めに、偏私に

陥り、物欲に誘はれて、日に道と遠ざかるに至ることを歎いたのと同じ意である。易經、繫辭上傳に「仁者見之謂之仁、知者見之謂之知。百姓日用而不知。故君子之道鮮矣」とあるのも亦同じ意である。

右第四章

【章旨】此の章は前章に中庸の徳は、民能くすること鮮きを言つたのを承けて、民の能くすること鮮き所以の者は、賢知の者は中庸に過ぎ、愚不肖の者は中庸に及ばないのに由ることを言ふ。

子曰、道其不行矣夫。

【譯讀】子曰く、道は其れ行はれざるかな。

【字義】○矣夫 趙岐、王引之皆云ふ、夫は「歎息ノ辭ナリ」と。

【直解】前に述べたやうに智者賢者は過ぎ、愚者不肖者は及ばないのは中庸の道が明かでないから行はれないのである。そこで孔子歎息して仰せられるに、中庸の道は到底世に行はれないのであらうかと。朱注に「明カナラザルニ由ル。故ニ行ハレズ」とあるのは、言ふところ

は人が道を行はないうで、道が行はれないのは、人が道を知らないで、道が明かでないのに由るといふ意である。

【餘義】此の章は論語に「子曰、道不行、乘桴浮于海。」（論語解義一三二頁）また「子路曰、道之不行、已知之矣。」（論語解義六四五頁）とあるなどと併せ考ふべきである。

右第五章

【章旨】朱子曰く「此ノ章ハ上章ヲ承ケテ（「鮮能知味」の知の字の意を承く）道（中庸の道）ノ行ハレザル端ヲ舉ゲテ、以テ下章ノ意（舜の如き大知があつて初めて道の行はれる所以の意）ヲ起ス」と。即ち知と行とが互に相因るの理を開示したのである。

子曰、舜其大知也與。舜好問而好察邇言、隱惡而揚善、執其兩端、用其中於民、其斯以爲舜乎。

【譯讀】子曰く、舜は其れ大知なる與。舜は問ふことを好んで邇言を察すること、を好み、惡を隠して善を揚げ、其の兩端を執つて、其の中を民に用ふ。其れ斯れ

以て舜と爲す乎。

【字義】 ○大知 智慧の大なるをいふ。徂徠曰く「舜ハ堯ノ世ニ方リテ登庸歴試セラレ、人ヲ官ニシ、有罪ヲ極シ、禮樂ヲ造リ、制度ヲ定ム、聖人ハ衆シト雖モ、聖人ノ徳ハ備ルト雖モ、古ヨリ以來、聖人ノ其ノ智ヲ用フル者ハ、舜ニ若クハ莫シ。故ニ舜ノミ獨リ大知ヲ以テ稱セラル。而シテ舜ノ大知タル所以ハ、自ラ其ノ智ヲ用ヒザルニ在リ」と。○好問 書經、仲虺之誥篇に「好問則裕、自用則小」また詩經、大雅、板の篇に「先民有言、詢于芻蕘」とあるは、この「好問而好察、邇言」の意である。○邇言 邇は近なり、邇言は淺近の言をいふ。朱注に「邇言トハ淺近ノ言ナリ、淺近ノ言モ、猶ホ必ず察ス。其ノ遺善ナキコト知ルベシ」と。○兩端 互に相反對してゐる兩極端。終始本末大小厚薄の類をいふ。論語に「我叩其兩端、而竭焉」(論語解義二八四頁)とある兩端に同じ。同じく善言であつても、人によつて多少の意見の相違がある、因つて一方の極端と、他の一方の極端とを取り合せて折中した處を民政に用ふるをいふ。○其中 道理の過不及がなく正中なところ、即ち中庸。履軒曰く「譬ハバ功アル者アリ、其ノ實ヲ議スルニ或ハ云フ應ニ一千ナルベシト、或ハ云フ二千ト、或ハ云フ三千・五千ト、或ハ云フ一萬ト。舜粗之ヲ量リ以爲ヘラク千ハ則チ大ニ輕キニ似タリ、萬ハ則チ

大ニ重キニ似タリト、且ク千ト萬トヲ擧ゲテ、然ル後審カニ其ノ間ヲ擇ババ、必ず恰好ノ者アリ。是レ中ナリ。大抵五六千ニテ之ニ應ズ。子莫ガ權ナキノ中(孟子通解九一九頁)ニ嫌ナシ。是レ千ヨリ萬ニ至ルマデ皆善ナリ。而シテ千ト萬トハ兩端ト爲スナリ。若シ或ハ應ニ百ナルベシ應ニ十ナルベシト言ヒ、或ハ十萬百萬ト言ハバ、此レ則チ大ニ過ギ大ニ及バズ、善ニ非ザルヤ、乃チ論ゼズ云」と。

【直解】 子曰く、帝舜はそれ誠に大なる知者といふべきであらうか。何故とならば、帝舜は固よりの智者であられたけれども、妄りに自分の智を振り廻すことなく、何事にも人に質問して人の意見を聞くことを好まれ、たとへ卑近な言葉でも、之を棄てずに、よく其の眞意のある所を察することを好まれ、苟も善言でさへあれば悉く之を採用して、天下の衆人の知を合せ集めて自分の知とせられた。而して衆人の言葉の中に悪しき者があれば、之を隠して外に表はさぬやうにし、善き者があれば、つとめて之を稱揚し、其の意見を採用して他人にも告げ知らせるやうにして言路を開いたから、善き者は愈樂んで善言を進めるやうになり、善からぬ者も遠慮なく其の説を述べるやうになつて、益々天下の衆人の知を合せて自分の知とすることが出來た。」又衆人の言論の中で同じく善言であつても、人人によつて多少意見が相

違して一致しない時は、一方の極端と、他の一方の極端とを取り合せ、互に比較研究して其の間の的中した處、即ち中庸に適ふものを用ひて民を治める政の上に施した。これはいふまでもなく舜の胸中に夙に精確な見識があつたので、能く其の時に適當した中庸の道を明かに定めることが出来たのである。これが即ち舜が大聖人の舜と仰がれる所以であらうか。さて此の舜のやうに大知であつて、中庸の道に明かであつたから中庸の道も能く行はれ、天下が善く治り、後世までも大聖帝として其の徳を仰がれるのである。

朱注に「舜ノ大知タル所以ノ者ハ、其ノ自ラ用ヒズシテ而シテ諸人ニ取ルヲ以テナリ。邇言トハ淺近ノ言、猶ホ必ズ察ス焉。其ノ遺善ナキコト知ル可シ。然レドモ其ノ言ノ未ダ善ナラザル者ニ於テハ、則チ隱シテ而シテ宜ベズ。其ノ善ナル者ハ、則チ播キテ而シテ匿サズ。其ノ廣大光明ナルコト又此ノ如クナレバ、則チ人孰カ告グルニ善ヲ以テスルコトヲ樂マザランヤ。兩端ハ衆論不同ノ極致ヲ謂フ。凡ソ物皆兩端アリ。小大厚薄ノ類ノ如シ。善ノ中ニ於テ、又其ノ兩端ヲ執リ、而シテ量度シテ以テ中ヲ取リ、然ル後ニ之ヲ用フレバ、則チ其ノ擇ブコト審カニシテ而シテ之ヲ行フコト至レルナリ（兩端を執りて其の中を用ふる事）然レドモ我ニ在ルノ權度精切ニシテ差ハザルニ非ズンバ、何ヲ以テ此に與ラン。此レ之ヲ知ルコト

ノ過不及ナキ所以ニシテ而シテ道ノ行ハルル所以ナリ」と。解し得て精切である。

【餘義】 帝舜といへば帝堯と並稱する大聖人で、太平至治の教化を敷いた模範的聖天子であるが、さて如何なる治道を行つたのであらうかといへば、邇言を察して、日用平常な中庸の道を行つたのに過ぎないのである。實に道は遠きに在らずして、近きに在ることを知るべきだ。孟子の公孫丑上篇に「禹聞ニ善言ニ則拜。大舜有レ大レ焉。善與レ人同。舍レ己從レ人。樂下取ニ於人。以爲善。自耕稼陶漁、以至レ爲帝、無レ非レ取ニ於諸人ニ者上（孟子通解二二頁）また盡心上篇に舜を稱して「聞ニ善言ニ見ニ善行、若決ニ江河、沛然莫之能禦也」（孟子通解八九六頁）とあるのは、宜しく本章の問を好み邇言を察するの證と爲すべきである。

右第六章

【章旨】 本章から第十一章までは、知仁勇の三徳を骨子として、如何にして道を知り、如何にして道を行ふべきかを明かにしたものである。而して此の章と次の章とは主として知の事を述べたのである。

子曰、人皆曰、予知、驅而納諸罟獲陷阱之中、而莫之知辟。

也。人皆曰予知。擇乎中庸。而不能期月守也。

【譯讀】子曰く人皆予は知ありと曰ふ。驅つて諸を罟獲陷阱の中に納れて之を辟くることを知る事莫きなり。人皆予は知ありと曰ふ。中庸を擇んで期月も守ること能はざるなり。

【字義】○人皆曰 曰は心の中に自ら謂ふの意。普通の人の常情であるから人皆といふ。○罟獲陷阱 罟は網、獲は機檻で一度入れば出ることの出来ぬ「ナリ」陷阱は「オトシアナ」阱一に穿に作る。皆禽獸を捕へる仕掛けの具。帆足萬里曰く「罟獲陷阱ハ人ノ邪説ヲ以テ誑誘シテ不善ニ陥ラシム可キニ喩フル也」と。孔穎達曰く「禽獸人ニ驅ラレテ罟網陷阱ノ中ニ納リ、而シテ遠避スルコトヲ知ラズ。無知ノ人、嗜欲ノ爲メニ驅ラレテ罪陷ノ中ニ陥リテ而シテ避クルコトヲ知ラザルニ似タルヲ言フ」と。二解竝に通ず。○辟 「サクル」と訓む。避の古字。○擇乎中庸 凡そ萬事を處するに、過不及を擇び去つて、中正の善を擇び取ること。鄭玄曰く「自ら中庸ヲ擇ビテ而シテ之ヲ爲スト謂フモ、亦久シク行フコト能ハズ。其ノ實ハ愚ニシテ又恆ナキヲ言フ」と。此の解之を得たり。○期月 期は匝(メグル)と同じく、一ヶ月を

いふ。

【直解】子曰く、世間の一般の人人は皆自分は知慧があると曰つて居るが、果して知慧があるなら、宜しく禍を知つて之を未然に防がねばならぬ。然るに禍根がすでに脚下に伏在して居るのに、茫然として之を覺らない。たとへば無知の獸を驅り立てて、これを網や機檻や「オトシアナ」に追ひ込んで、之を避けることを知らないやうなものである。即ち名利の欲や酒色の欲などは、人の心身を害する者であるといふことを知りながら、猶ほ知らず識らずそれ等の欲に溺れる者の多いのと同じである。また世間の人人は皆自分は知慧があると曰つて居るが、果して知慧があるなら、能く中庸の道を擇んで固く之を守り、之を體得して我が物とせねばならぬ筈である。然るに多くの人はよし中庸の道を擇んでも一ヶ月と之を守ることが出来ない。これでは眞の知慧がある者とは言はれないであらう。

【考異】物徂徠は此の章の讀方を驅にて句を切り「人皆予ハ驅ヲ知ルト曰フ」と訓み、下も同じく「人皆予ハ中庸ヲ擇ブコトヲ知ルト曰フ」と訓んで「驅ハ馬に策ツナリ。凡ソ古ハ馬ヲ言フ者ハ、皆車ヲ謂フナリ。驅ヲ知ルトハ、車ヲ驅ルノ道ヲ知ルナリ。蓋シ御ニ之レ存リ(中略)言フ心ハ人皆予ハ御ノ道ヲ知レリト曰フモ、而カモ實ハ知ルコトナシト。以テ下句ニ譬

フルナリ。世人皆予ハ中庸ヲ擇ブコトヲ知ルト曰フナリ。然レドモ期月モ守ルコト能ハザルナリ、則チ其ノ擇ンデ以テ中庸ト爲セル者ハ、其ノ實ハ中庸ニ非ザルヤ。審カナリ。蓋シ中庸ハ平常ニシテ行ヒ易ク守リ易シ。故ニ其ノ守リ難キヲ以テ其ノ是ニ非ザルコトヲ證スルナリ。此ニ不_レ知_ト言フハ、以テ上章ノ大知ニ應ズ」と解してゐる。即ち人は馬を驅ることを知つてゐると曰ひ、中庸を擇ぶことを知つてゐると、口では賢く偉らさうに曰ふけれども、實地に物をやらせて見ると、罟獲陷阱を避けることが出來ず、期月の間も之を守ることが出來ないといふ意であると説いてゐる、それでも通じないことはないが、少し無理な讀方であるから採らない。

【餘義】 論語、里仁篇に「擇_レ不_レ處_レ仁、焉_レ得_レ知_ル」(論語解義九七頁)とあるが如く眞の知者ならば擇ぶことを知らねばならない。又孟子、離婁上篇に「知之實、知_ス斯_ニ者_ニ(仁と義と)弗_レ去_ス是也」(孟子通解五〇四頁)とあるが如く眞の知者ならば固く守つて去らない者でなければならぬ。此の章の「守」と論語の「處」と、孟子の「弗_レ去」とは其の歸するところの義は同じである。又、孟子、公孫丑上篇に「夫_レ仁_ニ天_ノ之_レ尊_ニ爵_也、人_ノ之_レ安_ニ宅_也。莫_ニ之_レ禦_ニ而_レ不_レ仁_、是_レ不_レ智_也」また離婁上篇に「仁_ハ人_ノ之_レ安_ニ宅_也、義_ハ人_ノ之_レ正_ニ路_也、曠_ニ安_ニ宅_而弗_レ居_、舍_ニ正_ニ路_而不_レ由_、哀_哉」とあるは此の

章の義を祖述したもののやうである。

右第七章

【章旨】 上章の大知を承けて言ひ、又明かならざる端、即ち「不_レ能_ニ期_ニ月_ヲ守_ル」の意を擧げて、以て下章の顔回の能く守る所以の意を引き起すのである。

李仁壽曰く「此レ上章ノ大知ニ因リテ、而シテ衆人ノ不知ヲ言フナリ。中ハ擇バザル可カラズ。又守ラザル可カラズ。擇ビテ而モ守ラザレバ、終ニ己ノ物ニ非ズ。既ニ能ク之ヲ擇ビ、又能ク之ヲ守リ、然ル後、以テ知ヲ言フ可キナリ」と。

子曰、回_ノ之_レ爲_レ人_也、擇_ニ乎_ニ中庸_ヲ得_レ一_ニ善_ヲ、則_チ拳_ニ拳_ニ服_ニ膺_而弗_レ失_レ之_ヲ矣。

【譯讀】 子曰く、回の人と爲りや、中庸を擇び、一善を得れば、則ち拳拳服膺して之を失はず。

【字義】 〇回 孔子の弟子顔淵の名、淵は其の字、魯國の人、孔門第一の高弟、孔子より少い

こと三十歳。○一善 中庸の至れる理を指す。一は一徳の一と同じく純一の意。欽定四書解義に「一至善ノ理」と解したのが當つてゐる。徂徠が「一善ハ即チ一善言、一善行ナリ」と解し、仁齋が「一善ノ微ニ拳拳タル者」と注したのは共に善くない。○拳拳 大切にしてしつかりと奉持する貌、奉は兩手で承ける意、或は捧に作る。○服膺 膺は著ける、膺は胸間で、之を心胸の間に著けて忘失しない、即ち大切に能く操り守るを言ふ。

【直解】 孔子の仰せに、弟子顔回の人となりは、事毎によく善惡過不及を辨へて中庸の道を選び、もしよく一善即ち中庸の道を知り得た時には之を大切に捧げ持ち胸に著けて、之を守つて失はないやうにすることの出来る人であると。顔子が聰明多智であるが故に、能く中庸を擇ぶことを知り、且つ之を守ること久しくして、敢て失ふことのないのを稱揚せられたのである。論語に「子曰、回也、其心三月不違仁」(論語解義一六九頁)とあるのも同じ。仁は即ち善である。

朱子曰く「蓋シ顔子ハ眞ニ之ヲ知ル。故ニ能ク擇ビ能ク守ルコト此ノ如シ。此レ行フコトノ過不及ナキ所以ニシテ、而シテ道ノ明カナル所以ナリ」と。

右第八章

【章旨】 前章の「不能期月守也」を承けて、顔回の賢にして能く中庸の道を擇ぶことを知り、且つ能く之を守れることを稱揚したのである。陸稼書曰く「當ニ舜其大知ノ章ト對シテ看ルベシ。只知行ノ分ヲ重ンズ」と。

子曰、天下國家可均也。爵祿可辭也。白刃可踏也。中庸不可能也。

【譯讀】 子曰く、天下國家は均しうす可きなり。爵祿は辭す可きなり。白刃は踏む可きなり。中庸は能くす可からざるなり。

【字義】 ○均 平かに治めること。○爵祿 爵位俸祿をいふ。○白刃 劍戟などの拔身をいふ。

【直解】 子曰く、天下國家は至つて廣大なもので治め難いものではあるが、性質が明敏で才智のある人例へば齊の管仲のやうな人ならば、能く之を平治することが出来る。高位高官に登

り多くの俸祿を得ることは人情の好む所であつて、之を辭退することは容易な事ではないが、天性廉潔な人例へば論語に出てゐる晨門（論語解義五一四頁）荷蓀（論語解義六四五頁）のやうな人ならばよく之を辭退することが出来る。また命を投げ出し敵の閃きかざす白刃を犯し其の中に躍り入つて進むことは至つて難く甚だ恐ろしいことではあるが、性質が勇敢で死を畏れない人例へば子路のやうな人ならば、それが出来るであらう。以上の三事はいづれも容易でない至難なことではあるが、皆一方に偏つて居る事であるから、性質が其の方に長じてゐる人ならば、力めて之を行ふことが出来るが、唯中庸の道の宜しきを得ることは容易なやうで其の實は甚だむづかしく、義理に精通し、仁徳が圓熟して些の私欲の念のない者でなければ、到底出来ないことである。これ孔子が「中庸其至矣乎。民鮮能久矣」（六八頁）と歎かれた所以である。

【餘義】 朱子曰く「三ツノ者モ亦知仁勇ノ事（可レ均は知に似、可レ辭は仁に似、可レ蹈は勇に似たり、故に亦といふ）ニシテ、天下ノ至難ナリ。然レドモ皆一偏ニ倚ル。故ニ資ノ近クシテ而シテ、力、能ク勉ムル者ハ、皆以テ之ヲ能クスルニ足ル。中庸ニ至リテハ能クシ易キガ若シト雖モ、然レドモ義精シク仁熟シテ、而シテ一毫人欲ノ私ナキ者ニ非ザレバ、及ブコト

能ハザルナリ。三ツノ者ハ難クシテ實ハ易ク、中庸ハ易クシテ實ハ難シ。此レ民ノ能クスルコト鮮キ所以ナリ」と。説き得て最も明快ではあるが、三ツの者と中庸の道とは全く無關係であるといふ意味ではない。中庸の道は便ち三ツの者の上に在つて、三ツの者の外に存するのでは無い。只三ツの者を行ひ得て、それが時の宜しきに合ひ、節に中れば、便ちそれが直ちに中庸の道であるのである。

此の章は極めて中庸の道の能くし難いことを言はれたので、論語に「孔子曰、可レ與共學、未レ可レ與適道、可レ與適道、未レ可レ與立、未レ可レ與權」（論語解義三一〇頁）とあるのと其の語意が相似てゐる。上列の三ツの者も其の實は至難の事であるけれども、中庸の難いことを云はんが爲めに此くは云はれたのである。

右第九章

【章旨】 朱子曰く「亦上章ヲ承ケテ以テ下章ヲ起ス」と。即ち前に舜の大知の事を言ひ、次に顔回の中庸を擇んで之を守つたことを言つたのを承けて、本章には、舜や顔回は聖賢の人であるから、中庸の道を能く行ふことが出来たけれども、普通の人にはなかなか能く之を行ふこ

とが出来ないことを述べて、次の章の意を引き起したのである。

子路問強子曰南方之強與北方之強與抑而強與寬柔以教不報無道南方之強也君子居之衽金革死而不厭北方之強也而強者居之故君子和而不流強哉矯中立而不倚強哉矯國有道不變塞焉強哉矯國無道至死不變強哉矯

【譯讀】子路強を問ふ。子曰く南方の強與。北方の強與。抑も而の強與。寬柔にして以て教へ無道に報いざるは南方の強なり。君子之に居る。衽金革を衽とし、死して厭はざるは北方の強なり。而して強者之に居る。故に君子は和すれども而も流せず。強なる哉矯たり。中立すれども而も倚らず。強なる哉矯たり。國道あれば塞を變ぜず。強なる哉矯たり。國道無ければ死に至るまで變ぜず。強なる哉矯たり。

【字義】○子路 孔子の弟子、姓は仲、名は由、子路は其の字、魯の人、孔子より少きこと九

歳。孔門中勇を以て聞えた人である。○強 勇の作用で、力が人に勝つに足つて屈することがないのをいふ。朱注に「子路ハ勇ヲ好ム。故ニ強ヲ問フ」と。前章の「白刃可踏也」に承接してゐる。○與 歟と同じ。○南方 支那の南部地方。○北方 支那の北部の胡地に近い地方。○抑 「ソレトモマタ」と譯す、前をおさへて後を起す反語の辭。○而 汝と同じ。汝等學者といふ意。徂徠は「強者ノ上ニ而ノ字アルハ、北方ノ強ハ即チ子路ノ強ナリ」と解したのは牽強の説である。下文の而の字は皆助辭で、ここの而とは同じでない。○寬柔 寬緩柔和の略、心が「ユルヤカ」で「ヤサシイ」朱注に「寬柔以教トハ含容(寬)異順(柔)ニシテ以テ人ノ及バザルヲ誨フル也」と。○不報無道 人が無道横逆を以て我に加へても、直ちに之を受けて報復せざるをいふ。論語に「犯而不校」(論語解義二五四頁)とあるに同じ。○南方之強 南方は風氣が溫和であるから寬容忍耐の力が人に勝るを以て強とするので、即ち君子の道に近いが、これは消極的勇氣で、柔に過ぎて中正の道には及ばない。○君子 廣く善人の意に用ひた。○居之 自らそれを善しとして安んじ居る。○衽 臥席(シキモノ)なり「シトネ」蒲團の類、ここは動詞として用ふ、衽とするは借りて常に金革を身に離さずそれに習ひ安んじて共に起臥する意。○金革 金は刀劍や戈戟の類。革は甲冑の屬。○北方之強 北

方は風氣剛勁であるから、勇敢の力が、人に勝るを以て強とするのである。これは積極的勇氣であるが、血氣にはやつて中正の道に過ぎたものである。刺客や游侠の徒が之に似てゐる。○和而不流 人と和合すれば兎角流れて無遠慮となり心にしまりがなくなり易いものであるが、和すれども而も流せず其の中庸を得ることを以て強とする。而の字は和と不流と互に相反して兩立し難いものを結びつける辭。書經、舜典の四德（直、而溫、寬、而栗、剛、而無虐、簡、而無傲）や、皋陶謨の九德（寬、而栗、柔、而立、愿、而恭、亂、而敬、擾、而毅、直、而溫、簡、而廉、剛、而塞、彊、而義）の而の字は皆其の用例が同じである。○矯 強い貌で、詩經の魯頌泂水篇に「矯矯虎臣」とあつて、毛傳に「矯矯武貌」とある。孔子が四たび強哉矯と言つたのは其の強いことを贊歎して言つたのである。○中立而不倚 中道に立つてゐても、柔弱な者は、やがて何れか一方に偏倚するものであるが、中正の道に獨立して而も一方に偏倚らないのは、自ら己を持することの強いのであることを言ふ。禮記の學記に「強立而不反」とあるに同じ。○國有道 國が治つて道の行はれる時をいふ。○塞 音「ソク」「フサガル」と訓む、未だ榮達即ち立身出世をしない時に操り守る所のものをいふ。朱注に「塞ハ未ダ達セザルナリ。國ニ道アレバ、則チ未ダ達セザリシ時ノ守リシ所ヲ變セザルナリ」と。

世間には大臣大將などの地位を得ると、却つて節操を失ひ廉恥を忘れ、悪い事を敢てする小人が少くはない。それは孟子の所謂「既得小人爵、而棄其天爵。則惑之甚者也」(孟子通解七八四頁)と同じことで、實に歎くべきことであるが、それは固より中庸の強に當らないことは勿論である。ここに不變塞と曰つたのは、君子が塞時即ち在野卑賤の時に當り、道を學んで、他日出仕したならば、君を堯舜の如き聖天子に致し、民をして堯舜の民の如く太平の樂を享けしめたいとの素心を有してゐる以上は、用ひられて貴顯の地位に立つた曉は、決して其の志を變へることの無いのをいふ。○國無道 國が亂れて道の行はれない時をいふ。

【直解】 子路は勇を好む人であつた、そこで孔子に如何なるか是れ勇の作用である所の強でありますかと問ふたら、孔子の仰せに強の種類には色色あるが、お前の問ふ強といふのは、南方の人の強を問ふのか、北方の人の強を問ふのか、それとも汝等學者の行ふべき強を問ふのであるか。さて第一の強は人を教へる時でも、先方に行き届かない事があつても、寛緩に溫和にして之を教へて怒らず、若し或は無道横逆を以て我に加へることがあつても直ちに之を受け、返報もせず「チツ」と之を耐へ忍んでゐるのが、風氣の溫和な南方の人の強とする所である。是れ其の寛大で手厚い處が、君子の道に似て居るから、一般の善人君子は之を我が安

んじ居る所としてゐる。

また常に劍戟や甲冑を身に離さず、之を枉として起臥し、而して戦つて死んでも厭ひ悔ゆることがないのは、風氣の剛勁な北方の人の強とする所である。是れ即ち血氣の勇にはやつて中正の道に過ぎたもので、一般に強者と謂はれてゐる者の安んじ居る所であるが、眞面目に聖人の學問を修める者の行ふべき道ではない。

さて前に述べた南方の強と北方の強とは、過不及があつて中正の道でないから、汝等學者の務め行ふべき強の道ではない。さすれば汝等の行ふべき強は、道徳の盛んな君子が行ふところの強でなくてはならぬ。盛徳の君子は事を行ふに、すべて一方に偏ることがない。それ故に盛徳の君子は、人と交際するに和を以てするけれども、和に過ぎて流れて節を失ふやうなことがない。これこそ眞の強で其の強いことは實に矯矯として武く盛んなものである。又己の身を持することは、卓然として中正の道に立つて何れの一方にも偏らないで、其の眞に強いことは、實に矯矯然として武く盛んである。國家に道が行はれて相當の地位に達しては道を行ひ時を濟ふを以て念と爲して、肯て未だ其の志を得なかつた時の志行を變改して君に諂ひ世に阿るやうなことをしない。即ち孟子の所謂「富貴モ淫スルコト能ハザル」(孟子通解

三七一頁)ものであつて、これこそ眞の強で、其の強いことは實に矯矯として武く盛んなものである。

國家に道が行はれず、自分も志を得ない時は、義を守り命に安んずるを以て主と爲し、それが爲めには、たとへ死んでも肯て平生の節操を變改するやうなことをしない。即ち孟子の所謂「貧賤モ移スコト能ハズ、威武モ屈スルコト能ハザル」(孟子通解三七二頁)ものであつて、これこそ眞の強で、其の強いことは實に矯矯として武く盛んである。例へば和氣清麻呂の如きも、死を覺悟して守る所の道を變へなかつた一人である。斯ういつたなら道鏡が怒るといふことは百も承知してゐながら眞直ぐに神教を申し上げたのは實に偉いものだ。此の四つこそ汝の當に務むべき強の道である。蓋し南方の強と北方の強とは、どちらも一方に偏り、只氣質を以て人に勝つことをつとめるのであるが、君子の強は、則ち義理を以て自ら勝つに在る。此の君子の強があつて而る後に、中庸の道を能くすることが出来るのである。不レ流といひ、中立といひ、不レ倚といひ、至レ死不レ變と曰つたのは、皆其の強を見す所以である。

【餘義】「寛柔以教」は論語、述而篇の「誨人不倦」(論語解義二〇二頁・二四〇頁)と其の意が相近く、また「和而不流」は論語、學而篇の「禮之用、和爲貴」(中略)知和而和、不レ以レ禮節之、亦

不^ル可^カ行^ハ也^ハ（論語解義二三頁）と其の意が同じである。

一説に「塞」を充塞の義とし、徳行が充實してゐると解し、或は「塞焉」と連続し、焉は詩經、邶風燕燕篇の「其心塞淵」の淵と同義として、矢張り誠實の心が十分に充實してゐるといふ意に解し、國に正道が行はれてゐる場合は、かねて修養した徳行を實施して、情誼などに動かされるやうなことの無いのは眞の強であると説くのであるが、それでも意義が通じないことはない。

或問に曰く「此ニ子路ガ強ヲ問フコトヲ記スルハ何ゾヤ。曰ク、亦上章ノ意ヲ承ケテ以テ中庸ヲ擇ビテ之ヲ守ルコトハ、強ニ非ザレバ能ハズシテ、而シテ所謂強ハ又世俗ノ所謂強ニ非ザルコトヲ明カニスルナリ。蓋シ強トハ力以テ人ニ勝ツコト有ルノ名ナリ。凡ソ人和シテ節無ケレバ、則チ必ず流ニ至ル。中立シテ依ルコト無ケレバ、則チ必ず倚ニ至ル。國ニ道有リテ富貴ナレバ、或ハ其ノ平素ヲ改メザルコト能ハズ。國ニ道無クシテ貧賤ナレバ、或ハ久シク窮約ニ處ルコト能ハズ。持守ノ力ノ以テ人ニ勝ツコト有ル者ニ非ズンバ、其レ孰カ能ク之ニ及バン。故ニ此ノ四ツノ者ハ、汝子路ガ當ニ強ナルベキ所ナリ。南方ノ強ハ、強ニ及バザル者ナリ。北方ノ強ハ、強ニ過グル者ナリ。四ツノ者ノ強ハ、強ノ中ナリ。子路ハ勇ヲ好ム。

故ニ聖人ノ其ノ善ヲ長ジ、其ノ失ヲ救フ所以ノ者ハ、類ネ此ノ如シ」と。

右第十章

【章旨】 此の章は孔子が子路に教ふるに、血氣の勇を抑へて、道義の勇を務むべきことを以てせられたのである。即ち學者は必ず君子の強を行ふことが出来て而る後に、中庸の道を能くすることが出来ることを諭されたのである。

子曰、素隱行怪、後世有述焉。吾弗爲之矣。君子遵道而行。半途而廢、吾弗能已矣。君子依乎中庸。遯世不見知而不悔。唯聖者能之。

【譯讀】 子曰く、隱を素め怪を行ふは、後世述ぶること有らん。吾は之を爲さず。君子は道に遵ひて行ふ。半途にして廢すれども、吾は已むこと能はず。君子は中庸に依る。世を遯れ知られずして而も悔いざるは、唯聖者のみ之を能くす。

【字義】 ○素隱 朱子は素は漢書(藝文志)に劉歆が神仙家流を論じて孔子の言を引いて「素隱」に作つてあるのに従ひ、當に素に作るべし、蓋し字の誤であると曰つたのは確論である。素隱は隱暗にして偏僻の理を探索すること、即ち人の知ることの出来ないやうな事を探り強ひて知らんことを求めるので、所謂知者の過ぎたるをいふ。按ずるに漢書の顔師古の注に「求素隱暗之事也」とあるのを見れば、漢書の著者の班固の時には文字が未だ素に訛らなかつた證とすべきである。 ○行怪 怪しく詭異な事を行つて世人を駭かさうとするので、人の行ふことの出来ない事を行はんことを求めるのをいふ。素隱行怪は所謂賢者の過ぎたるをいふ。 ○述 祖述すること、其のことを本として敷衍するをいふ「後世有述焉、吾弗爲之矣」は、論語の「子曰、蓋有不知而作之者、我無是也」(論語解義二三三頁)と語意が頗る相似てゐる。 ○君子 徳の成就した士をいふ。胡雲峰は君子遵道の君子は泛く學者を指し、下の君子依乎中庸の君子は徳の成就した人を指すと解し、陸稼書も同じ考のやうであるが、一章中に在る君子を二様に解するは穩當でないから従はない。 ○遵道而行 中庸の道に遵つて行ふこと。朱注には「遵道而行ハ、則チ能ク善ヲ擇ブナリ矣」とある。 ○半途而廢 塗は途に通ず、途中で「ヤメル」こと、所謂愚不肖者の及ばないので、擇ん

で守ることの出来ないものである。 ○依 人に従ひ衣に従ふ字だ、人が著物を衣て始終肌身を放さぬやうに、中庸の道を體驗して須臾も我が身から離さぬやうにする意。金仞直曰く「遵ハ是レ勉強(シヒテツトメテスル)依ハ是レ自然ナリ」と。存疑に曰く「中庸ニ依ルト、道ニ遵ツテ行フノ遵ノ字トハ、同ジカラズ。依ハ是レ自然ニ出デテ、力ヲ著ケズ。遵ハ猶ホ力ヲ著クル也」と。講述に曰く「依ノ字ト遵ノ字トハ同ジカラズ。遵ハ我ヲ以テ道ニ循フ。猶ホ道トニタリ、依ハ依ニ於仁(論語解義二〇六頁)ノ依ノ如ク、相依リテ違ハザルヲ謂フ。道ト一タル也」と。 ○遷世 榮達することの出来る此の世間を外に見て遁れ隠れる。易經、乾卦文言に「龍徳而隱者也。不レ易ニ乎世、不レ成ニ乎名、遷レ世无レ悶」とあり。論語にも「人不知而不慍、不レ亦君子ニ乎」(論語解義一頁)とあつて、聖徳の事である。故に下に「聖者能レ之」とある。

【直解】 孔子の仰せられるには、兎角世の中には、隱暗にして偏僻つた理を探り求め、人の知ることの出来ない所の事を知りたいと求め、或は怪異なことを行つて、人の行ふことの出来ない事を行はうと求める人があつたが、かかる非常なことは、一時人の耳目を惹いて、世人を歎き、虚名を博するに足るから、後世或は喜んで之を祖述して尊ぶ者もあらうが、それは中

庸の道を得たものでないから、自分は決してさういふやうなことは致さない。自分は只中庸の正しい道を行ふだけである。

さて成徳の君子は、決して一時人にもはやされるやうな奇異なことは致さない。能く善を擇ぶことが出来て、常に中庸の道に違つて行ふものである。而るに世間には折角此の中庸の道を選ぶことが出来て之を行ひながら、力が足らず志が堅くない爲めに、中途で之を廢止し、此の中庸の有り難い道理を終りまで一貫して行ふことの出来ない人の多いのは、實に惜いことである。而るに自分は眞に此の道の有り難いものであることを知つたからは、逆も中途で止むに止まれないものがある。

前に述べたやうに隠を索め怪を行ふやうな詭異な事を爲すのは、中正の道でないから、成徳の君子は必ず中正にして過不及のない中庸の道に依つて行ふものである。而して一旦修養に志した上は、中途で廢止することが出来ずに、只管斯の道に勇猛精進するから、争亂の世に處りては、富貴利達などに心を奪はれることなく、世を遁れ隠れて、たとへ人が自分の才能や徳行を知つて呉れないでも少しも怨み悔むやうなことがない。しかしかやうな事は唯聖人といはれる人にして始めて之を能くすることが出来るのである。末段は實は孔子の御自身

のことであるけれども、謙遜して敢て自分が之を能くすることが出来るとは仰せられず、唯聖者能之と仰せられたのである。第二章に「君子中庸」とあるより此處まで中庸の道を論じて「聖者能之」までを一大段とする。

【餘義】 苟も道に志す學者は宜しく日々此の章を三誦して、確乎として動かない立派な志節を操守しなくてはならない。若しさうでない、世の中で今は此の事が流行から之を仕て見ようぢやの、今は斯ういふ學問が流行から之を仕ようぢやのと、何時もうろたへ惑つて心に安んずるところがない。それは未だ眞の道を知らないからで、眞の道を知る日になると、決して貧富窮達の爲めや「ツマラヌ」毀譽褒貶の爲めに志を奪はれるものではない。嗚呼百年再生の我なし。諸子は何ぞ奮つて聖賢の徒となり、眞の人物となつて此の世を了することを心掛けないのであるか。

此の章の第一節の子曰素隱行怪云云は、論語、雍也篇の「樊遲問知。子曰、務民之義、敬鬼神而遠之。可謂知矣」(論語解義一八八頁)また先進篇に「季路問事鬼。子曰、未能事鬼。人焉能事鬼」(論語解義三五六頁)また述而篇に「子不语怪力亂神」(論語解義二二四頁)とあるなどと併せ考へて孔夫子の意を料り知ることが出来る。

朱子曰く「隠ヲ索メ怪ヲ行フハ、深ク隱僻ノ理ヲ求メテ、而シテ過ギテ詭異ノ行ヲ爲スヲ言フナリ。然レドモ其ノ以テ世ヲ欺キテ而シテ名ヲ盗ムニ足ルヲ以テ、故ニ後世或ハ之ヲ稱述スル者有ラン。此レ知ノ過ギテ而シテ善ヲ擇バズ、行ノ過ギテ其ノ中ヲ用ヒズ、當ニ強ナルベカラズシテ、強ナル者ナリ。聖人豈之ヲ爲サンヤ」と。

君子遵道而行云云の一節は論語、衛靈公篇に

「子曰、吾嘗終日不食、終夜不寢。以思。無益。不如此學也」(論語解義五五六頁) 公冶長篇

に

「子曰、十室之邑、必有忠信如丘者焉。不如此丘之好學也」(論語解義一六〇頁) 里仁篇

に

「子曰、朝聞道夕死可矣」(論語解義一〇五頁) 述而篇に

「子曰、甚矣吾衰也。久矣吾不復夢見周公」(論語解義二〇五頁) また

「葉公問孔子於子路。子路不對。子曰、奚不曰、其爲人也。發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至。云爾」(論語解義二二二頁) また

「子曰、加我數年、五十以學易、可以無大過矣」(論語解義二二〇頁) また

「子曰、我非生而知之者。好古敏以求之者也」(論語解義二二二頁) などの語と参照し

たならば孔子が如何に一生涯修養に努力せられたかが分るであらう。而して學者が半途而廢することを戒められたのは、雍也篇に

「冉求曰、非不說子之道。力不足也。子曰、力不足者、中道而廢。今女畫」(論語解義一頁七一)とあるのと同じ意である。

「君子依乎中庸云云」の一節は論語、憲問篇に

「子曰、不患人之不己知。患己無能也」(論語解義五〇三頁) また

「子曰、不怨天。不尤人。下學而上達。知我者其天乎」(論語解義五〇九頁) とあるなどと併せ読んで孔子が命に安んじ道を樂みたまひし一斑を知ることが出来る。

なほ此の第十一章の句讀は、大體朱注によつたのであるが、物徂徠は

子曰、素隱行怪、後世有述焉。吾弗爲之矣。君子遵道而行。

半途而廢。吾弗能已矣。君子依乎中庸。

遯世不見知而不悔。唯聖者能之。君子之道、費而隱。(中庸解)

と段節を分けて讀んで、且つ曰く「蓋シ孔子ノ時ニ當リテ、老莊ノ學、既ニ其ノ漸アリ、故

ニ孔子云爾ス。而シテ子思著書ノ本意モ是ニ在リ。故ニ第三章以下孔子ノ言ノ中庸ニ及ブ者ヲ類聚シテ而シテ此ヲ以テ終フ焉。君子遵道而行ハ蓋シ古語ナリ。孔子此ヲ引キテ以テ證ト爲スナリ。道トハ先王ノ道ナリ。先王ノ道ヲ遵奉シテ而シテ之ヲ行フ。自然ニ索隱行怪ノ事アルコト莫キナリ。故ニ吾弗爲之矣ト曰フ。索隱行怪ノ徒モ、其ノ初ハ亦嘗テ先王ノ道ヲ學ビ、而シテ半途ニシテ廢ル者ナリ。君子依乎中庸ハ亦古語ナリ。蓋シ半途ニシテ而シテ廢スル者ハ、皆誤リテ先王ノ道ヲ以テ高遠ト爲ス、故ニ之ニ倦ムナリ。公孫丑ノ所謂道則高矣美矣(孟子通解九四六頁)ノ如キ、以テ見ル可キナリ。此レ高キニ登ルニハ必ズ卑キヨリスルノ義ヲ知ラザルニ坐スルガ故ナリ。中庸ハ平常ノ行、諸性ニ本ヅケ、卑近ニシテ行ヒ易シ。此レニ依レバ則チ自然ニ已ムコト能ハズ。中庸ニシテ依ト曰フハ、猶ホ依ニ於仁(論語解義二〇六頁)ノ依ノ如シ。其ノ中庸ニ離レザランコトヲ欲スルヲ謂フナリ。云云」と。

此の如く解すれば、宋儒の説のやうに君子遵道の君子は泛く一通りの學者を指し、君子依乎中庸の君子は成徳の君子を指すと二様に解することを要しないで、一章の意味も能く疏通するやうに思はれる。一説として存したいと思ふ。

右第十一章

【章旨】 中庸の道と相始終することを得るは、唯聖人のみ之を能くすることを言ふ。君子中庸の章と相應ず。

朱子曰く「子思が夫子ノ言ヲ引イテ、以テ首章ノ義ヲ明カニスル所ノ者ハ此ニ止ル。蓋シ此ノ篇(中庸の全篇)ノ大旨ハ知・仁・勇ノ三達徳ヲ以テ道ニ入ルノ門ト爲ス。故ニ篇ノ首ニ於テ即チ大舜・顔淵・子路ノ事ヲ以テ之ヲ明カニス。舜ハ知ナリ、顔淵ハ仁ナリ、子路ハ勇ナリ。三ツノ者ハ、其ノ一ヲ廢スレバ則チ道ニ造リテ而シテ徳ヲ成スコト無シ。餘(知・仁・勇の餘義)ハ第二十章ニ見ユ」と。

君子之道、ハナレドモ費而隱、ナリ夫婦之愚、モ可以與知焉。及其至也、ニ雖聖人、ト亦有所不知焉。夫婦之不肖、モ可以能行焉。及其至也、ニ雖聖人、ト亦有所不能焉。天地之大也、ハ人猶有所憾。故君子語大、ニ天下

莫能載焉。語小、天下莫能破焉。詩云、鳶飛戾天、魚躍于淵。言其上下察也。君子之道、造端乎夫婦、及其至也、察乎天地。

【譯讀】君子の道は費なれども而も隠なり。夫婦の愚も以て與り知るべし。其の至れるに及んでは、聖人と雖も、亦知らざる所あり。夫婦の不肖も、以て能く行ふべし。其の至れるに及んでは、聖人と雖も、亦能くせざる所あり。天地の大なるも、人猶ほ憾むる所あり。故に君子大を語れば、天下能く載すること莫し。小を語れば、天下能く破ること莫し。詩に云く、鳶飛んで天に戾り、魚淵に躍ると。其の上下に察かなるを言ふなり。君子の道は、端を夫婦に造す。其の至れるに及んでは、天地に察かなり。

【字義】○君子之道 君子の依つて行ふところの道。○費而隱 費は説文に「財用ヲ散ズル也」とある。費用の費と同じ、朱注には「費用之廣也、隱體之微也」とある。即ち費は道の作用の廣大にして極らないこと、例へば人人が日日に爲す所の「コマゴマ」とした一切の事は皆道に外ならないのをいふ。隱は道の本體の隱微にして凡人の知り難く能くし難いものであるこ

とをいふ。前の索隱の隱は隱僻無用のことをいひ、この費隱の隱は道の隱微で知り易くないことをいふ。而は費と隱と相反して兩立し難い者結びつける語であることは、已に前にも説明した。この費と隱とは開卷第一に程子が言はれた「放之則彌六合、卷之則退藏於密」と同じ意である。○夫婦 匹夫匹婦の略、教育のない無智の小民をいふ。匹夫匹婦は、愚にして且つ不肖なりと雖も、父母の尊いことを知つて、之を孝養し、子弟の卑いことを知つて之を慈み育てる。是れ下文に「與知」「能行」といふ所以である。○其至 全體を極め盡すこと。○雖聖人亦有所不知 孟子に「堯舜之知、而不徧物」(孟子通解九五四頁)とあるに同じ。それであるから本篇にも「舜好問」(七五頁)とある。侯仲良(字ハ師聖、程子ノ門人)の説に「聖人ノ知ラザル所トハ、孔子ノ禮ヲ問ヒ(家語の觀周篇に「孔子問禮於老聃」とある)官ヲ問フ(左傳、昭公十七年に「仲尼見於鄭子而學官」とある)類ノ如シ。能クセザル所トハ、孔子ノ位ヲ得ズ(朱子曰く、中庸に「大德必得其位」と、孔子は大德あれども而かも其の位を得ず)堯舜ノ博ク施スコトヲ病ム(論語解義一九八頁に「博施於民而能濟衆……堯舜其猶病諸」とある)ノ類ノ如シ」と。○所憾 不満足即ち遺憾に思ふ。即ち時に風雨寒暑の不順や、水旱地震などの天災地異のあるのをいふ。書經、君牙篇に

「夏暑雨小民惟曰怨咨」(ウラミナゲク)冬祁寒、小民亦惟曰怨咨、(夏の暑雨や冬の大寒は亦天の常道であるけれども、小民は猶ほ怨み嗟く、心に中正が無いのをいふ)とあるも同じ意である。蘇東坡の泗州僧伽塔の詩に「耕田欲雨刈欲晴。去得順風來者怨。若使二人禱輒遂、造物應須日千變」とある。天は公平無私であるけれども、萬遍なく吾人を満足させることは出来ない即ちこの有る所憾の意を詠じたもので面白い。鄭注に「憾ハ恨ナリ。天地ハ至大ニシテ覆載セザル無キモ、人尙ホ恨ムル所アリ、況ヤ聖人ニ於テ能ク盡ク之ヲ備ヘンヤ」と曰へるは簡明で切當の解である。これ即ち知らざる所あり、能はざる所がある所以である。◎語大天下莫能載。道は至つて大にして、天地間に充滿してゐるが故に、其の外に在つて能く之を載せる者は無いとの意。◎莫能破。道は至つて大であると共に、又至微至細の物にも遍く行き渡つてゐるから、何物も之を分割して、其の内に入ることは出来ないとの意。朱子は「其大無外、(天下莫能載をいふ)其小無内(天下莫能破をいふ)」と注して居るが、要するに道は遍く天地間に充滿して包ねざる所なく、在らざる所なき意を言つたのだ。莫載・莫破は道の大小あることを形容して之を極言したのである。淮南子、原道訓にも「夫道者、舒之、帙於六合、卷之不盈一掬」とある。◎詩 詩經、大雅旱麓篇。◎

戻 至るなり。◎其 君子之道を指す。◎察 著れ明かなる意。觀察の察ではない。饒雙峯曰く「察ハ是レ自然ニ昭著ナル也、便チ是レ誠ノ揜フ可カラザルナリ」(下の第十六章に出づ)と。鄭注に「察ハ猶ホ著ノ如キナリ。言フココロハ聖人ノ徳、天ニ至レバ、則チ鳶飛ビテ天ニ戻ル。地ニ至レバ則チ魚、淵ニ躍ル。是レ其ノ天地ニ著明ナルナリ」と。◎端 始なり、匹夫匹婦の與り知り、能く行ふ所の日常卑近の事を以て其の起端とするをいふ。林次崖曰く「造端ハ猶ホ起頭ト云フガ如キ也、君子ノ道ハ夫婦ノ處ヨリ起頭シ、那ノ盡頭盡角ノ處ニ到ルニ及ビテハ、則チ天地ノ間ニ昭著ニシテ在ラザルコト無シ」と。或問に曰く「造端乎夫婦」ハ其ノ近小ヲ極メテ言フナリ「察乎天地」ハ其ノ遠大ヲ極メテ言フナリ」と。【直解】 君子の依りて行ふ所の道は、其の作用が廣大無邊で、遍く天地間に行き渡つて所として在らざることなく、時として然らざることがない。そこで人人の日に爲す所の一切の事は皆道の外に出ない。しかし其の道の本體は至つて隱微なもので容易に知り難く、能くし難いものである。さて君子の道は天命の性に本づいた日用普通の道であるから、道的一端である手近い處は、無知な匹夫匹婦でも與つて之を知ることが出来るが、しかしながら道は廣大無邊で而も其の本體眞義は極めて隱微なものであるから、其の一切を盡くす所の至極の點

になると、たとへ聖人でも之を知ることの出来ない所がある。極く卑近なことは、不肖即ち愚かな匹夫匹婦でも之を行ふことが出来るが、其の一切を盡くす至極の點になるとたとへ聖人でも之を行ふことの出来ないやうな所がある。獨り聖人が之を皆悉く知り行ふことが出来ないばかりでなく、天は萬物を覆ひ育て、地は萬物を載せ育てる作用の廣大なものであつても猶ほ其の運行の正しきを得ないで、風雨寒暑の宜しきを失つたり、其の他の天災地變があつて、盡くは人人の望み通りにはならず、之を不満足に思ひ天地の大徳を憾むるやうなことも無いことはない。

然るに此の君子の依りて行ふ所の中庸の道といふものは、少しも憾むるといふやうなことがない。即ち道は一方に偏らず、永久に易ることがなく、遍く天下の事事物物に行き渡つて至らぬ限もない。それ故に其の道の廣大な點から申せば、朱子の所謂「其ノ大外ナシ」で、これより大なるものがなく、天地をも包むからして、天地の大も載せきれないし、其の細小なる點から申せば、道は如何なる微細なものにも寓してゐるから、朱子の所謂「其ノ小内無シ」で、どんなに小さく分析しても、如何なる至微至細の物でも必ず道を具有してゐるから、到底之を破り得ないのである。されば實に天地の大徳に對してさへ時に不満を感じることを免れな

い者でも、此の中庸の道の圓滿普遍であつて、而も少しの缺陷のないことを認めない者はないであらう。

「そこで此の中庸の道の廣大で至らぬ限もないことを詩經にも詠じてある。其れを子思が引いて來て曰はれるには、詩の大雅旱麓篇の詞に「上には鳶が徐かに舞うて高く飛んで天に戻つて逍遙として其の所を得て居る。又下には魚が深い淵の底に躍つて從容として其の所を得て居る」と曰つてある。この鳶の飛び魚の躍るのは皆道の作用に由るもので、鳶の飛ぶのは道が上天に著はれ明かなので、魚の躍るのは道が下地に著はれ明かなのである。即ち道の上下天地に明かであることを説明したのである。それと同じく聖人がこの道を以て天下國家を治める時は、上も下も此の道が明かに行はれて、天地萬物皆其の所を得るやうになり、人民は固より言ふまでもなく、禽獸蟲魚に至るまで皆其のお蔭を蒙つて生育し、首章に所謂「天地位焉、萬物育焉」とあることを實現することが出来るのである。

かく道が遍く天地間に行き渡つて、在らざる所のないのを見ると、道の作用の費即ち廣大なことは知られるであらう。しかし其の道の本體眞義は極めて隱微であるから、容易に知ることが出来ない。即ち隱である。さすれば吾人は一生涯戒慎恐懼し、獨りを慎むの工夫を積ん

で、之を知り之を行ふことに努力しなくてはならない。以下上文を結んで曰く、之を要するに廣大で而かも隠微である君子の道は其の端緒を無知不肖な匹夫匹婦から始め、之を推し極めて其の全體を求むれば、上天下地至る所として此の理の昭かに著はれるものでないものはないのであると。

【考異】 費而隱 太田錦城の九經談卷四には「費ハ光明ナリ隱ハ幽微ナリ。下文ニ所謂小大是レナリ。淮南子ノ地形訓ニ「扶木(扶桑木なり)在ニ陽州。日之所レ噴」ノ注ニ「噴ハ猶ホ照也」と。噴は音「ヒ」字書に「噴與レ沸同」「沸日光也」トアリ。費ハ噴・沸ト通フ。是レ予ノ舊説ナリ。後ニ毛奇齡ノ中庸説ヲ讀ムニ云フ「道原有ニ此顯著者、即謂ニ之費。道原有ニ此隱微者、即謂ニ之隱」ト。予ノ説ト合ス」とある。費を光明と訓むときは、隱の字に對して字を用ひることが極めて精切な感じがする。一説として存すべきである。

而るに物徂徠は前に述べたやうに、君子之道、費而隱の一句を前章の結語と爲し、且つ曰く、

「君子之道費而隱トハ亦古語ナリ。費ハ拂ニ同ジ、鄭玄ハ僂ト訓ス (鄭注に「隱ル可キノ節ヲ言フナリ、費ハ猶ホ僂ノ如キナリ、道ハ費セズシテ仕フ」とある) 荀子(賦篇)ニ僂詩ア

リ。道、違拂スル所アルヲ言フ。又鄭玄ノ緇衣ノ解ニ「費或ハ悖ニ爲リ、或ハ悖ニ爲ル」古言タルコト見ル可キノミ。必ズ違拂スル所アリテ而ル後ニ隱ルルヲ言フ。是レ君子ノ常道ナリ。故ナクシテ世ヲ遷ルルハ豈君子ノ道ナランヤ。朱熹以テ下章ニ屬シ、而シテ曰ク「費ハ用ノ廣キナリ、隱ハ體ノ微ナルナリ」ト。古ニ是ノ言ナク、又是ノ義ナシ。従フベカラザルナリ」と。其の説、略鄭玄の注に本づいてゐるが、稍新奇に失する嫌があるから採らない。

【餘義】 夫歸之愚云云 中井履軒曰く「夫婦ハ匹夫匹婦ノ略語ナリ。匹夫匹婦ハ是レ微賤者ノ通稱ナリ(中略) 夫婦之愚ハ所謂愚夫愚婦ト相遠キコト無キ也。室ニ居ルノ近キヲ指スニ非ズ(朱注に近、自ニ夫婦居レ室之間、遠而至ニ於聖人天地所レ不能レ盡云云とあるを駁す)一事ノ粗ナルヲ以テ言ヘバ、愚夫愚婦モ亦之ヲ知ル。朝ハ作キタニ息ヒ、饑エテ食ヒ、渴シテ飲ミ、夏ハ葛シ冬ハ裘スルノ類是レ也。其ノ精ヲ論ズレバ、則チ聖人モ亦知ラザル所アルナリ。天ハ何ヲ以テ旋リテ息マザルカ、地ハ何ヲ以テ靜カニシテ陥ラザルカ、磁針ノ北ヲ指シ鐵ヲ吸フノ類是レ也。田ヲ耕シ飯ヲ炊ギ、屋ヲ葺キ衣ヲ製スルハ、夫婦ノ不肖モ皆能クス。樹藝ノ巧ニ至リテハ、則チ堯モ后稷ニ若カズ、搏拊簫韶(書經、益稷篇に出づ)ノ美ハ、則チ舜モ夔ニ若カズ、聖人モ能クセザル所アルニ非ズヤ」と。

夫婦を朱子は「夫婦居室」と解して「男女室ニ居ルハ、人事ノ至近ニシテ、而シテ道、其ノ間ニ行ハル」と曰ひ、また「君子ノ道ハ、近クハ夫婦室ニ居ルノ間ヨリ、遠クシテハ聖人天地ノ盡スコト能ハザル所ニ至ルマデ、其ノ大ハ外ナク、其ノ小ハ内ナシ。費ト謂フベシ。然レドモ其ノ理ノ然ル所以ハ則チ隱ニシテ之ヲ見ルコト莫キナリ」と註してゐる。史伯璿は「夫婦居室」の義を詳論して「男女構精、形交氣感、雖若鄙褻、不不足道、然眞精妙合、自是造化流行發育生生不窮之蘊奧。以愚不肖之夫婦、他無所知所能、而獨知此能此云云」と曰つてゐる。此の宋儒の説に従へば、末段の「造端乎夫婦」も先づ家には夫婦といふものがあつて而して父子・兄弟といふものがある。夫婦が相和して父子も親み、兄弟も仲善くなり、一家が能く齊ふ、而して其の道を一村に推し及ぼせば一村が能く治り、一村から一郡一國に推し及ぼし、一國から天下に推し及ぼし、遂に天下が太平に治り、所謂「天地位焉、萬物育焉」やうになることが出来ると思ふべきである。即ち大學の「家齊而后國治、國治而后天下平」(大學解義四八頁)孟子、梁惠王上篇の「詩云、刑于寡妻、至于兄弟、以御于家邦。言舉斯心、加諸彼、而已云云」(孟子通解五四頁)などと同じ意に歸するのである。一説として存すべきである。

許白雲曰く「鳶飛ビ魚躍ルハ、大概上天下地、道ノ在ラザル無キヲ言フ。偶詩ノ兩語ヲ借りテ、以テ之ヲ明カニス。其ノ意、專ラ鳶ト魚トニ在ルニアラザルナリ。此ヲ觀レバ、則チ兩間ニ在ル者、飛潛動植、何所ニ往クトシテ、道ノ著ハレタルニ非ザラン。且ツ蒼然トシテ上ニ在リ、塊焉トシテ下ニ在ル者、又庸ゾ道ノ著ハレタルニ非ザランヤ。則チ人、日用ノ間ニ於テ、道ヲ離レント欲スト雖モ、得可カラザル者有リ。其レ造次顛沛ノ間モ、功ヲ此ニ用ヒザル可ケンヤ」と。

陳白沙も亦曰く「此レ其ノ意、鳶魚ノ上ニ在ラズ。只是レ高處ニ于テ一物ヲ舉ゲテ之ヲ言ヒ、下處ニ于テ一物ヲ舉ゲテ之ヲ言フ。此ノ理ノ天地上下ノ間ニ充滿シテ、在ラザル所無キコトヲ見得スル耳」と。

右第十一章子思之言蓋以申明首章道不可離之意也其下八章雜引孔子之言以明之。

【譯讀】右第十二章。子思の言なり。蓋し以て首章の道は離る可からざるの意を申明せしなり。其の下八章は孔子の言を雜引して以て之を明かにせし

なり。

【直解】 朱子曰く、右の第十二章は子思の言葉である。蓋し以て首章の道は離るべからずと云ふ意味を重ねて繰り返して明かにしたのである。其の以下の八章は孔子の言を雜へ引いて此の章の意味を明かにしたのである。

【章旨】 此の章は、前の朱子の説の如く、申ねて首章の「道也者、不可須臾離也」の意を説明して、中庸の道の廣大にして天地間に在らざる所なき意を極言したのである。

子曰、道不遠人。人之爲道而遠人、不可以爲道。詩云、伐柯伐柯、其則不遠。執柯以伐柯、睨而視之、猶以爲遠。故君子以人治人、改而止。忠恕違道不遠。施諸己而不願、亦勿施於人。

【譯讀】 子曰く、道は人に遠からず。人の道を爲して人に遠きは、以て道と爲すべからず。一詩に云く、柯を伐り柯を伐る、其の則遠からずと。柯を執つて以て柯を伐り睨して之を視て、猶ほ以て遠しと爲す。故に君子は人を以て人を治め、改めて而して止む。一忠恕道を違ふること遠からず。諸を己に施して願はずれば、亦人に施すこと勿れ。

【字義】 ○道不遠人 道は人の性のままに循ふもので人人の能く知り能く行ふ所の者であるから不遠人といふのである。○人之爲道而遠人云云 人が若し道の卑近であることを厭うて反つて務めて高遠にして行ひ難い事を爲すときは、則ち人倫日用の間を離れて、眞の道とは爲すべからずとの意。朱子語録に曰く、「以上ノ三句ハ、是レ一章ノ綱ナリ。下面ノ三節ハ、只是レ此ノ三句ヲ解ス。然レドモ緊要ノ處ハ、又「道不遠人」ノ一句ニ在リ」と。○詩 詩經、豳風伐柯の篇。○柯 斧の柄。○則 法なり、様子即ち手本をいふ。周禮の注に「伐木ノ柯柄ハ長サ三尺博サ三寸」とある。○睨 邪視なり「ナガシメ」に見ること、一寸「ヨコメ」に見る。○以人治人 其の人の能く知り能く行ふ所の道を以て還りて其の人の身を治めること。中井履軒曰く「以人ノ人ハ人性ニ固有スル所ノ道ヲ謂フ」と。又曰く「禹ノ水ヲ治ムルハ、水ノ道ナリ（孟子通解八五二頁）是レ水ノ道ヲ以テ水ヲ治メシ耳、此ノ以人治人ハ義正ニ同ジ。人ノ道ヲ以テ人ヲ治ムル也」と。○改 其の人が自ら改めるをいふ。○忠恕 朱子は「盡己之心爲忠、推己及人爲恕」と注した。即ち己の眞心を盡すを忠といひ、己の心の誠を推して人に及ぼすを恕即ち「ホモヒヤリ」といふ。忠も恕も會意文字で、中心の實を盡

【字義】 ○道不遠人 道は人の性のままに循ふもので人人の能く知り能く行ふ所の者であるから不遠人といふのである。○人之爲道而遠人云云 人が若し道の卑近であることを厭うて反つて務めて高遠にして行ひ難い事を爲すときは、則ち人倫日用の間を離れて、眞の道とは爲すべからずとの意。朱子語録に曰く、「以上ノ三句ハ、是レ一章ノ綱ナリ。下面ノ三節ハ、只是レ此ノ三句ヲ解ス。然レドモ緊要ノ處ハ、又「道不遠人」ノ一句ニ在リ」と。○詩 詩經、豳風伐柯の篇。○柯 斧の柄。○則 法なり、様子即ち手本をいふ。周禮の注に「伐木ノ柯柄ハ長サ三尺博サ三寸」とある。○睨 邪視なり「ナガシメ」に見ること、一寸「ヨコメ」に見る。○以人治人 其の人の能く知り能く行ふ所の道を以て還りて其の人の身を治めること。中井履軒曰く「以人ノ人ハ人性ニ固有スル所ノ道ヲ謂フ」と。又曰く「禹ノ水ヲ治ムルハ、水ノ道ナリ（孟子通解八五二頁）是レ水ノ道ヲ以テ水ヲ治メシ耳、此ノ以人治人ハ義正ニ同ジ。人ノ道ヲ以テ人ヲ治ムル也」と。○改 其の人が自ら改めるをいふ。○忠恕 朱子は「盡己之心爲忠、推己及人爲恕」と注した。即ち己の眞心を盡すを忠といひ、己の心の誠を推して人に及ぼすを恕即ち「ホモヒヤリ」といふ。忠も恕も會意文字で、中心の實を盡

すのが忠。人の心は己の心の如し、己の心の欲する所は、人も亦之を欲し、己の心の願はない所の事は、人も亦之を願はない。故に己を推して人に及ぼすのを恕といふ。陳北溪曰く「恕ハ是レ人ヲ待チ物ニ接スルノ處ニ就イテ説ク。只是レ己ノ心ノ眞實ナル所ノ者ヲ推シテ、以テ人ト物トニ及ボス而已」と。論語に「曾子曰、夫子之道、忠恕而已矣」(論語解義一一三頁)と。○違 去ると訓む。左傳、哀公二十七年に「齊師違穀七里」の違の如し。此より彼に至る距離をいふ、背いて之を去るの意ではない。

【直解】 道は天命の性に從ふもので、人人日に用ひ常に行うて須臾も人の身から離れることの出來ないものである。それで孔子の仰せられるには、道といふものは日用卑近のもので決して人に遠いものではない。若し道を行ふ者が、其の卑近の事を厭うて爲すに足らない「ツマラヌ」ものとして、反つて務めて高遠にして行ひ難いことを行はうとするならば、それは決して正しい眞の道と爲すことは出來ない。詩經、豳風伐柯の篇に、斧の柄を伐り、斧の柄を伐るには、其の法則とすべきものは遠く求めるには及ばない。現に今己の手に持つてゐる斧の柄の長さに準じて伐れば善いと云つてあるが、それは如何にも尤な言葉で、斧の柄を執り持つて、木を伐つて新に斧の柄を作るには、今伐らうとして手に持つてゐる斧の柄の長

短が、其の儘直ちに法則となるからである。しかしそれでも今手に執り持つてゐる斧の柄と、今伐り取らうとする木とは、もと別な物であるから、一寸彼と此とを横目で見て而して寸法を定めなくてはならない。やはり相當の距離がある。而るに道は天命の性に率ふもので、人人が誰でも同じやうに天から稟け得てゐるものであるから決して遠い距離のあるものではない。それ故に君子が人を治めるには、即ち其の誰でも心に固有してゐる道を以て、其の人を治めるので、決して彼と此との別はない。且つ少しも高遠にして行ひ難い事を以て責めることをしない。而して其の人が己の非を改めたならば、直ちに止めて復深く求めることをしない。之を要するに道は決して人に遠いものではないからである。

さて己の心を盡す忠、己の心を推して人に及ぼす恕は、道と相去ることが遠くないものである(履軒曰く「不レ遠ハ即チ近キ也、近キハ即チ同ジキ也、言語ニ緩急アル而已、別ニ解テ生ズルコト勿レ」と)そこで人が若し無理な事を以て自分に對して施し行つた時に、自分は之を心に願はない厭な事であると思つたならば、自分も亦同じやうな無理な事を他人に對して仕向けるやうなことを仕てはならぬ。是れ亦道を行ふの事で、道の人に遠いものでない所以の理を推して知るべきであらう。朱子曰く「諸ヲ己ニ施シテ願ハザレバ、亦人ニ施スコト

勿レトハ、忠恕ノ事ナリ。己ノ心ヲ以テ人ノ心ヲ度レバ、未ダ嘗テ同ジカラズンバアラズ。則チ道ノ人ニ遠カラザル者見ルベシ。故ニ己ノ欲セザル所ヲバ則チ以テ之ヲ人ニ施スコト勿キモ、亦人ニ遠キハ以テ道ト爲サザルノ事ナリ。張氏ノ所謂「己ヲ愛スルノ心ヲ以テ人ヲ愛スレバ則チ仁ヲ盡ス」トハ是レナリ」と。

【餘義】 道不レ遠レ人は、論語、述而篇に「子曰、仁遠乎哉。我欲レ仁、斯仁至矣」(論語解義二三五頁)孟子、離婁上篇に「孟子曰、道在レ爾。而求ニ諸遠。事在レ易。而求ニ諸難。人人親ニ其親、長ニ其長、而天下平」と同義である。孟子、告子上篇に「仁義禮智、非ニ自レ外ニ我ニ有之也。弗レ思、耳矣。故曰、求、則得、舍、則失之」とあるは、論語の「仁遠乎哉」の義を祖述したもので、亦道の人に遠からざる所以を説いたのである。宋の戴益の探春詩に「盡日尋春不見春。芒鞋踏遍隴頭雲。歸來笑拈梅花嗅。春在二枝頭已十分」とあるも亦暗に此の意を詠じたのである。

忠恕違道不レ遠云云 此の句を承けて、次節に子に求むる所、以て父に事へ、臣に求むる所、以て君に事へ、弟に求むる所、以て兄に事へ、朋友に求むる所、先づ之を施すの四條を列舉してあるのは、大學の傳の十章に「上ニ惡ム所、以テ下ヲ使フコト母レ、下ニ惡ム所、

以テ上ニ事フルコト母レ、云云」(大學解義一二八頁)と六條を列舉して之を絜矩の道と謂ふとあるのと、頗る相似てゐる。忠恕は孔子の最も重んずる所で、且つ曾子が「夫子ノ道ハ忠恕ノミ」と曰つたのに徴すれば、曾子の門人子思が中庸に於て忠恕を説き、儒教の目的を論述した大學の絜矩の道と、其の説の合致してゐるのは偶然ではなからう。

君子之道四。丘未能一焉。所求乎子、以事父、未能也。所求乎臣、以事君、未能也。所求乎弟、以事兄、未能也。所求乎朋友、先施之、未能也。庸德之行、庸言之謹、有所不足、不敢不勉。有餘不敢盡。言顧行、行顧言。君子胡不慥慥爾。

【譯讀】 君子の道は四。丘未だ一をも能くせず。子に求むる所以て父に事ふるは、未だ能くせざるなり。臣に求むる所以て君に事ふるは、未だ能くせざるなり。弟に求むる所以て兄に事ふるは、未だ能くせざるなり。朋友に求むる所、先づ之を施すは、未だ能くせざるなり。庸徳を之れ行ひ、庸言を之れ謹み、足ら

ざる所あれば、敢て勉めずんばあらず。餘あれば敢て盡さず。言は行を顧み、行は言を顧みる。君子胡ぞ慥慥爾たらざらん。

【字義】 ○丘未_レ能_レ一 丘は孔子の名、自分をいふ時は、名を稱するが體である。未_レ能_レ一は孔子の謙辭である。論語に「君子道者三、我無_レ能_レ焉」(論語解義五〇一頁)とあるのと語意相似たり。○求 責なり、かくありたいと望むこと。所_レ求_ニ乎_レ子_一とは孝で、所_レ求_ニ乎_レ臣_一とは忠で、所_レ求_ニ乎_レ弟_一とは悌で、所_レ求_ニ乎_レ朋友_一とは信である。この孝悌忠信の四者は即ち中庸の道である。○先施 自分の方から先づそれを行ふこと。○庸德 庸は中庸の庸と同じく平常の義、即ち孝悌忠信等の日常爲すべき徳をいふ。○行 實踐すること。○庸言 平常普通に誰でもいふべき言葉。即ち孝悌忠信の言をいふ。易經、乾卦文言に「龍徳、而正中者也。庸言之信、庸行之謹、閑邪存其誠」と。荀子、不苟篇に「庸言必信之、庸行必慎之」と。○謹 注意して其の可_レを擇びて之を言ひ、安りに言はざる義。○所_レ不_レ足 徳行にかかる、徳行は常に足らぬ勝_レのものである。○有_レ餘 言語にかかる、言語は常に餘計になり勝ちのものである。○顧 言と行とを見合はせて、兩方がよく釣り合ふやうにすること。即ち言行の一致せんことを欲する義。陳北山は「人之言常有_レ餘於行、而行常不_レ足於言、言顧_レ行、則

言之有_レ餘者、將_ニ自_レ損_一、行顧_レ言、則行之不_レ足者、將_ニ自_レ勉_一。此一章、語若_ニ雜出_一、而意脈貫通、反_ニ復_レ於_レ人己之間_一者、詳盡明切、而有_レ序、其歸不_レ過_レ致_ニ謹_一於_レ言行_一、以_レ盡_ニ其實_一耳」と説いてゐる。○胡不 盍なり。○慥慥爾 篤實の貌。

【直解】 君子の務め行ふべき道は凡そ四つあるが、丘は未だ其の二つに能くすることが出来ない。第一には父として我が子に對してかくありたいと要求する所を以て、我が父に事へまつりて十分に孝を盡すことは、未だ之を能くすることが出来ない。第二には我が召し使ふ臣下に對してかくもありたいと要求する所を以て、我が君に事へまつりて十分に忠を盡すことは、未だ之を能くすることが出来ない。第三には我が弟に對してかくもありたいと要求する所を以て我が兄に事へることは、未だ之を能くすることが出来ない。第四には我が朋友に對してかくありたいと要求する所を以て、自身の方から先づ朋友に對して之を任向けることは、未だ之を能くすることが出来ない。

さて右に述べたやうに君子の行ふべき四つの道は、未だ満足に實行することは出来ないが、一旦道に志した上は決して中途で廢止すべきではない。而して君子たる者は別に非常なことを言ひ、又は行ふものではなく、父子・君臣・兄弟・朋友の四つの道を行ふにも、唯日常爲す

べき徳を實行し、日常言ふべきことを謹んで言ひ、我が徳行が不十分な所があれば、これではならぬと一層勉め勵んで之を實踐躬行しなければ已めない。若し又言葉が過ぎて餘りあれば、之を言ひ盡さないやうにつとめて口數を少くし、我が言ふことは果して實行と一致してゐるか如何かと顧みるやうにするが故に、言ひ過ぎることもなく、我が行ふ所は果して平生の言葉と一致してゐるか如何かと顧みるやうにするが故に行ひの足らないこともない。常にかやうに注意して努力する所の君子の言行は、如何して慥慥爾として篤實眞厚でないことがあらうぞ。

【考異】 慥慥 履軒曰く「慥慥ハ猶ホ孜孜ノ如シ。是レ勉勵シテ休暇スルコトヲ得ザル貌。文ニ心ニ從ヒ造ニ從フ。蓋シ心ヲ用ヒテ造作スルコトアルノ義ナリ。朱注ニ「篤實ノ貌」トアルハ、是レ臆度ニ出ヅル者ナリ、從フ可カラズ」と。一説として存す。

【餘義】 言願レ行、行願レ言は論語、學而篇に

「子曰、君子（中略）敏ニ於事ニ而慎ニ於言」（論語解義二五頁）爲政篇に「子貢問ニ君子ハ、子曰、先レ行ニ其言、而後從レ之」（論語解義四八頁）里仁篇に「子曰、君子欲下訥ニ於言、而敏ニ於行」（論語解義一一二頁）また同篇に

「子曰、古者言之不レ出、恥ニ躬之不レ逮也」（論語解義一一〇頁）と仰せられた詞と併せ考へて、孔夫子が如何に言行一致を重んぜられたかを悟り知るべきである。

また大學に

「是故君子有ニ諸己、而后求ニ諸人、無ニ諸己、而后非ニ諸人云云」（大學解義一一四頁）とあるは、此の章の孔子の言を反説したもののやうである。

右第十三章

【章旨】 朱子曰く「道ハ人ニ遠カラズトハ、夫婦ノ能クスル所ナリ。丘未ダ一ヲモ能クセズトハ、聖人ノ能クセザル所ナリ。皆費ナリ。而シテ其ノ然ル所以ノ者ハ、則チ至隱存ス。下章ハ此ニ放ヘ」と。

君子素其位而行、不願乎其外。素富貴、行乎富貴、素貧賤、行乎貧賤、素夷狄、行乎夷狄、素患難、行乎患難。君子無入而不自得焉。

【譯讀】君子は其の位に素して行ひ、其の外を願はず。富貴に素しては富貴に行ひ、貧賤に素しては貧賤に行ひ、夷狄に素しては夷狄に行ひ、患難に素しては患難に行ふ。君子は入るとして自得せざること無し。

【節旨】君子は現在居る所の地位に随つて當に其の道を盡すべきことを言ふ。

【字義】○素其位。素は現在の義。其の現在居る所の地位に因つて中庸の道を行ふの意。素は「モトヨリ」とも訓む。己が現在の地位を素より然るものとして其れに安んずるをいふ。朱注に「君子ハ但現在居ル所ノ位ニ因リテ而シテ其ノ當ニ爲スベキ所ヲ爲シテ、其ノ外ヲ慕フノ心無キナリ」と。游定夫は「素其位而行者、即其位、而道行其中、若素然也」と曰ひ、楊龜山は「君子居其位、若固有之、無出位之思、素其位也」と曰へるので明かである。○外 己の地位以外の事をいふ。翼註に「身ノ居ル所ヲ位ト爲シ、是ニ反スルヲ外ト爲ス」と。○夷狄 「エビス」野蠻未開の國、古、支那では自分の國を中華・中國と稱し、最も文明の善國と信じ、四方の國をば東夷・南蠻・北狄・西戎と稱してゐた。○入 入りて居る所としての意。○自得 少しの不平不満もなく自ら意に適ひて心に安んずること。

【直解】 さて前に「君子胡不慥慥爾」とある語を承けて、子思が言ふに（凡ソ章首ニ子曰ノ字

ノ無イ者ハ皆子思ノ言デアル）それであるが故に 君子は自分の現在居る所の地位境遇を自分の本來の持ち前のものと心得て、其の地位境遇に對して十分に己の本分を盡すことを行ひ、其れ以外には立身出世が仕たいとか、金持になりたいとかいふやうなことを願ふ心がない。以上は總説で以下は其れを細かに別けて説明する。それで若し自分が現在順境に在つて家が富み位が貴くあれば、敢て驕りたかぶることなく、放縱に流れることもなく、其の富貴の境遇に處すべき道を十分に行ひ、富者らしく貴人らしき人格を保つて、孝悌忠信の道を盡すやうにする。若し又逆境に在つて家が貧しく位が賤しい場合には、敢て他人に阿り諂ふやうな卑屈な舉動を爲さず、決して自暴自棄に陥つて窮すれば濫するやうなことがなく、其の貧賤に安んじて、孝悌忠信の道を盡すやうにする。又明の王陽明が貴州の龍場驛に貶謫せられたやうに、不幸にして夷狄即ち野蠻未開の地に遣られて行くやうなことがあつたならば、所謂郷に入つては郷に従ふで、其の風俗に隨はねばならないこともあらうが、自分はどこまでも正しい誠の道を守つて改めないやうにし、忠恕の道を以て導いたならば、夷狄の人でも天命の性があるから、自然に己の徳に感化せられるやうになるであらう。又人はどんな憂目に遇ふことがあるか分らないものであるが、たとへ如何なる患難に出遇つても恐れず憂へ

ず、己が節を守つて變ずることのないやうにすべきである。かやうにそれぞれの位地境遇に順應して、己の本分を守り、誠の道を盡すから、君子は如何なる境遇に入つても、天命に安んじて少しも不平不満の念を起すことがなく、悠悠自適することが出来るのである。

【考異】 素 鄭玄は「素皆讀ンデ僚ト爲ス」と注し嚮(ムカフ)の義と解す。即ち自分の今居る所の地位に立ち向うて適當の行爲をする義とする。物徂徠や、安井息軒なども、それを至當としてゐる。しかし朱注の方が穩かなやうに思はれる。

【餘義】 君子素其位而行、不願乎其外の兩句は一章の綱領で、論語、憲問篇に「子曰、不在其位、不謀其政」曾子曰、君子思不出其位(論語解義五〇一頁)とあるのと同じく君子が己の本務に忠實であつて、少しも餘念のないことを知るべきである。而して此の曾子の言を味へば、子思が曾子の傳を受け得たことが分る。

素患難行乎患難は孔子が匡(地名)で圍まれ苦められた時に「天之未喪斯文也、匡人其如予何(論語解義二八〇頁)」と曰つて泰然自若として少しも其の心を動かしたまはなかつたやうなのが、是れである。蓋し君子は往くとして自得せざることなく、唯己の當に爲すべき所を爲すのみである。

在上位不陵下。在下位不援上。正己而不求於人。則無怨。上不怨天。下不尤人。故君子居易以俟命。小人行險以徼幸。子曰、射有似乎君子。失諸正鵠。反求諸其身。

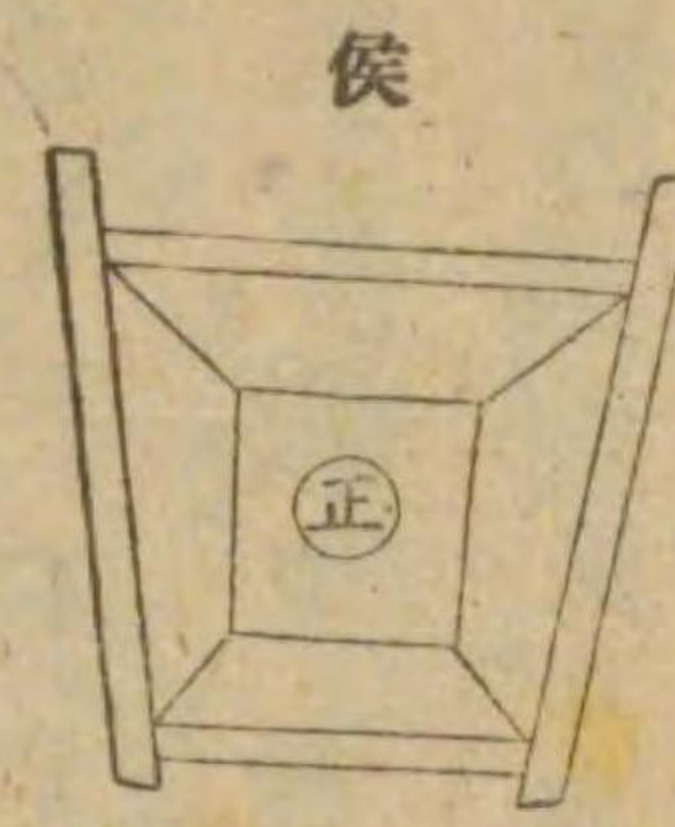
【譯讀】 上位に在りては下を陵がず。下位に在りては上を援かず。己を正しうして人に求めざれば、則ち怨なし。上天を怨みず、下人を尤めず。故に君子は易に居て以て命を俟ち、小人は險を行ひて以て幸を徼む。一子曰く、射は君子に似たるあり。諸を正鵠に失ふときは、諸を其の身に反求すと。

【節旨】 分けて三節とする。君子の學は、己を正しくして常に自ら反求し、己の分に安んじて其の外を願はざることと言ふ。

【字義】 ○上位 君・父・長上をいふ。○陵 凌と通じ「シノグ」と訓む。下位に在る者をして己の意に順はせようとして威張つて之を陵ぎ侵すこと。○下位 臣・子・卑幼の者をいふ。○援 「ヒク」と訓む。上位の者に攀援(ヨリスガル)して其の引き立てを求めること。○怨 求めて得られなかつた時に人を怨む心をいふ。陳北溪曰く「吾、上位ニ居レバ、則チ下ヲ陵忽セ

ズ。吾、下位ニ居レバ、則チ上ヲ攀援セズ。惟反リテ自ラ己ヲ責メテ、初メヨリ人ニ求メ取ルノ心ナケレバ、自然ニ怨ナシ」と。○居レ易俟レ命 居は安んじ處る義。易は平地の意で、人の當に爲すべき平易の道即ち中庸の道に喩へていふ。命は天命でここは福を謂ふ。俟は其の來るに任せて心に懸けないこと。易に居るは前の位に素して行ふこと、命を俟つは前の外を願はないこと。○行レ險微レ幸 險は危険な道、人の當に爲すべからざる無理な事に喩へていふ。即ち中庸の反對、幸は僥倖(コホレザイハヒ)得べからざるものを得るをいふ。微は「モトム」と訓む。必ず得んことを求めるをいふ。險を行ふは位に素するの反對で、幸を微むるは外を願はない反對である。行の字を履軒は歩行の行と讀んで行レ險と訓し、居レ易の反對とす。亦通ず。

○子曰 子思が孔子の言を引いて、以て上文の意を結ぶ。○正鵠 二字共に射的(マト)をいふ。鄭玄は「畫布曰正、棲皮曰鵠」と註し、朱子は更に「皆侯之中、射的也」と註してゐる。侯は布を張つて之を射るもので、正は鵠侯中の的で賓射(諸侯ノ朝會ニ行フ射儀)の時に用ひ、大射(天子ガ特ニ郊廟ノ祭ヲ行ハントスル時ニ、射ヲ以テ賢者ノ祭ニ與ルベキモノヲ擇ブ射儀)の時は、皮侯即ち熊・虎・豹等の皮を張つて中央に鵠を畫いて的とする。正は鵠



と同じく飛ぶことの疾い小鳥で鷹の類。鵠は雁の類。鄭玄の説に據れば、正は正、鵠は楛に通じ、楛は直である。人が正直であれば乃ち能く中るとある。射は以て徳を觀るものであるから、正直の徳に因んで正・鵠を畫いて的としたのであらう。

【直解】 前に「君子素ニ其位ニ而行、不レ願ニ乎其外」とあるやうに、君子は現在の地位に安んじて道を行ひ、強ひて富貴などを願はぬのが其の本領ではあるが、人は一旦富貴にして上位に在るやうになると、自然に驕り高ぶる氣が生じて、我儘勝手な事をして知らず識らずに下の者を陵ぎ侵すやうな不心得な舉動をするものであるが、そこを戒め慎んで、決して下の者を陵ぎ侵すやうなことがなく、又人は貧賤にして下の位に在る時は、此の位の月給では今日の生活にも差支があり、また位階は今少しく昇せてもらひたいものなどといふ、鄙劣い慾心を起し、自分の才徳を顧みないで卑屈にも權勢のある上位の人に阿り諂ひ、其れに縁りすがつて立身出世を求めようと願ふ者も少くはないが、そこを戒め慎んで決して上位の人によりすがつて、其の引き立を求めらるやうなことを爲さず、つとめて己の言行が一致するやうに致して、我が身の行を正しくして他人に求めすがることが無いなれば、自然に人を怨む心も起らない。かくして道を楽しんで天命に安んじてゐるから、自分はこれ程までに勉強してゐても、

終年困窮を免れないのは、天道は是か非かなどと曰つて、上は天を怨むるやうな心なく、下は己を取り立ててくれない人を、尤める心もなく、君子の胸中は常に光風霽月の如く灑灑落落と「サツバリ」して居る。

君子は此の如く己の現在の地位に安んじ、己の身を正しくするより外に餘念がないから、常に平易な中庸の道に居つて其の位に相應した行を爲し、以て吉凶禍福の天命の至るのを待つて決して其の外を願はない。小人は之に反し種種様様な策略を弄して、其の爲すまじき危険な行を爲して、如何にもして萬一の僥倖を得ようと冀ふ。

孔子の仰せに、弓を射る人の心は君子の心に似てゐる所がある。何故となれば、矢を放つて的を射損じた時は、己の姿勢が悪かつたか、引きが足らなかつたか、放れが悪かつたかと、射損じた理由を自分の身に立反りて考へ求め、決して勝つた人を羨み妬むやうな卑怯な心を起さぬ。そこが君子の己を正しくして人に求めぬ態度に似て居るからである。君子たる者は如何にもかくの如く、其の位に素して行ひ、外を願はぬものでなければならぬ。

【餘義】 伊藤仁齋の中庸發揮に「此章即論語所謂、不怨天、不尤人、下學而上達、知我者其天乎意。蓋中庸之極致也」と曰つてゐるが、眞に然りといふべきだ。

射 古は禮・樂・射・御・書・數と曰つて、射は六藝の一つで、君子の人格を養成するに缺く可からざる教科目であつた、それで「射有似乎君子」と曰はれたのだ。孟子に「仁者如射。射者正己而發。發而不中、不怨勝己者、反求諸己而已矣」(孟子通解二二〇頁)禮記の射義篇に、「射者仁之道也。求正諸己、正而后發。發而不中、則不怨勝己者、反求諸己而已矣」とあるは、正に此の節と同義である。また論語、八佾篇に「子曰、君子無所爭。必也射乎。揖讓而升下、而飲。其爭也君子」(論語解義七一頁)とあるに據れば、古代に在つて如何に射禮を尊重したかが分るであらう。胡炳文曰く「君子有似乎射」と曰ハズシテ、射有似乎君子ト曰フハ、君子ハ勝ツコトヲ求ムルノ心ナシ。射ハ以テ之ニ似スルニ足ラズ。似スベキ所ノ者ハ、射テ中ラザレバ、己ニ勝ツモノヲ怨ミズ。君子ノ得ザル所アレバ天ヲ怨ミズ、人ヲ尤メザルガ如クナレバナリ」と。

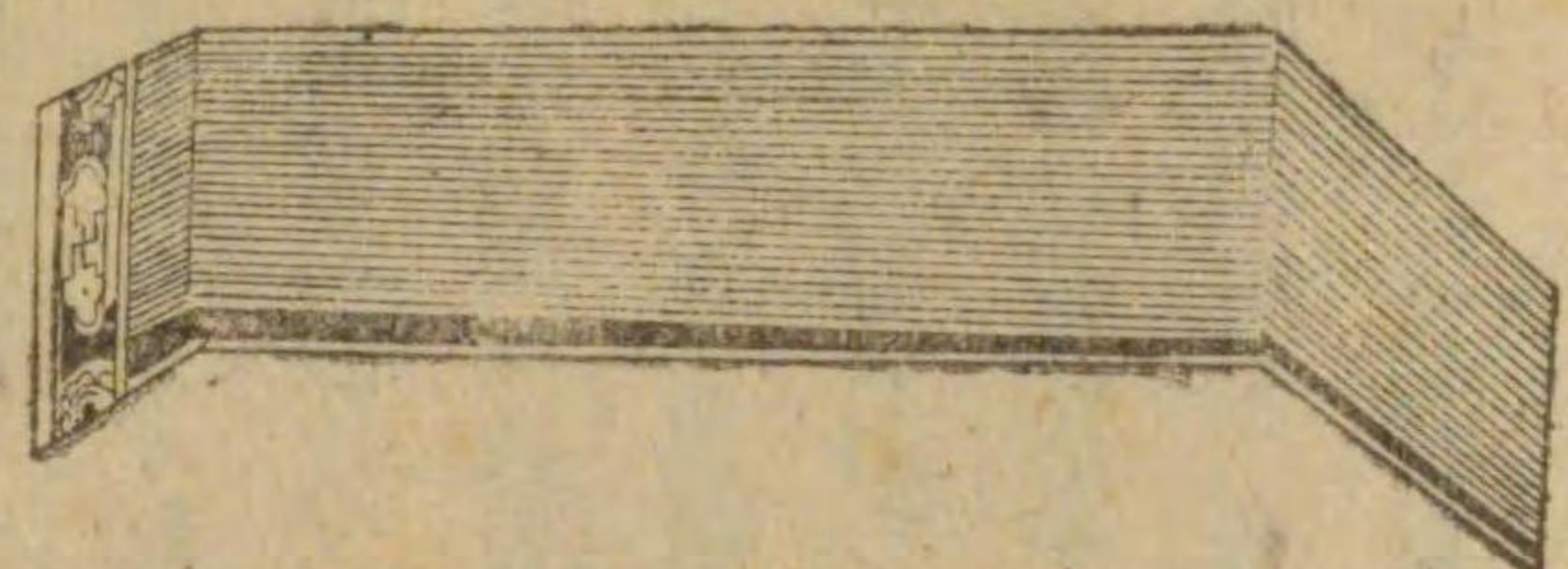
右第十四章

【章旨】 君子は其の位に素して行ひ、其の外を願はざることを言ふ。朱子曰く「子思ノ言ナリ。凡ソ章ノ首ニ子曰ノ字ナキモノハ此ニ放ヘ(即ち皆子思の言である)」と。

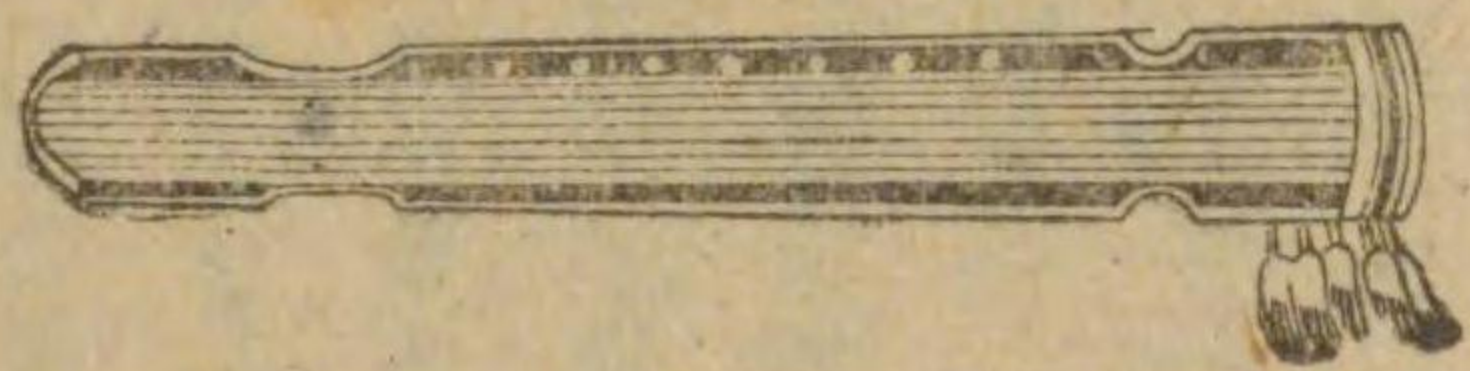
君子之道、辟如行、遠必自、邇、辟如登、高必自、卑。詩曰、妻子好合、如鼓瑟琴。兄弟既翕、和樂且耽。宜爾室家、樂爾妻帑。子曰、父母其順矣乎。

【譯讀】君子の道は、辟へば遠きに行くには必ず邇き自りするが如く、辟へば高きに登るには必ず卑き自りするが如し。詩に曰く、妻子好合し、瑟琴を鼓するが如し。兄弟既に翕ひ、和樂して且つ耽む。爾の室家に宜しく、爾の妻帑を樂ましむと。一子曰く、父母は其れ順なるかと。

【字義】○辟 音「ヒ」「タトヘバ」と訓む。譬と同じ。○邇 「チカシ」と訓む、一に爾に作る。近と同じ。この譬喩は書經、太甲下篇に「若升、高必自下、若陟、邇必自邇」とあるのと語意が似てゐる。○詩 詩經、小雅棠棣の篇。○好合 好は親しきこと、兩方の心がよく和合する意。○鼓 彈奏すること。○瑟琴 二つの樂器。和名は「コト」瑟は古は五十絃であつたが、後世は二十五絃となつた。琴は古は五絃であつたが、後世は七絃となつた。琴は瑟よりも短く、三尺六寸である。琴と瑟とは調子を和せて彈奏するを常とするから、瑟琴を鼓す



瑟



琴

辭。(六八頁參看)

【直解】君子の道は即ち中庸の道で、之を行ふには自ら其の順序がある。之を道を行くのに譬へて言へば、千里もある遠方の地に行くには必ず近い所の足下から一步一步に進んで行くやうなものである。又之を山に登るに譬へて言へば、萬仞もある高山に登るには必ず麓の卑

とは和合するの意に喩へていふ。○翕 合ふなり。○耽 「タノシム」と訓む。今の詩に湛に作る、同じ。甚だしく樂む義、樂と同じであるが、永く樂む意があるから轉じて「フケル」とも訓む。○室家 妻子のこと。ここでは家庭の意とする。男子は三十にして室(妻)あり、女子は二十にして家(夫)あること 禮記の曲禮に見ゆ。○妻帑 妻子に同じ。帑は孥に通じて子を謂ふ。この妻の字は帶説で殆ど意味はない。○順 自然に従つて安んじ樂むこと、ここは父母としての境遇に順ひ、安んじ樂んで居る意。胡期僊曰く「順ハ是レ安樂、心ノ上ニ就イテ説ク」と。○矣乎 贊歎の

胡炳文曰く「章句ニ安ニ樂之ノ三字ヲ以テ順ノ字ヲ釋スルハ味アリ。蓋シ上文ニ皆兄弟妻子相安ズルノ意ヲ言フ。人ノ子、父母ノ心ヲ以テ心ト爲サバ、必ズ一家ヲシテ安ンゼシメ、而ル後ニ父母ノ心之ヲ安ンズ。必ズ一家ヲシテ樂マシメ、而ル後ニ父母ノ心之ヲ樂ムノミ。嗚呼人ノ子タル者ニシテ、父母ノ心ヲシテ或ハ之ヲ安ンゼズ之ヲ樂マザル者アラシメバ、亦將タ何ヲ以テ人ノ子ト爲サンヤ」と。

右第十五章

【章旨】 上章を承けて道は在らざる所なく、而して道に進むには則ち順序次第あることを言ふ。

伊藤仁齋曰く「此ノ章言フコロハ聖人ノ道ハ、人倫日用ノ間ニ過ギズ。而シテ仁、天下ヲ覆フノ盛モ、亦是レヨリシテ馴致ス。故ニ卑近ニ安ンズルトキハ、則チ高遠ヲ期セズシテ高遠ハ自ラ其ノ中ニ在リ。若シ夫レ卑近ヲ厭ヒテ而シテ高遠ヲ求ムル者ハ、實ニ道ヲ知ル者ニ非ザルナリ。即チ「下學シテ上達スル」(論語解義五〇九頁)ノ意ナリ(中略)孟子ノ所謂「堯舜之道、孝弟而已矣」(孟子通解八〇三頁)モ亦此ノ章ノ意ナリ、至レリ矣」と。

仁齋又「按ズルニ中庸ノ義ヲ説ク者ハ此ニ止マル。蓋シ中庸ノ本書ナリ。以下ハ或ハ是レ他書ノ脱簡ナラン。今考フ可カラズ」と曰つて、これまでを上篇とし次章以下を下篇としたのは、一家の言で臆度の説たることを免れないが、姑く録して参考の資とする。

子曰、鬼神之爲德、其盛矣乎。視之而弗見、聽之而弗聞、體物而不可遺、使天下之人、齊明盛服、以承祭祀。洋洋乎、如在其上、如在其左右。詩曰、神之格思、不可度思。矧可射思。夫微之顯、誠之不可揜、如此夫。

【譯讀】 子曰く、鬼神の徳たる、其れ盛んなるかな。之を視れども而も見えず、之を聽けども而も聞えず、物に體すれども而も遺す可からず。天下の人をして、齊明盛服して、以て祭祀に承り、洋洋乎として其の上に在るが如く、其の左右に在るが如くならしむ。詩に曰く、神の格る、度る可からず。矧や射ふ可けんやと。夫れ微の顯なる、誠の揜ふ可からざること、此くの如き夫。

【字義】 ○鬼神 分けて之をいへば鬼は人の靈魂で、神は天神（アマツカミ）地祇（クニツカミ）をいふ。合はせて言へば、凡て之を鬼神といふ。即ち鬼神とは泛く吾人の祭る所の「カミ」をいふ。古今集の假名の序に歌の徳を頌へて「目ニ見エヌヲニガミヲモアハレト思ハセ」とある、ヲニガミは即ち此の鬼神である。宋儒は鬼神を哲學的に解して程伊川は「鬼神ハ天地ノ功用ニシテ而シテ造化ノ迹ナリ」といひ、張橫渠は「鬼神ハ二氣ノ良能（先天的能力）ナリ」と解し、朱熹は「二氣ヲ以テ言ヘバ、則チ鬼ハ陰ノ靈ナリ。神ハ陽ノ靈ナリ。一氣ヲ以テ言ヘバ、則チ至リテ伸ブル者ヲ神ト爲シ、反リテ歸ル者ヲ鬼ト爲ス。其ノ實ハ一物ノミ」と注してゐる。約言すれば鬼神は理なりといふに外ならない。しかし中井履軒の説のやうに、古は陰陽の語なく、陰陽の運用も亦之を鬼神と謂ふべきであるから宋儒の解釋には従ふことは出来ない。すでに前にも述べたやうに中庸の天は宗教的の神であるから、この鬼神も亦宗教的に解釋するのが當然である。即ち鬼神は人間以上のすぐれた能力があつて、意思感情などを具へ、冥冥の裏に在つて、自由に人間に吉凶禍福を降すものであると解すべきである。○不體物 萬物は皆天より生る。即ち萬物は皆神の力によつて其の形體を得たものである。○不可遺 萬物の生成は皆鬼神の力で一として其の例に漏れて取りのこされたものがないと

の意。○齊明盛服 齊は齋戒の齋に通じて用ひた「モノイミ」して雜念を去り心を正し「ヒトシウスル」こと。明は潔の意、心身を清淨にして一點の汚の無いやうにする。盛服は、禮服を著けること。○洋洋乎 流動充滿の意で、到る處に充ち満ちて在る意。○詩 詩經、大雅抑の篇。○格 「イタル」と訓む、來なり。以下の三の思の字は助辭。○矧 況と同じ。○射 厭と同じ「イトフ」と訓む。厭意して敬はざるなり。今の詩經には敦に作る。○微 「カスカ」で見えず聞えざるをいふ。○顯 物に體して遺すべからざるをいふ。○誠 天道、鬼神の徳をいふ。朱注に「眞實無妄之謂」とある。○揜 蔽ひかくす意。

【直解】 孔子の仰せに、鬼神の徳といふものは實に盛大なものである。さて其の盛大な所以を言へば、鬼神は形を具へてゐないから之を視ようとしても見ることが出來ず。また聲がないから之を聽かうとしても聞くことが出來ない。しかし此の鬼神の力の盛大なものであることは、此の宇宙間の萬物は、すべて鬼神の御蔭で其の形體を得て生れ出したもので、一物として取り残されたものはない。即ち鬼神の力がなくしては萬物は決して生成することが出來ないのである。吾人はそれを思ふと實に鬼神の力の極めて偉大なことを贊歎せざるを得ないのである。これ實に天下の人をして精進潔齋して心身を清潔にし禮服を著け畏み敬ひて以て祭祀

を奉行せしめ、其の灼然な威靈は、そこらあたりに洋洋として流れ動き充ち満ちて、人人の上^にに在すが如く、或は左右に在すが如き崇高森嚴な感を抱かしめる所以であらう。それで詩經の大雅抑の篇にも曰つてある、鬼神は形がないから、之を視れども而も見えず、聲がないから、之を聴けども聞えない、それであるから鬼神の來り臨まれるのはいつ何時であるか、吾等はとても測り知ることが出来ないから、大に畏みて承へまつらねばならん。まして如何して心が怠り厭ひて敬意を失ふやうなことが出来ようぞと。さて此の詩に據つて見ても鬼神は見ることも聞くことも出来ない隱微なものであるが、宇宙間の萬物が皆鬼神の力によつて出來て居る所からいへば、實に顯なものといはねばならぬ。また誠は鬼神の德であるからして、吾人が誠敬を以て之に事へたなれば、其の感應の速かなことは、直ちに其の場に來降して、其の上に在すが如く、其の左右に在すが如くに感得せられる。是れ即ち心の誠の蔽ひ隠すことの出来ないことは、實に此の如きものであるかな。

【餘義】 此の章は上は父母の順を承け、下は舜の大孝を起す。中庸は誠を説くを主とし、誠を立つるは慎、獨を主とす。故に首章に「莫顯乎微、故君子慎其獨也」とあり、末章に知微之顯、可與入德矣」とあり、此の章に「微之顯、誠之不可揜如此夫」とある、微顯の

二字は實に中庸の全篇を貫穿してゐる。

而るに伊藤仁齋が此の章以下篇末に至るまでは中庸の原文にあらずとし、別つて下篇と爲し、且つ曰く「此ノ章暨下文ニ禎祥妖孽ヲ説ク處ハ疑フ可シト爲ス。論語ニ曰ク「子不レ語ニ怪力亂神」(論語解義二二四頁)又曰ク「未レ能レ事レ人、焉能事レ鬼」(論語解義三五六頁)ト。夫レ鬼神ノ事ハ、詩書ニ載セシ所ヨリ以來、古ノ聖賢皆畏敬奉承スルノ暇アラザル、豈敢テ間然スル所アラシヤ。獨リ吾ガ夫子ニ至リテ、其ノ之ヲ言フコト此ノ若キ者ハ、蓋シ鬼神ニ溺ルレバ、則チ必ズ人道ヲ忽ニシテ、而シテ其ノ説、人ヲ惑シ易キヲ以テノ故ナリ。此ヲ以テ之ヲ觀レバ、此ノ章恐クハ夫子ノ語ニ非ズ。而シテ此ノ節ハ上ニ承クル所ナク下ニ起ス所ナシ、則チ亦他書ノ脱簡ナルコトヲ疑ハズ」と曰つてゐるのは、武斷も亦甚だしいといふべきである。龜井昭陽が「微之顯、以取首章之文、誠以爲四章言誠張本、其文義備」と曰ひ、孔穎達が「此一節ハ、鬼神ノ道、無形ニシテ能ク顯著誠信、中庸ノ道ハ鬼神ノ道ト相似テ、亦微ヨリ著ニ至リ、言ハズシテ自ラ誠ナルヲ明カニスルナリ」と曰つたのは、よく此の章の意義を明かにしたものである。

視レ之而弗見、聽レ之而弗聞、體レ物而不可レ遺 此の三句の而は、上と下との反對の意を

接続してゐるので「シカモ」又は「シカルニ」と訓む。而るに末の體物而不可遺を朱注のやうに解くと順接になつて「シカシテ」と訓む方が穩かなやうである。しかし此の三句は並列の句であるから、三の而の字は皆「シカモ」と訓むべきである。そこで安井息軒は「物ハ事ナリ、言フココロハ之ヲ視レドモ而モ見エズ、之ヲ聽ケドモ而モ聞エズ、有ルコトナキガ如キナリ。然レドモ凡ソ事ハ皆鬼神ヲ以テ體幹ト爲ス。而モ遺棄スベカラズ」と曰つて、鬼神の徳は盛大で、形もなく、聲もないが、萬物の根幹となるものであるから、見えず聞えないからといつて、之を棄ててはならぬと解いてゐる。

また藤澤南岳（名ハ恆、大阪ノ人）は其の中庸講義に物徂徠の「體物如體仁之體。物者、禮之物也。假如祭如在（論語解義七七頁）祭者禮、而如在者其物也」との解を敷衍して、「物ニ體シテハ、御祭ヲスル御神體、我方國ノ風デ云フト、御幣トカ鏡トカヲ神體トスル。御親筆ヤ石ナドヲ神體トスルコトモアル。物ニ體シテ形ヲ備ヘテ、前ニ筵ヲ敷キ、色色ノ御供ヲナシ、オ飾リ付ケテスルト、神ノ住居スルヤウニ見エル。コレガ物ニ體スルデ、物ニ體スルコトハ出來ルケレドモ、遺スベカラズ。イヨイヨ神鬼ノ鬼ノオ住居ナサレタト證據ヲ遺シテ留メ置ク譯ニハイカン。コレハ筵、コレハ三方、コレハ鏡、コレハ御幣ト取り除ケテ仕舞

フト、何モ跡ニハ無イ。物ニ體スルコトハ出來ルガ、遺スコトハ出來ン。聲モ形モ無イモノデアルカラ、コレガ神ノ跡トツカマヘルコトハ出來ナイ」と解いてゐるが、一説として存すべきである。

右第十六章

【章旨】 鬼神の徳の盛んなる所以を述べて、以て道を明かにし、人の道を體する者は、誠を存するを以て要務と爲すべきことを言ふ。朱子曰く「見エズ聞エズハ隱ナリ。物ニ體スト在スガ如クナルハ則チ亦費ナリ。此ノ前ノ三章ハ其ノ費ノ小ナル者ヲ以テ言ヒ、此ノ後ノ三章ハ其ノ費ノ大ナル者ヲ以テ言フ。此ノ一章ハ費隱ヲ兼ネ小大ヲ包ネテ言フ」と。佐藤一齋曰く「此ノ章ハ高遠ヲ説ク、前章ノ卑近ト對ス」と。

子曰、舜其大孝也與。德爲聖人、尊爲天子、富有四海之內、宗廟饗之、子孫保之。

【譯讀】 子曰く、舜は其れ大孝なる與。徳は聖人たり、尊は天子たり、富有四海の内

を有ち、宗廟之を饗け、子孫之を保つ。

【節旨】 孔子の言を引いて、人の子が親に事へるには、皆當に孝を盡すべきである。然るに古來唯舜のみ大孝と稱せられる所以は、舜が能く中庸の徳を十分に完うし盡したの由ることを述ぶ。

【字義】 ○四海之内 海内または天下といふに同じ。詩經、小雅北山篇に「普天之下、莫非王土、率土之濱、莫非王臣」とある。故に「四海之内」と云ふ。○宗廟 先祖を祀る廟即ち靈屋（オタマヤ、釋名に「宗ハ尊ナリ、廟ハ貌ナリ。先祖ノ形貌ノ在ル所ナリ」と。○饗之 宗廟が舜の祀る所を享けるをいふ。即ち天子の祭を享けることを謂ふ。孟子に「使之主祭、而百神享之」（孟子通解六一九頁）とあるに同じである。○子孫 舜の子孫が、舜の大徳の餘慶によつて世に顯はれたものには、夏后氏の時、虞思といふ者あり、其の女を以て夏后少康に妻せ、虞に封ぜられて尊信せらる（左傳、哀公六年參看）又周の武王、殷に克ちて舜の後を求めて嬌滿を得て之を陳に封じ、舜の祀を奉ぜしめ、卒して胡公と諡した（左傳、襄公二十五年參看）○保之 子孫が其の祭祀を絶すことなく爵邑を保ち有すること。

【直解】 孔子が舜の徳を讚美して仰せられるには、舜はそれ孝行の大な者と云ふべきであらう

か。何故とならば、其の徳からいへば、聖人である。乃ち名を揚げて其の親を顯はす所以のものは此の上もないことである。又其の位の尊いことからいへば、天子である。乃ち天子の父母として天下の人人をして其の親を尊敬せしめることは此の上もないことである。又其の富からいへば、四海の内を有つて、天下の物は悉く我が所有であるから親を奉養するには此の上もなく手厚くすることが出来る。而して舜の孝は現存の親に對するばかりでなく、天子として上は先祖代代の靈屋を嚴かに祀るが故に、祖先の靈も定めて喜んで其の祭を饗けるであらうから、其の親の爲めに本に報い祖先の名をも顯すことは此の上もないことである。また下は其の子孫までも舜の大徳の餘慶を受けて、夏の虞思、周の陳胡公などのやうに、諸侯に封ぜられ、祿位を保ちて、永く其の祭祀を絶つことがないからである。實に舜の徳と福との兼ねて隆んことが此の如くであるのは、誠に常人の及ぶことの出来ないものがある。此れ其の大孝たる所以であらうか。安井息軒が「舜ノ此ニ至ル所以ノ者ハ皆親ニ事フルニ原ク。故ニ専ラ孝ヲ以テ之ヲ稱ス」と曰つたのは適切な説である。

【餘義】 眞西山曰く「舜以ニ聖徳ニ居ニ尊位ニ其福祿、上及ニ宗廟、下延ニ子孫。所以爲ニ大孝ニ舜所レ知孝而已。祿位名壽、天實命之、非ニ舜有ニ心得レ之也」と。即ち舜は専ら孝道を行ふ

ことを心として、餘念がなかつたので、其の祿位の如きは自然の結果として至つたまでのこととて、決してはじめから祿位を得たいが爲めに、孝道を盡したのでないことを説いたのであるが、實に其の通りである。

四書反身録に曰く「孝ハ百行ノ首タリ、身ヲ脩メ徳ヲ立ツルハ孝ヲ盡スノ首タリ。舜ノ大孝ハ徳、聖人タルニ在リ。故ニ人ノ子、其ノ親ニ孝センコトヲ思ハバ、其ノ徳ヲ砥礪セザルベカラズ。徳、聖人タレバ則チ親ハ聖人ノ親タリ。徳、賢人タレバ則チ親ハ賢人ノ親タリ。若シ祿祿トシテ虚シク度リ、徳業聞ユル無ク、身庸人タレバ、則チ親ハ庸人ノ親タリ。甚ダシキハ廉寡ク恥鮮クシテ、小人匹夫ノ身ト爲レバ、則チ親ハ小人匹夫ノ親タリ。體ヲ虧キ親ヲ辱ムルコト、大ナルコト莫カラシヤ。縦ヒ日ニ五鼎ノ養ヲ奉ズトモ、亦總テ是レ大不孝ナリ」と。説き得て最も深切である。

故大徳必得其位、必得其祿、必得其名、必得其壽。故天之生物、必因其材而篤焉。故栽者培之、傾者覆之。詩曰、嘉樂君子、憲憲令徳、宜民宜人、受祿于天。保佑命之、自天申之。故大徳者必受命。

者必受命。

【譯讀】 故に大徳は必ず其の位を得、必ず其の祿を得、必ず其の名を得、必ず其の壽を得。一故に天の物を生ずるや、必ず其の材に因りて篤くす。故に栽るたる者は之を培ひ、傾ける者は之を覆す。一詩に曰く、嘉樂の君子、憲憲たる令徳民に宜しく人に宜しく、祿を天に受く。保佑して之に命じ、天より之を申ぬと。一故に大徳ある者は必ず命を受く。

【節旨】 聖人の大徳があつて、而して後に能く大福を備へ有することが出来ることを言ふ。仁齋曰く「此レ舜ノ事ヲ擧ゲテ、以テ大徳ハ必ズ命ヲ受クルノ驗ヲ證ス」と。

【字義】 ○其位 天子の位をいふ。○其祿 四海の富をいふ。○其名 令聞（ヨキホマレ）をいふ。即ち聖徳の譽をいふ。○其壽 舜は百十歳の壽を保つた。書經、舜典に「舜生三十、徵庸、三十在位、五十載、陟方乃死」とある。○材 物の「モチマヘ」の本質をいふ。○篤 厚なり、厚く深切にする。蔡虛齋曰く「篤ノ字ハ全好ノ字ニ非ズ。栽者培レ之ハ固ヨリ篤クスルナリ。傾者覆レ之モ亦篤クスルナリ。皆其ノ本質ノ異ルニ因リテ其ノ加フル所ヲ異ニスルナリ」。

リ。篤ハ厚ナリ、厚ハ加ナリ、人多クハ厚ノ加タルコトヲ悟ラズ」と。○栽 植うるなり、根を固く植ゑ付ける。○培 培養する、之を「ツチカヒ」養ひて繁茂せしめる。草木を以て人事に喩へたので、天命を畏れ慎む者は、天が必ず福祿を以て之に與へることをいふ。○覆 摧き敗る。朱注に「氣(元氣をいふ)至リテ滋息スルヲ培ト爲シ、氣反リテ遊散スレバ則チ覆ル」と。○詩 詩經、大雅假樂の篇。假は「嘉樂君子」の語によつて嘉に作るを是とす。○嘉 樂 嘉は善、樂は「タノシム」即ち其の徳の「ヨミス」べく樂むべき君子をいふ。ここの君子は位ある者をいふ。嘉樂君子から自天申レ之までの六句は詩經の語で、即ち令徳ある君子は民にも人にも受けが善くして天の福祿を得るをいふ。○憲 明かなる貌。今の詩經に顯顯に作つてあるのは同音假借字である。顯は著明(イチツルシクアキラカ)の義、故に興り盛なる貌とも訓す。○令徳 美しくしき徳。○民・人 民は庶民をいひ、人は官に居る人をいふ。○保 佑 保は安、佑は助なり。保護して輔翼(タスケル)する。○申 重ねる。長く福祿を無窮に受けしむるをいふ。○受命 天命を受けて天子となること。物徂徠曰く「道ノ大原ハ天ヨリ出ヅ。故ニ大徳ノ人ハ、必ず天命ヲ受ク」と。

【直解】 さて徳と福祿とは相伴ふべき者であるから、大徳ある者は必ず其の徳に應じた善き位

を得、必ず其の徳に應じた多くの福祿を得、必ず其の徳に應じた善き名譽を得、必ず長壽を得るものである。即ち舜の如きは聖人の大徳があつたから、位は天子となり、福祿即ち富は四海を有ち、大孝といふ令名は永く後世に及び、百十歳といふ長壽を得られたのである。それ故に天の物を生ずるには、必ず其の物の「モチマヘ」の本質によつて、それぞれ其の本來の性質を發揮せしめるやうにと、手厚く力を添へてくれるものである。それであるから、草木にしても根本が固く「シツカリ」と栽ゑ付けられた者は次第に生長繁茂するに足りるからして日光雨露の恵を施し、十分に之を培養して生長繁茂するやうにし、若し根本が「グラグラ」して今にも傾き倒れさうであれば、到底生長することの出来ない者であるから、之を顛覆するやうにする。天は元より公平無私なものであるから、之を培養するものも之を顛覆するものも、物それ自身が自ら取る所の運命である。それで舜が位・祿・名・壽を得たのも、舜の大孝によつて得たのであることが益、明かな譯である。詩經の大雅假樂の篇にも、君子の美しい徳を讚美して曰く、嘉すべく樂むべき君子は明かに盛な美徳があるので、天下の萬民に對しても宜しく、在朝の士大夫に對しても宜しくして、仁政を施かれたので天の眷顧を受けて祿位を天から受け、天は之を保護し、佑助し、命じて天子と爲し、又重ね重ね之を保護佑助して福祿を無窮

に受けしめるやうにして止まない。それ故に大徳ある者は必ず天命を受けて天子となることは、争ふことの出来ない事實である。

【餘義】 本章から第十九章に至るまでは皆孝を論じたのである。ここに孝といふのは但父母の意に順ひ、其の奉養を厚くするの謂でなく、父祖の業を継述することを以て孝の大なるものと爲すのである。抑も人の生命には限があるが、此の限ある生命を永遠に持続したいと願ふのは普通の人情である。それであるから、佛者は死後の苦樂を説いて安心立命の地を與へようとするのである。中庸はそれと異つて、子たる者、父祖の業を継述すれば、其の滅んだのは唯肉體のみで、其の事蹟は永く世に遺つて、限なき生命を保つと同じ結果を生じ、些の憾も無いであらうと、安心立命の地を子孫の大孝の上に置いたのである。

四書反身録に曰く「問フ大徳ノ人ハ、必ズ祿位名壽ヲ得ルナラバ、孔ハ徳ナカラシヤ、何爲レゾ窮塗ニ老セシゾ。顔ハ徳ナカラシヤ、夫レ何ゾ三十二ニシテ亡セシゾト。曰ク、孔ハ窮塗ニ老セシト雖モ、然レドモ一時ニ窮セシノミ、實ハ萬世ニ窮セズ、天ノ祐ヲ受ケテ、天ト極リ無シ。顔ハ三十二ニシテ亡セシト雖モ、而モ亡セザル者アリテ存ス。一念萬年はレナリ。區區タル形骸ノ脩短ハ、當ニ論ズル所ニ非ザルベシ云」と。此の説之を得たりと謂ふべきだ。

右第十七章

【章旨】 此の章は、孔子が舜を大孝と稱せられた言を引いて、以て道の費即ち用の廣いことを明かにした。而して道の隱微は自ら其の中に在る。後の二章も亦然り。朱子曰く「此ハ庸行ノ常ヨリシテ、之ヲ推シテ以テ其ノ至ルコトヲ極メテ、道ノ用ノ廣キヲ見スナリ。而モ其ノ然ル所以ノ者ハ則チ體ノ微タルナリ。後ノ二章モ亦此ノ意ナリ」と。佐藤一齋曰く「此ノ章ハ卑近ヨリ高遠ニ進ムノ實行ヲ擧ゲテ以テ之ヲ證ス」と。

子曰、無憂者、其惟文王乎。以王季爲父、以武王爲子。父作之、子述之。武王纘大王王季文王之緒、壹戎衣而有天下、身不失天下之顯名。尊爲天子、富有四海之內、宗廟饗之、子孫保之。

【譯讀】 子曰く憂無き者は、其れ惟文王乎。王季を以て父となし、武王を以て子と

爲す。父之を作し、子之を述ぶ。武王は大王、王季、文王の緒を續ぎ、壹たび戎衣して天下を有ち、身天下の顯名を失はず。尊は天子たり、富は四海の内を有ち、宗廟之を饗け、子孫之を保つ。

【節旨】 子思が孔子の言ふ所の文王・武王の事を引いて、文王の至聖の徳、能く天命に協ひ、また武王が能く文王の事を繼述したことを言ふ。

【字義】 ○無憂 憂患即ち心配のないこと。胡海陵曰く「舜・禹ノ父ハ則チ瞽・鯀・堯・舜ノ子ハ則チ朱・均ナリ、惟文王ヲ無憂ト爲ス所以ナリ」と。○父作之 作は創め作す、之は王業を指す、王季が功を積み仁徳を累ねて周の王業の基を開いたことを謂ふ。しかし周の王業を創成したのは、大王古公亶父であるから、この父は祖をも兼ねたのである。それで物徂徠も「作ハ草創ヲ謂フ。王業ハ大王王季ニ創リテ武王ニ成ル、此ニハ止父之ヲ作ストイフハ、父ヲ以テ祖ヲ兼ネタル也」と解いてゐる。大王が王業を創めたことは詩經魯頌閟宮の篇に「后稷之孫、實維大王、居岐之陽、實始翦商」とある。○子述之 父の遺業を承け繼いで之を増し廣めること。前の父が祖を兼ねると曰へば、この子は周公をも包ねていつたのだ。○續 緒 續は音「サン」繼ぐなり。緒は音「シヨ」「イトグチ」と訓む、事業の未だ全成しないもの。

○戎衣 戎は軍の意、戎衣は甲冑の類をいふ。戦に赴く爲めに武裝をすること。壹たび戎衣すとは書經の武成篇の文で、武王が殷の紂王を伐つて牧野に戦つたことを指す。○不レ失ニ顯名ニ顯名は明かなる名譽。前に舜を稱するには「必得ニ其名」といひ、武王を稱するには「不レ失ニ顯名」と曰つたのは、蓋し舜は禪讓によつて天子となり、其の間に少しの無理もないから單に「得ニ其名」と曰つたのだが、武王は殷の紂王を伐つたので、他人ならば賊名をも受くべき筈であるけれども、天命を奉じ、民心に順つて仕たので、少しの私心もないところから、よく明かな名譽を失はなかつたと曰つたのだ。

【直解】 孔子の仰せられるに、堯・舜・禹・湯以下、多くの聖人もあるが、其の中で少しも心配苦勞の無い者は唯文王ばかりであらうか。文王は王季のやうな聖徳のある立派な方を父とせられ、武王のやうな天下を統一して天子となつた立派な人を子に持ち、祖父の大王、父の王季は功を積み仁を累ねて周の王業の基を開き創め、其の子の武王・周公は其の徳業を續ぎ述べて益、之を増し廣め、八百年の太平を開いたのである。かやうに父も子も皆徳が高く、業の盛んなのを見ては、文王の心は何の不足もなく、少しの心配もなかつたであらう。武王は大王・王季・文王の創始し建設した王業の緒を承け繼いで、其の達成に勤められ、殷の紂王の暴虐無

道を見兼ねて、民心に順ひ一たび身に甲冑を著け殷の軍と牧野に戦つて之を滅し、天命を受けて天子となり、天下を我が有とせられた。全體臣として君を伐つことは有るまじき事ではあるが、もともと天下萬民の爲めに暴虐の君を除いたのであるから、天下の諸侯も悉く歸服し、天下の萬民も盡く悦服するに至つたので、武王は身天下の顯著なる令名を失はないばかりでなく、其の尊いことは天子となり、其の富は四海の内を有ち、祖先即ち后稷から文王に至るまでの宗廟に祀られた人人の靈は天子の禮による所の祭祀を喜んで享け、子孫はまた永く天子の位を保有した。

【餘義】 無憂 郭兼山曰く「憂勤スル者ハ文王ナリ、憂無シトハ、後人ノ文王ヲ言フナリ」と。胡雲峯曰く「文王ハ父作シ、子述ブ。人倫ノ常ナリ。舜ノ父子ハ人倫ノ變ナリ。舜ハ惟父母ニ順ニシテ以テ憂ヲ解クベシ。此レ「無憂者、其惟文王乎」ト曰フ所以ナリ」と。物徂徠曰く「文王ハ身大難ヲ蒙ムリテ、憂アル者ニ似タリ。然レドモ歴世ノ聖人、未ダ父ハ賢、子ハ聖ナルコト文王ノ若キ者ハ有ラザルナリ。故ニ唯文王ノミ憂無キヲ以テ稱セララル」と。

武王末受命。周公成文武之德。追王大王王季。上祀先公。以

天子之禮。斯禮也。達乎諸侯。大夫及士庶人。父爲大夫。子爲士。葬以大夫。祭以士。父爲士。子爲大夫。葬以士。祭以大夫。期之喪。達乎大夫。三年之喪。達乎天子。父母之喪。無貴賤一也。

【譯讀】 武王は末に命を受く。周公は文武の徳を成し、大王王季を追王し、上先公を祀るに、天子の禮を以てす。斯の禮や、諸侯大夫及び士庶人に達す。父大夫たり、子士たれば葬るに大夫を以てし、祭るに士を以てす。父士たり、子大夫たれば葬るに士を以てし、祭るに大夫を以てす。期の喪は、大夫に達す。三年の喪は、天子に達す。父母の喪は、貴賤となく一なり。

【節旨】 周公が禮を制して、武王の繼述せし事を全うした事を言ふ。

【字義】 ○末 末年なり、晩年に同じ。鄭注には「末ハ猶ホ老ノ如シ」とあり。此の説に従へば「オイテ」と訓む。何れにても可なり。○追王 死後に王號を追贈すること。周の王業は大王・王季から始まつたからである。○先公 鄭注によれば、大王の父組紺より以上、后稷に至る十二代を指す。史記の周本紀によれば、后稷・不窋・鞠・公劉・慶節・皇僕・差弗・毀隄・公

非・高圉・亞圉・公叔祖類(組紺ノ別名)の諸侯を指す。○斯禮 葬式は死者の官位に従ひ、祭祀は生者の爵祿を以てするの禮。斯禮也以下は上文の注脚なり。○達 上から下に至るまで皆通じて然らざることなきをいふ。○期之喪 滿一年の喪(二等親ノ喪)をいふ。期の喪には二種あり。祖父母の爲めにするを正期といひ、伯叔父母・兄弟の爲めにするを旁期といふ。正期は天子諸侯と雖も、凡て其の喪に服すれども、旁期は天子諸侯は其の喪に服せず、ただ大夫は其の喪の期限を減縮して之に服す。故に「期之喪、達乎大夫」といふ。○三年之喪 一等親である父母・夫・嫡子などの喪をいふ。天子は此の喪服を降す(期限ヲ縮殺スルコト)ことはあれども、絶つ(全ク廢絶スル)ことはない。即ち庶人より天子に達して皆通行す。三年の喪期に就て、鄭玄は二十七月なりといひ、王肅は二十五ヶ月なりと曰つてゐるが、鄭玄の二十七月月説が正しいやうである。

【直解】 この一節は周公の事を言ふ。さて武王は晩年に天命を受けて天子となり、七年にして崩御せられたので、未だ禮樂の制作を完成するの暇がなかつた。そこで周公は幼主成王を輔けて政を攝し、文王・武王の徳業を大成し、父祖を王者の待遇にして古公には大王、公季には王季の王號を追贈し、それより上は先公即ち大王の父君(組紺)から始祖の後稷までを祀るに

天子を祭ると同じ禮を以てした。さて斯の葬るには死者の爵祿を以てし、祭るには生者の爵祿を以てする禮は、周公の創めて制定せられたものであるが、獨り天子だけに限つたものでなく、諸侯・大夫及び士庶人に至るまで通じて之を行ふやうにして、天下の人をして皆其の孝心を全うすることの出来るやうにしたのである。即ち父が大夫であつて子が士であつた場合に、其の父が歿した時には、其の葬式には大夫たる父の資格に相當する禮を以てし、あとに祭には士たる子の資格に相當する禮を以てする。又之と反對に、父の身分が士であつて、子が大夫であつた場合に、其の父が歿した時には、其の葬式には士の資格に相當する禮を以てし、祭には大夫の資格に相當する禮を以てする。其の他は之に準じて知るべきである。又喪服の制に就いて言へば、期即ち一周年の喪は、諸父昆弟の爲めにするので天子・諸侯は之に服しな

いが庶人より大夫に達しては皆之を行ふ。(但大夫ハ期限ヲ少シ減ズルダケデアル)三年の喪は下は庶人より上は天子に至るまで之を服し、特に三年の喪の内でも最も重い父母の喪は、身分の貴賤尊卑に關はらず、皆同様に之に服するのである。これ父母生育の恩は貴賤上下のへだてなく皆同様であるからである。

【考異】 末 明の方孝孺は此の末の字を未と改めた、是れは武王に弑逆の汚名を蒙らせたくな

いが爲めに立てた説で、武王は紂を亡ぼしたが、自ら天子の位に即かうとはせず、武庚祿父を周の都に封じて、己は其の監督者たる位置に立つた。それで若しも祿父が紂の過を改めたならば、己は下つて之に臣事するの志であつた。而るに武王崩じ、周公政を攝するに及び、武庚祿父の暴逆益甚だしく、殷の三監亦之れに背いた。是に於て始めて之れを討ち滅ぼして周の天子となつたのであるといふに在るが、此の説は蓋し方孝孺が時事を慨く之餘、曲けて説を爲したもので、従ふことは出来ない。末はすでに説明したやうに晩年の義である。武王晩年天命を受けて天子となり、後數年を経て崩じた。或は武王壽九十三、命を受けし時は八十有六なりともいふ。即ち文王が王業の基を建て、武王が之を繼ぎ、周公に至つて文王・武王の志を成し、王者の號を以て大王・王季を追稱し、上、先公を祀るに天子の禮を以てしたのである。

右第十八章

【章旨】 子思が孔子の仰せられた文武周公の事を引いて、以て其の能く中庸の道を盡されたことを明かにした。是れ亦費の大なるもので、帝王が中庸の道を體するには、當に文武周公を以て法と爲すべきである。

子曰、武王・周公、其達孝矣乎。夫孝者、善繼人之志、善述人之事者也。

【譯讀】 子曰く、武王・周公は、其れ達孝なるか。夫れ孝者、善く人の志を繼ぎ、善く人の事を述ぶる者なり。

【節旨】 孔子が武王・周公の達孝を稱せられし言を引いて、其の孝を盡す所以の者は繼述に在ることと言ふ。

【字義】 ○達孝 達は通である。天下の人が通じて之を孝といふの意、達徳・達尊の達に同じ。

○繼 繼承(ウケツク)する。陳櫟曰く「祖父、爲サント欲スルノ志アリテ而シテ未ダ爲サズ。子孫善ク其ノ志ヲ繼ギテ而シテ之ヲ成就ルヲイフ」と。○人 ここでは父祖を指していふ。

○述 祖述すること、敷衍すること。陳櫟曰く「祖父、已ニ爲スノ事アリテ、而シテ法ル可シ。子孫善ク其ノ事ニ因リテ而シテ遵ヒテ之ヲ述ブルヲイフ」と。

【直解】 孔子は更に武王と周公とを讚美して仰せられるには、武王・周公は、天下の人を通じて誰一人として其の孝を仰ぎ稱へない者はない。實に天下に通ずる達孝の人といふべきであ

らうか。

そこで前章に武王が大王・王季・文王の緒即ち事業を承継ぎ、周公が文王・武王の徳業を大成したと言つたのを承けて言ふに、さて武王・周公を達孝といふ所以は何故かといふに、夫れ孝は善く先人即ち父祖が成さうと欲して、而かも未だ成すことの出来なかつた志を継承して之を成し、善く父祖が已に成した事業の未だ盛んにならない所のものを祖述して之を恢いにし弘めるやうにすれば、人の子たる孝行は焉れより大なることはない。而して武王が大王・王季・文王の緒を繼いで天下を有ち、周公が文王・武王の徳を成し、先祖を追王したのは善く先人の志を繼ぎ先人の事業を述べ弘めることの最も大なる者である。是れ天下の人の通じて之を孝とする、即ち達孝として尊ぶ所以である。

【考異】 達孝 饒雙峯曰く、「達孝ハ是レ上章ノ三ノ達ノ字ヲ承ケテ言フ。言フココロハ其ノ孝ハ特ニ之ヲ家ニ施スノミナラズ、又能ク之ヲ天下ニ達ス。斯ノ禮ハ諸侯大夫及ビ士庶人ニ達ストイフガ如キハ是レ上ヨリシテ下ニ達ス。期ノ喪トイフヨリ天子ニ達ストイフニ至ルマデハ、是レ下ヨリシテ上ニ達ス。能ク吾ガ親ヲ愛スルノ心ヲ推シテ喪祭ノ禮ヲ制爲シテ、以テ上下ニ通ジ、人人ヲシテ其ノ孝ヲ致スコトヲ得シム、故ニ之ヲ達孝トイフ。所謂「徳教加ニ

於百姓、刑ニ于四海、蓋天子孝也」(孝經)トイフガ如キ是レナリ」と。物徂徠も亦略それと同じく「武王・周公定ニ喪祭之禮、達ニ諸天下、是廣ニ其孝於天下也。故曰ニ之達孝、朱熹謂ニ天下之人通謂ニ之孝、非矣」と曰つてゐる。饒氏が直接前章の三の達の字を承けて解いたのは、一寸巧な説き方のやうではあるが、其の三の達の字と達孝の達とは意味が同じでないから、従はれない。そこで夷考すれば、矢張り朱子の説の方が穩當のやうである。

春秋脩其祖廟、陳其宗器、設其裳衣、薦其時食、宗廟之禮、所以序昭穆也。序爵、所以辨貴賤也。序事、所以辨賢也。旅酬下爲上、所以逮賤也。燕毛、所以序齒也。

【譯讀】 春秋に其の祖廟を脩め、其の宗器を陳ね、其の裳衣を設け、其の時食を薦む。宗廟の禮は、昭穆を序づる所以なり。爵を序づるは、貴賤を辨ずる所以なり。事を序づるは、賢を辨ずる所以なり。旅酬に下上の爲めにするは、賤に逮ほす所以なり。燕毛は齒を序づる所以なり。

【節旨】 武王・周公の制する所の祭の禮を擧げて以て達孝を明かにしたのである。

【字義】 ○春秋 祖先の祭は春・夏・秋・冬の四回に行ふのであるが、春秋の二つを擧げて夏・冬をも含めたのである。春の祭を禘と曰ひ、夏の祭を禴と曰ひ、秋を嘗といひ、冬を烝といふこと、禮記の郊特性篇に見ゆ。○祖廟 祖先の廟。廟の數は天子は七廟、諸侯は五廟、大夫



天子七廟圖

は三廟、士は一廟である。禮記の王制篇に「天子ハ七廟、三昭三穆ト太祖ノ廟トニシテ七、諸侯ハ五廟、二昭二穆ト太祖ノ廟トニシテ五、大夫ハ三廟、一昭一穆ト太祖ノ廟トニシテ三、士ハ一廟」とある。○脩 鄭玄曰く「掃糞(サウヤ)ヲ謂フ也」と。しかし掃除ばかりでなく修繕をすることをも含む。

○宗器 鄭玄曰く「祭器ナリ」と。即ち祭の時に使用する尊・爵・俎・豆の類をいふ。これ等の祭器を陳ねるのは周禮宗伯肆師の職掌である。朱注には「宗器ハ先世藏スル所ノ重器、周ノ

赤刀(赤削)・大訓(三皇五帝の書)・天球(玉磬)・河圖ノ屬ノ若シ」とある。宗は「タフトブ」意で、



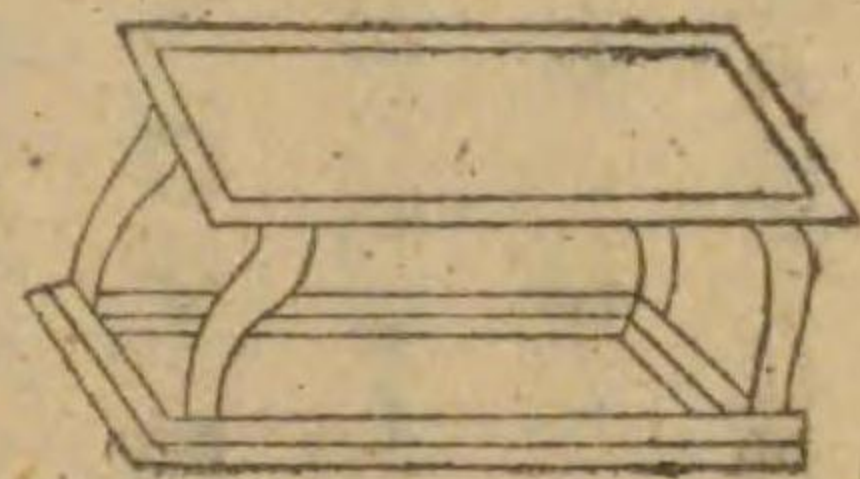
尊 犧



尊 象



爵

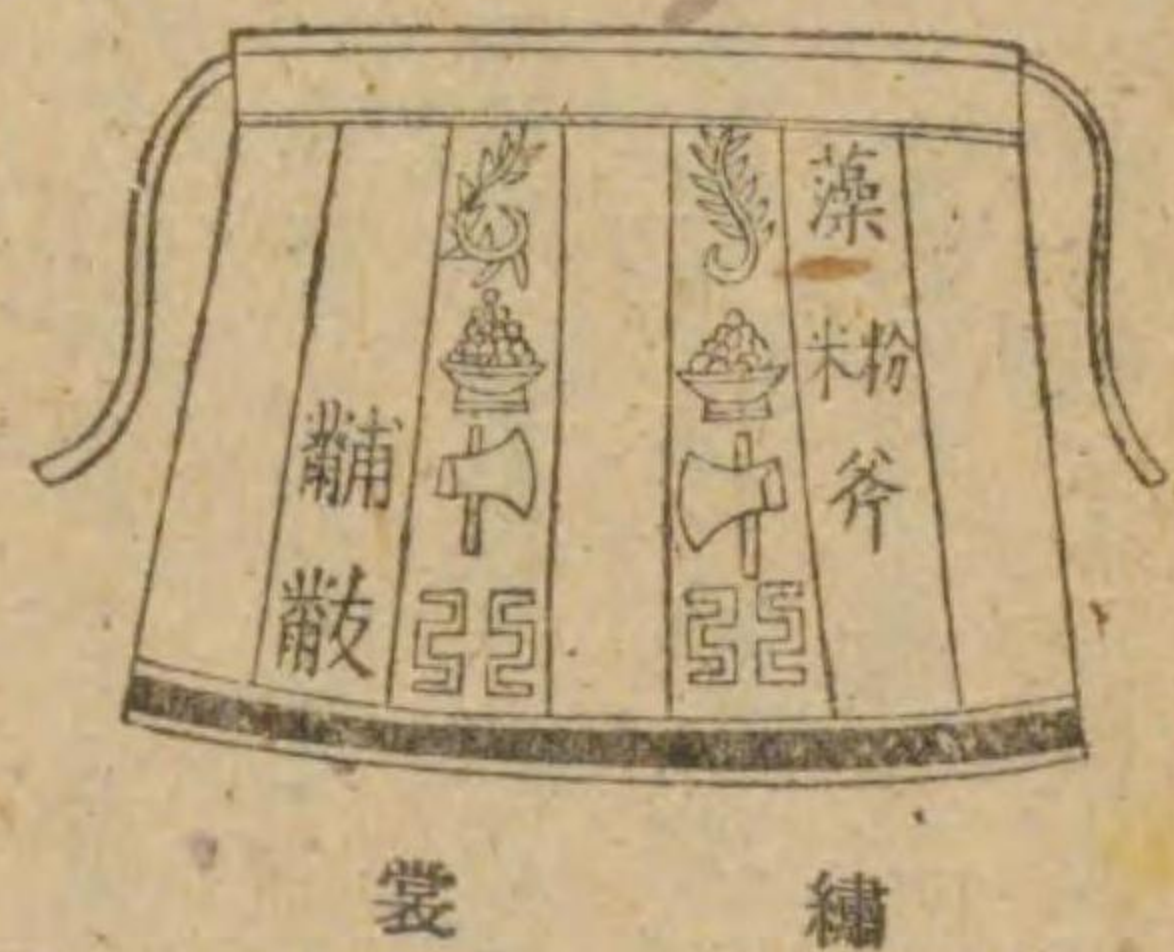
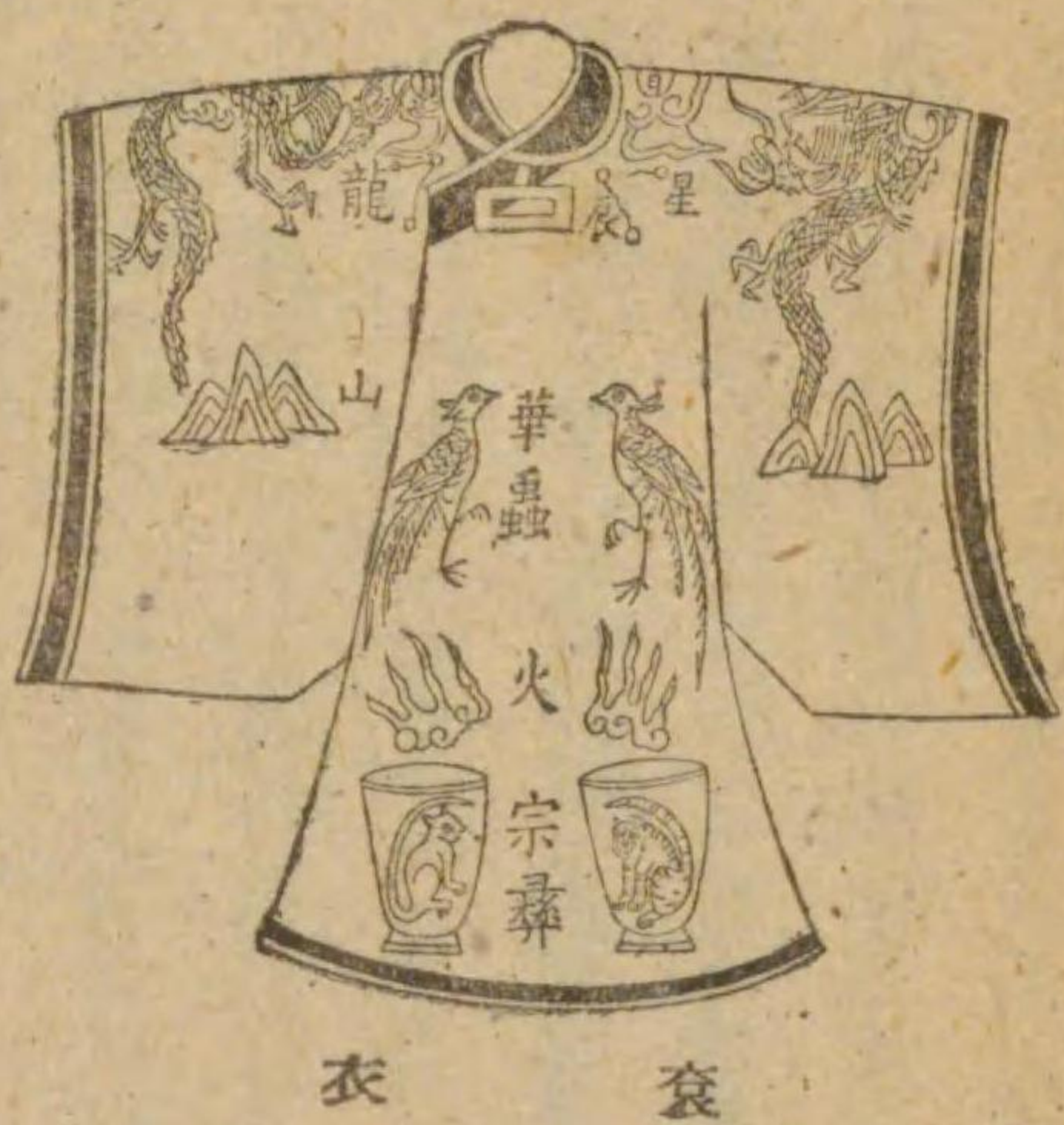


俎



豆

先祖から傳はつた重器の意であるから、朱子の説も一説として存すべきである。朱注は蓋し書經の顧命篇に「陳寶赤刀(赤削なり)・大訓(三皇五帝の書)・弘璧(大璧)・琬琰(圭の名)在_ニ西序、大玉・夷玉(夷は常なり)・天球(玉磬の名、其の色天の如し)・河圖在_ニ東序云云」とあるに本づく。○裳衣 先祖の遺した衣服。衣は上衣、裳は「ハカマ」の類である。入棺の際に棺に入れた殘餘を廟中に保存して、祭の時に之を取り出し、一は之を尸(カタシロ、形代)即ち祭る神の名代とするものに授け、其の他は之を廟中に陳列して神靈をして依る所あらしめ、又祖先を偲ぶ料とする。御供物など、祖先の靈が冥冥の裡から來つて之を享けられるものとは信じながら、なほ尸を設けて、之に事へること祖先に事ふるが如くするの



肥えて旨いから供へる、
 だ)スルノ類ノ如キ是レ也」とある。○序 順序次第を定める。○昭穆 宗廟の次序は太祖の廟は正面に在つて東に向ひ、其の左を昭とし、右を穆とする。昭とは昭明の意、其の廟が南向きで陽明に向つてゐるから名つけた。穆とは穆穆として深遠の意で、其の廟が北向きで陰幽であるから名つけた。父が昭であれば子は穆であり、父が穆であれば子は昭である。若し兄弟が俱に位に即けば同じ廟に入れる。例へば、文王が昭であれば武王は穆で、武王が穆であ

である。○時食 春・夏・秋・冬の四時の食をいふ。即ち其の時節に出来る折折の食物をいふ。朱注に「時食ハ四時ノ食、各其ノ物アリ。春ハ羔豚ヲ行ヒ、膏香ヲ膳(香は牛膏を謂ふ、膳は煎和する。春は羔豚が嫩か

ば成王は昭で、成王が昭であれば康王は穆である。此の如くにして子子孫孫此の順序で相承けるので、決して昭と穆とが混雑することがない。而して祭に與る子孫も亦昭と穆との順序によつて席次を定めるのである。○序ノ爵 爵は公卿・大夫・士をいふ。其の爵位によつて順序を立て、祭祀を助けさす。○序ノ事 事は祭祀の時の用事。朱注に「事ハ宗祝(宗は宗伯・宗人の屬、祝は大祝・小祝で竝に周禮に見ゆ)有司之職事也」とある。即ち或は祭を主宰し、或は祝文を読み、或は供物を供へるなど、其の諸役には輕重繁簡の差があるが、各其の才能に従つて其の事に任せしめる。○旅酬 旅は衆と同じ。酬は人に酒を勧める時、先づ自ら飲んで、後に酌んで獻するをいふ。酬は朱注に「酬導飲也」とあり。旅酬の禮とは祭の終らうとする時、神様の御流れ頂戴の意味で、主人側が先づ一杯を飲んで賓客に杯を勧め、又其の杯を受けて之を飲むので、之を導飲といふ。正賓は一名であるが、陪賓は多數あるので、主人側にも多くの接伴人があつて、皆それぞれ獻酬をするので旅酬といふ。旅酬の時に先づ主人の方と賓客の方とから若い子弟が一人づつ出て杯を取つて各其の長者に酬する。かくして祭祀の事を直接に務めなかつた末末の者までも、此の際に接待の手助けをさせて御流れを頂戴させるやうにするのは、即ち恩恵が賤者にも及ぶのである。○下爲上 下は幼者を

いひ、上は長者をいふ。○燕毛 燕は酒宴のこと。毛は毛髪の色をいふ。旅酬が終つて賓客皆退出した後、同姓の者即ち一族の者のみの宴會が廟のうしろの寢で開かれる。其の時には毛髪の色で長幼を別つて坐席の順序を定める。之を燕毛といふ。○齒 「ヨハヒ」と訓む。齡に同じ。

【直解】此の節から以下は繼述の中から特に祭祀の事を述べていふ。さて祭祀の禮について言へば、春・夏・秋・冬の四時には其の祖先の御祭を行ふ爲めに先づ祖先の廟を修理し掃き清めて、祭に用ふる俎豆などの器具を陳列し、其の祖先の遺物である衣裳を廟中から取り出して尸（カタシロ）に著せ、神をして依る所あらしめて、在すが如き誠を致し、其の他は之を廟中に陳列して祖先を偲ぶ料とし、廟の御供物は其の四時折折の品物を進め獻じて、死に事ふるこゝと生に事ふるが如きの敬を將ふ。さて宗廟で祭をする時の禮は、其の順序次第をいへば、太祖の廟は東向きで正面に在り、其の左を昭といひ、其の右を穆といふ。昭は南の方を向いて陽明（アカルイ）の意であり、穆は北の暗い方を向いて陰幽の意である。父が昭なら、其の子は穆、其の孫は又昭といふ順序に祭られるので即ち昭穆の順序を正して混亂しないやうにする爲めである。祭の時に其の祭を助ける公卿・大夫・士をば、其の爵位の高下によつて其の坐

席の次第を定めるのは身分の貴賤を辨別する爲めである。祭の時に執り行ふ事務の輕重繁簡の次第によつて、それぞれ其の人の才能に従つてそれに適當な職事をさせるのは、人の賢・不肖を辨別する所以である。祭の將に終らうとする時、同姓異姓の人人が神様の御流れの神酒を頂戴する禮がある。それは主人側の人先づ一杯を飲んで來賓側に勧め、更に其の返杯を受けて飲む、之を旅酬の禮といふ。此の時卑幼の者は各接待の手傳をして御流れを頂戴する光榮に與るのは、即ち恩恵が賤者にも及ぶといふ譯である。さて祭祀が全く終つて尸（カタシロ）や異姓の賓客が皆退出した後、同姓の一族が皆集つて更に宴會が始まる。其の時は頭の髪の色を見て眞白い者、半白の者、黒い者によつて長幼の序を定めて席次を定める。故に之を燕毛の禮といふ。即ち燕毛の禮は貴賤を論ぜず、年齢の順序によるのは長幼の序を教へる爲めである。

踐其位、行其禮、奏其樂、敬其所尊、愛其所親、事死如事生、事亡如事存、孝之至也。郊社之禮、所以事上帝也。宗廟之禮、所以祀乎其先也。明乎郊社之禮、禘嘗之義、治國其如

示諸掌乎。

【譯讀】其の位を踐み其の禮を行ひ其の樂を奏し其の尊ぶ所を敬し其の親む所を愛し死に事ふること生に事ふるが如く亡に事ふること存に事ふるが如くするは孝の至なり。郊社の禮は上帝に事ふる所以なり。宗廟の禮は其の先を祀る所以なり。郊社の禮、禘嘗の義に明かなれば國を治むること其れ諸を掌に示すが如き乎。

【節旨】前を承けて、繼述の善きことを結び言ひて、且つ禮制の治道に通ずることを明かにしたのである。

【字義】○踐_ニ其位_一 其は先王を指す。下の其禮、其樂、其所尊、其所親の其は皆同じ。踐は履なり。其の場所に坐ること。○所尊_ニ所親_ニ 尊ぶ所は先王の祖考を云ひ、親む所は先王の子孫民庶を云ふ。次章にも「親_レ親_ノ之_ノ殺_レ、尊_レ賢_ノ之_ノ等_、禮_所生_也」とある。龜井昭陽曰く「大學、君子賢_ニ其賢_ヲ而親_ニ其親_ヲ（大學解義七六頁）賢_レ賢_亦敬_レ尊_也」と。○死_レ亡_レ 死は新たに死んだばかりをいひ、亡は既に葬つた後をいふ。事_レ死_は葬_式を行_ふこと、事_レ亡_は後の祭祀を

營むことをいふ。事_レ死_{云云}の二句は論語、八佾篇の「祭_ル如_シ在_ス。祭_ル神_如神_在」（論語解義七七頁）と同じ意である。○郊社之禮 郊は天即ち上帝を祭る。社は地即ち后土を祭るをいふ。それで詳しくいへば郊社の禮は上帝后土に事ふる所以なりといふべきに、本文には上帝のみを云つて后土を云はないのは文を省いたので、鄭玄が「社祭_ニ地神_ヲ、不_レ言_ニ后土_ヲ、省_レ文也」と曰つた通りである。○禘嘗 禘は天子が太廟で五年に一回づつ太祖の自つて出た所の遠祖を祭り、太祖をも合せ祭るをいふ。論語の八佾篇（論語解義七五頁）や禮記の大傳・仲尼燕居の諸篇に見えてゐるものは即ち是れである。しかし四時の祭にも禘といふ名がある、即ち夏の祭をいふ。禮記の王制によれば春の祭は禘、夏のは禘、秋のは嘗、冬のは烝といふとある。そこでここに禘嘗とあるのは、上文に「春秋_ニ其_ノ祖廟_ヲ脩_ム」と曰つて、夏・冬を含めたと同じく、夏の祭の禘と秋の祭の嘗とを擧げて他の春の祭の禘と冬の祭の烝とを包ねたのである。【直解】さて祭禮には我が先王の坐位（祭ノ時、神明ニ向フ坐位）を履み、先王の平生用ひた禮を行ひ、先王の嘗て奏された樂を奏し、先王の尊ばれた所の祖先や賢者を尊敬し、先王の親まれた所の子孫臣民を親愛する。喪に居る時は新に死んだ先王に事へることは生きてゐる者に事ふるが如くし、葬祭の時には既に亡くなつた先王に事へることは存生の人に事へるが如く

する。是れ即ち善く先王の志を繼ぎ先王の事を述べるもので、實に孝の至といふべきである。天神を祭る郊祭、地祇を祀る社祭は、上帝と后土とに事ふる所以の儀式である。宗廟の祭禮は其の先祖を祀る所以である。天神地祇を祭る所の郊社の禮の意味、祖先を祀つて昭穆の順序を審かにする春秋の祭の意義を明かにすることが出来たなれば敬(上帝ニ事フルコト)と孝(祖先ヲ祀ルコト)とも亦従つて明かになり。國家を治めることは實に明かにして且容易であることは、譬へば之を掌の上に視るやうなものであらう。

【考異】 如レ示ニ諸掌一 鄭玄は「示讀、如下眞ニ諸河干一之眞。眞置也、物而在ニ掌中、易レ爲ニ知力ニ者也」といひ、朱注には「示與視同、視ニ諸掌ニ言レ易レ見也」とある。意義に於てさしたる差も無いから、何れに従つても可である。因に曰ふ、論語・八佾篇に「或問ニ禘之說。子曰、不知也。知ニ其說ニ者之於ニ天下ニ也、其如レ示ニ諸斯ニ乎、指ニ其掌ニ」(論語解義七六頁)とあるのは、禘の說の知り易くないことを言はれたので、此の一節は武王・周公が禮を制作された意義の深遠なことを述べたのであるから、其の説く所は固より同じではないが、其の效用の廣大なことを言つた點は、歸するところ同じである。

右第十九章

【章旨】 此の章は、孔子が武王・周公を達孝と稱せられた言を引いて、其の孝を盡す所以は繼述に在ることを言ひ、特に武王・周公の制する所の祭禮を擧げて以て其の達孝たる所以を明かにしたのである。

哀公問政。子曰、文武之政、布在方策。其人存、則其政舉、其人亡、則其政息。入道敏政、地道敏樹。夫政也者、蒲盧也。故爲政在人。取人以身、脩身以道、脩道以仁。

【譯讀】 哀公政を問ふ。子曰く、文武の政は布いて方策に在り。其の人存すれば、則ち其の政舉り、其の人亡すれば、則ち其の政息む。入道は政を敏くし、地道は樹うることを敏くす。夫れ政は蒲盧なり。故に政を爲すは人に在り。人を取るは身を以てし、身を脩むるは道を以てし、道を脩むるは仁